
if 明治興亡記

高田昇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

i f 明治興亡記

【Nコード】

N9920G

【作者名】

高田昇

【あらすじ】

ある人物の存在によって日露戦争の、日本の歩んでいく歴史が大きく変わっていく。

プロローグ

1906（明治38）年アメリカのポーツマスにて、500余日に渡り満州を舞台に繰り広げられた日露間の戦争は終結した。

ポーツマスで行われた講和会議の大間かな内容として、大日本帝国がロシア帝国に対して以下の要求した。

- 1、ロシアは、韓国に対する日本の主導権を認める事。
- 2、ロシアは、旅順・大連の租借権、長春以南の鉄道と付属利権を日本に譲渡する事。
- 3、ロシアは、日本に樺太島を割譲する事。
- 4、ロシアは、日本に賠償金15億円相当の金を支払う事。

この四つを主な講話条約の内容としては日本が完全優勢の条件であったが、ロシア帝国にとって屈辱的な講和条件をロシア全権ウイツテにロシア帝国皇帝ニコライ二世は受諾せざるおえなかった。

何故なら、海上では大日本帝国海軍の連合艦隊が、数で上回る旅順・ウラジオ艦隊と欧州バルト海から大迂回してきた本国艦隊ことバルチック艦隊を撃滅させた事によりロシア海軍を壊滅させた。

満州の戦線では、遼陽、奉天の両会戦でロシア陸軍に決定的大打撃を与えつつ、大日本帝国陸軍は損害を微少に抑え、膨大な物資、戦力、予備戦力を保持していた。また、帝国陸軍の別動軍はロシア帝国領、極東の大拠点ウラジオストクと樺太島を占領した。

奉天会戦で捕虜となった極東軍総司令官クロパトキンは奉天で降伏調印にサインした事により、満州に展開しているロシア陸軍は事実上壊滅した。

世界最強にして『世界の警察』と呼ばれたロシア陸海軍が極東の弱小国の日本に完膚なきまでに叩きのめされたため、ロシア国内では厭戦気分が高まり皇帝と政府に対しての国民からの支持は底落し、各地で反政府デモが発生した。ロシア帝国は日本以上に戦争継続が困難となり講和に応じ、結果外交面においても屈辱的な敗北をして、かくしてロシア帝国は列強から三等国に転落してしまった。侵略によって発展した帝国が侵略によって衰退してついったのだった。

この戦争で大日本帝国陸軍の完璧な勝利をもたらした大きな要因人物は、陸軍第三軍司令官の兒玉十三朗大将であり、この物語の主人公となる。

奉天 第三軍司令部

兒玉十三朗は新聞を読みポーツマス条約の締結と条約内容を読んでいた。その斜め横の机に座っているのは第三軍副司令官の乃木希典中将で、兒玉十三朗と同じく新聞のポーツマス条約の欄に目を通していた。

兒玉十三朗と乃木は無言で新聞を読むのとは対象的に司令部にいた将校等は喜び騒いでいた。

「いやあ、たいしたことのない戦争だったな」

「我が、大日本帝国は神の国じゃげ、どこの国にも負けるわけなか」

兒玉、乃木のうち沈黙を破ったのは兒玉だった。兒玉は椅子から立ち上がり、笑顔で将校達を見渡して言った。

「諸君、知つて通りに戦争は我が大日本帝国の大勝利に終わった。諸君の働きがこの勝利に導いた。この兒玉十三郎、改めて礼を言う。本当にありがとう」

兒玉はそう言つて参謀達に頭を下げた。

将校等は話しを辞め椅子から立ち上がり、兒玉に向かつて頭を下げ返した。

「しかし、戦争に勝つたと言つて喜んでばかりではいかん。この勝利に酔つていてはいずれ日本は平家のようになる。また、ロシアとの戦争に勝てたのは決して日本が神国で神仏様の加護があつたわけではない。開戦前からロシアに勝つための戦略、戦術を練り、士卒達の命を賭けて戦つた賜物だ。決して忘れないで欲しい」

そう言つと兒玉は全員の顔を見渡して椅子に座つた。

将校達は静まりかえり、各々の職務に就いた。

その後、兒玉十三郎は司令部を後にして各地に配置された第三軍隷下部隊の視察に行った。

各々の部隊を視察した兒玉が最後に訪れた部隊が奉天会戦中に第三軍指揮下に配属された秋山好古少将が指揮する騎兵第一旅団である。

第一騎兵旅団は、帝国陸軍が保有する二個騎兵旅団の一つで、騎兵部隊としては最大の単位である。

司令部が先に打診しておいたため、第一騎兵旅団の副官中屋新吉大尉が出迎えに現れた。兒玉は馬上で中屋大尉に軽く敬礼をしてから尋ねた。

「秋山少将は？」

「司令室に居ります」

「そうか、じゃあ案内してもらおうか」
兒玉は馬から降りながら言った。

「はっ、こちらでございます」

中屋大尉は兒玉と、従兵を司令室に案内した。

旅団司令室と言っても大層立派な所ではなく、戦場にほど近い村落の一軒の一室を好古が陣取っているだけだった。

薄暗い司令室に好古は一人であった。薄暗い部屋の中であらうそく一本を灯しながら小さな机に覆っている現地の地図と睨んでいた。

好古には参謀が一人も率ない。彼が陸軍士官学校に入った頃、騎兵は影の薄い兵科であり、能力も規模も世界水準を大いに下回っていた。

その世界一最弱な日本騎兵を好古は一人で改革を行い、約二十数年で日本騎兵を世界水準に引き伸ばした。その経緯があり好古は、あしが騎兵を作ったから騎兵のこと一番知っているから、参謀は要

らないよ。と自分以上に騎兵を知る軍人がいないと言って参謀は置かなかつた。

「秋山閣下」

と、戸の反対側から中屋の声が聞こえた。

「おう、来たか。お通ししてくれ」

好古は兒玉が来たと察して戸の向こうの中屋に言った。戸が開き、中屋、兒玉、その後から従兵の三人が入って来た。

「兒玉閣下、視察に来ると知っていたながら私自ら出迎えできなかつく申し訳ありません」

「いや、そんな事はいい。所で秋山少将、今朝の新聞で戦争は今日終わったが、それでいてなぜ地図を見て作戦を練っている？」

兒玉は尋ねた。

「戦争が終わったことは存じて下ります。斤候の報告では、ロシアの残存部隊が不穏な行動を立てております。その為の方が一に備えた作戦と報告書を作成しております」

と秋山は答えた。

奉天会戦後、ロシア陸軍の残存部隊が各地で日本陸軍と小規模な戦闘を続けたが、優勢な日本陸軍の前に日増しにロシア兵の死者が増える一方だった。

「そうかあ、で、彼らが作戦行動を起こすのは、いつ頃になるかね」

兒玉は眉を秘そた。

ロシア軍は決して終戦を知らないわけではなく、世界最強としての誇りがそれを認めず、そのため勇敢な日露両軍の若者達が犬死にしていることを兒玉は憤った。

「早くても一週間先に成るでしょう」

二、三日後の作戦行動を好古は否定した。

「わかった。その件はこちらも対策を練ろう、秋山少将、久しぶりに酒を飲もうか」

兒玉は話題を変えて、好古の好きな酒の話しに切り換えた。

兒玉は従兵に合図して、携えてきた日本酒を取り出させた。

秋山も喜んで話になり、数本のグラスを出して持ってきた日本酒をつぎ始めた。

「おい従兵、んな（お前）もそんなところにつ立ってないで一緒に酒を飲め」

兒玉は立っていた自分従兵に手招きをして呼んだ。従兵は喜んで来た。

兒玉は従兵のグラスに酒をつぎこんだ後、音頭をとったり、我が帝国の勝利に乾杯！と叫んだ。

兒玉が酒をなめた。他の三人は酒を喉に流しこんだ。

「兒玉閣下、一つ御尋ねしたいのですが」中屋が酒の勢いを借りて尋ねた。

「ああ、何かな」

「ロシアはこれからどうなるのでしょうか」

「そうだのう、ロシア帝国は国家としては末期的状况じゃった。

その所に今回の敗戦と15億円の賠償金を支払わねばならん。15億円たあ、ロシア帝国の国家歳入の四分の一じゃ」

そう言っつて酒をなめて一息つけて、話を続けた。

「わしゃあ、ロシアから日本を守るため陸軍を改革した。少くともロシア陸軍に勝らずとも劣らない実力、勝つとしても六分勝ちの出来る陸軍を作ったつもりだったが、ここまでロシア陸軍を完膚なきまでに叩き潰せたとは思ってもみなかったわ」 酒の肴のたくあんを一口かじった。

「むしろ、軍人は国家の敵を倒すのが仕事で、それだけが仕事じゃ。ロシアとの講和は政治家の仕事じゃ。しかし、賠償金まで取れるとは思ってもよらなんだわ。これからのロシアの国民は貧困に陥ると考えているよ。それからなあ中屋、これからが戦争以上に大変になるかもしれんぞ」

「それは、どういうことですか？」

中屋は尋ねた。従兵もこれから兒玉が語る話しに耳を傾ける。

「さつきも言ったが、多額の賠償金を支払った、そのせいで多くのロシア国民は貧困に苦しむ『こうなったの日本のせいだ』と言ってな。今度はロシア国民が一丸となって日本憎むことになる。ロシアが再統一されたあかつきには隙あらば日本に対決するかもしれない」

「秋山少将、貴方はどう考えとるかね」

兒玉は視線を秋山に移した。

「閣下と同意見です。もし、日本が賠償金を得なければロシアは恐らく社会主義国家に生まれ変わる筈でしたでしょう。しかし、賠償金を支払うという現実では、これからロシアの社会秩序が大きく乱れるでしょう」

酒を飲んでいる秋山だが、話は冷静だ。最も彼はいついかなる時も水筒に詰めた酒を飲むこととで有名だ。

「閣下、最後にもう一つ御尋ねします」

「ああ、いいよ」

「これからの日本の敵はどの国になるのでしょうか」

「アメリカだろうなあ。あの国はロシアとの戦争の仲介を買ってでたのは国際的発言力を得るためだけではなく、ロシアの満州進出を阻止したいからじゃ。ロシアの満州進出が失敗した今、満州は空き家も同然だ。当然日本は黙って見て見過ごすはずはない。ロシアに変わって進出するはずじゃ。アメリカもロシアという大国がいなくなつた今満州に進出してくるだろう。そうなれば、いずれ日本と衝突するはずじゃ」

「仮にアメリカと対決するならば、日本は勝てるでしょうか？」

兒玉がグラスを置いて、たくあんをまた一かじりして、一息ついてから言った。

「今の現状ままでは色々な面で完全に劣る。勝つには日本のあり方を変える必要がある」

「やり方を変える？」

中屋と従兵は顔を見合わせて頭を傾げた。

「口で言えばきりがないがな、しかし、そうしなければ日本はいずれ平家になる。『平家を滅ぼすものは平家』、『日本を滅ぼすものは日本』と言うことになる」

兒玉は酒をなめた。他の三人はグラスの酒を飲み干していた。

「御一新（明治維新）の頃からの癖での。飯や酒はちびちびと味わって食っていかんと落ち着かんでいかんわ」

そう言っつて兒玉は立ち上がり窓を見た。外は日が沈み暗くなっていた。月日は10月、満州の大地はとても寒い。酒が効いてきて兒玉の脳裏に若き日々の出来事が走馬灯のように駆けめぐってきていた。

第一話：逆賊転じて

明治維新

19世紀の時代、日本は大きな転換期を向かえていた。中央・地方行政、外交政策等の改革を行い西洋的國家体制を有する新國家へと変貌させていくのであった。

このため、明治元年、戦争が起きた。交戦勢力は、旧徳川江戸幕府と新たに政権を得た薩長土肥から成る新政府である。本格的な戦闘が1月27日、山城国（現京都、南部郊外）鳥羽・伏見で起きた。戦いは五千の新政府軍が一万五千の幕府の大軍に対し優勢に戦いを進め、翌28日、新政府軍に官軍（天皇の軍隊）の証たる錦の御旗が掲げられ幕府軍の敗退が決定的となり30日には幕府軍は総崩れとなった。

鳥羽・伏見の戦いの勝利により新政府軍は名実ともに官軍となり、旧幕府は朝敵となった。

官軍は『東征軍』を編成し朝敵討伐のため江戸へ向けて進軍。戦線は東へ移っていった。

4月5日、官軍、東征総督府参謀、西郷隆盛と旧幕府全権、陸軍総裁、勝海舟との交渉が行われ、5月3日、江戸城は官軍に無血開城されるも戦争は終結の気配をみせなかった。

戦線は中部・甲信越・東北と戦争は本州全土と拡大された。

北陸鎮撫総督府、山県狂介と黒田了介は北陸方面の新政府軍を率いて越後国長岡藩に侵攻した。

10月には長岡藩との攻防の末越後を勢力下に置き、黒田は山県に主力を預け、自分は東北方面の援軍に向かった。山県も本来なら東北方面に軍を移動済みのはずであった、が彼は越後に止まるざるおえなかった。

山県は越後に来てから不幸が付きまどっていた。

明治元年、越後国長岡藩領小千谷にて新政府軍軍監岩村精一郎と長岡藩家老河井継之助との交渉が行われたが、岩村が河井の嘆願を一掃したことにより、新政府軍と長岡藩との戦争が始まった。

山県は戦争は早急終結すると推測したが、長岡藩の家老河井継之助による軍事改革により、長岡藩の軍は近代装備と編制により、装備と質によって新政府軍と互角に戦うことが可能となった。また、プロイセン（ドイツ）人のスネル兄弟を通じて、当時日本に三挺しかなかったガトリング砲を二挺購入していた。

この河井の軍事改革により山県の予測はハズレ新政府軍は多大の犠牲を出した。長岡城を奪取するも奪還され争奪戦が繰り返され、さらに他の戦線でも一進一退の戦闘が六ヶ月間続くこととなった。

10月に多大な犠牲を払った末、越後国を新政府の勢力下に置くも、長岡藩の残存勢力が新政府軍に遊撃戦^{ゲリラ}を展開され、新政府軍は越後に釘付け状態に陥った。

長岡城

一室に山県狂介がいた。そこに彼の部下の阿達嘉久が入ってきた。

「山県さん、兒玉が死んだと聞いたが？」

阿達は山県に尋ねた。

「いや、たしかな情報ではないのだ、あくまで噂だ。先日の戦で死んだと、わしも耳にした」

山県は筆を降ろして阿達に視線を移した。

「噂か、事実ならどれだけ良いことか」

そう言って阿達は腰を床に降ろした。

「まいったくだ、奴は手強い。兒玉十三郎には西洋式の軍隊や戦術はまったく通用しない。むしろこっちが劣勢に追い込まれる始末だ」

そう言って山県は机に置いてあったお茶を一口喉に流し込んだ。

「しかし、奴は惜しいのお。幕府との戦はじきこちらが勝つ。そうすれば、兒玉も降参し、いづれは我が軍に置けばどれだけ心強いことだったか」

山県は呟いた。

数ヶ月、山県は長岡藩残存勢力を率いる兒玉十三郎と戦い、兒玉を恐れる一方で兒玉の持つ実力が、官軍のどの将にもないものを持っていると感ずいていた。

「奴は死んだるかもしれません。して、どうします？ 兒玉が死んだとしたら敵は自然消滅するはず、越後にいつまでも居ってはいかん。会津に向かうための支…」

その時だった。ダダダーンと無数の銃声が鳴り響いた。

敵襲だあ。と、外で誰かが叫んだ。

「敵襲？ 主力は他方面で討伐作戦に向かって今は二個中隊しかない」

「兒玉は死んでいないのか？」

突然の事で、二人は動揺した。

「敵襲！ 敵は60前後とおもわれますが、突然の奇襲で我が方は防戦一方です」

一人の兵が息を切らせて報告に現れた。

そして、また、今度は複数の足音が聞こえてきた。それに伴い、銃声と悲鳴が連鎖していた。山県達の前に複数の敵兵が現れた。全員が山県達に銃口を向けている。中には新政府軍の軍服も着ている者も二、三人いたが彼等と同様に銃口を向けていた。

「何者だあ、お主等は！」

山県は立ち上がって叫んだ。しかし、兵等は一言も喋らず、銃口を向けていた。その兵の中から一人の男が前に出てきた。男は二十代前後に見えるが、口の周り顎の下の不精髭のため大体の年がわからない。

「山県狂介ですか？」

男は尋ねた。

お前は何者だ。と、阿達が尋ねた。

兒玉十三朗と、男は名乗った。山県と阿達は驚きを隠せなかった。兒玉十三朗という男は指揮と統率力から年輩と思っていたが、兒玉と名乗る男は若者であった。

「兒玉だと？馬鹿な！お主の様な若造がか！？」

山県が言った。しかし兒玉には彼等との会話に付き合う暇はなかった。外では銃撃戦が続いていたが、二個中隊の兵隊達も城内の事態に気付き始めていた。しかし、敵との交戦のため救助に出られなかった。

「貴方方に同行を願います」

兒玉の合図で彼の部下が前に出て山県等を拘束した。彼等は山県等連れ部屋を出た。廊下には数人の新政府軍兵士が血を流しが倒れていた。

城内のとある一室の戸を開けた。そこには床の板がはがされ、数人が同時に入れる大穴が空いていた。

彼等は大穴に入り込んで長岡城を脱け出した。その後、城外で銃撃戦を続けていた兒玉の兵等は撤退した。

山県は兒玉達が根城としている人里離れた部落に連れこまれていた。

山県の前に一人、兒玉十三朗がいた。

先に口を開いたのは山県だった。

「兒玉、あの時長岡城でわしを殺せたはずじゃ、しかし、わし等をここに連れてきてお主だけがわしの前にいる。お主一体何を考えちよるんだ」

と山県は言った。

「あなたを殺した所で、全ての戦が終わらなければ、勝つわけでもない。私だけ一人勝ちしていても幕府方の負けは変わりません」

と兒玉は一息いれて、話しを続けた。

「本当は幕府方が負けても私等は戦い続ける所存でしたが、しかし、そのことがはたして、この国のためになるとは思いません」

兒玉は話題を変えた。

「外にいる私の兵達は皆、百姓に銃を持たせて訓練させました。もはや、武士や刀の時代は終わりです。銃を持たせ訓練させれば、どんな者でも立派な兵隊になります」

山県は驚いた、彼は長州の出身で高杉晋作が組織した『奇兵隊』

と言う、武士、農民の身分を問わない軍事組織に入隊し頭角を表し今の地位がある。そして、彼は戦後、国民から成る国軍の編成のため『徴兵制』の思案をしていた。

「お主、その考え、一体誰から教わった」

「？、一人で考えましたが、まあ話しがズレましたが、本題に入りましょうか。私は貴方のコネで私を新しい国軍の将にさせて欲しいのです。」

山県は深く落胆して溜め息をはいた。この事のためだけに多くの味方の兵士が犠牲になり、膨大な時間と物資を費やした末に捕まってしまった。

「兒玉よ、お主はよくわしを驚かせるのお」

「しかし、貴方は私の実力を良くご存じのはずでしょう」

山県はこれを兒玉の講和条件と読み、また、山県は兒玉の話す事、考えている事には非の打ち所がなく魅力があった。

「わかった。だが、しばらくの間はわしの下で働いてもらう」

この山県の一言と兒玉の承認によって越後の戦いは終わった。

戦争そのものも翌年の明治二年、5月に五稜郭の戦いによる官軍の勝利により戦争は終わり、新政府は名実ともに日本の統治権を得る。

第一話・逆賊転じて（後書き）

日付けは旧暦ではなく太陽暦をとりました。

第二話：ガットリング砲（前書き）

ケータイの方では、黒木^{ためとも}為？の『とも』という漢字ができません。御了承ください。パソコンの方では『とも』の漢字が出ています。

第二話：ガットリング砲

明治二年

山県狂介は『有朋』と改名し、国軍建設のため欧州へ渡り、各列強国の軍事制度や軍隊を視察し、翌年の8月に帰国の途に就いた。

渡欧中、常に山県の側に兒玉十三郎の姿があつた。

山県は部下の案に横槍をいれる事で有名であるが、兒玉の横槍はそれ以上であつた。そして今日は、徴兵制について話し合つていた。

「山県さん、私はこの徴兵案には賛同できません」

と兒玉は山県に言った。

何故だ。と山県は不満げに尋ねた。

「いえ、徴兵案自体には問題ありませんが、付け加えです」

「付け加え？」

兒玉が言うには陸軍の兵卒の多くは徴兵によつて初めて銃を握る百姓が主で、3年間兵役を送り、有事の際は彼等を軍主力として戦場に送ることになる。彼等の中には兵役を1年も満たさない新兵も居り彼等も戦場に投入することになるが、新兵は決して戦場では華しい活躍は期待出来ず、むしろ足手まといの鳥合の衆と断言した。

つまり、兵役を1年も満たさない兵は『兵』としての即応力に劣

ると言つ。

そこで、兒玉は新兵の即応力を養つたため5日に1度、18歳の徴兵対象者を部落の神社や寺等に集め、銃訓練、部隊訓練を行わせるべきと述べた。

兒玉はこの案の採用を強く勧めた。先の北越戦争の際、兒玉は新政府軍と戦つたため私軍を編成した。兵の主体は百姓であり、彼等を二ヶ月間訓練させて戦場に臨んだが、本格的に『兵』として動き出したのは長岡藩軍が越後を撤退した後だった。この間に兒玉は自軍の3分の2の兵を失つていた。

山県は兒玉の付け加え案に難色した。予算がかかるからである。明治初期の新政府は予算歳入の宛てが乏しく、軍事以外に教育、交通網の整備等にも膨大な予算を注ぎ込んでいた。

しかし、大きな息を吐いて山県は「良く、わかつた」と言つて兒玉の案を採用させた。

兒玉は山県の渡欧に同行し、欧州の軍事学を寝る間を惜しんで学び、結果、一を知り十を知る勢いだった。また、欧州の軍学と自分の用兵術を加えた新しい兵術を思案し、それを聞いた山県や欧州の高級参謀は舌を巻くほどだった。

明治初期の日本政府には政府直属の『国軍』が存在せず、『廃藩置県』まで存在した各藩が保有した藩軍しかなかった。明治元年、『天皇及び御所の警護』のため、薩摩、長州、土佐の藩軍を政府に献

兵し、政府直属の『御親兵（後の近衛師団）』を創設し、御親兵を軸に明治四年『鎮台』を設置した。

鎮台とは、外征を目的とせず明治維新により混乱した社会の治安維持を重点に置き、明治四年6月に東北地方に東山道鎮台、九州地方に西海道鎮台の二個鎮台を設置。

同年10月には、『廃藩置県』の施行により先の二個鎮台を廃止し再編。鎮台の数も増やし、東北鎮台、東京鎮台、大阪鎮台、鎮西鎮台の四個鎮台が設置された。明治六年、さらに、名古屋鎮台、広島鎮台の二個を増やし、六個軍管区、十四個師管区（連隊）体制に増強された。しかし、あくまで『鎮台』は国内の治安維持を重視されており、規模や質では欧州列強の軍とでは、赤ん坊と大人の様な差であった。

明治五年、御親兵は『近衛』に、鎮西鎮台は『熊本鎮台』と改称された。

明治六年、兒玉十三郎は兵部省、陸軍省におり、部隊勤務ではなく事務官として日々の職務に勤めていた。

「部隊勤務ばしたいのお」

彼は陸軍省近くの平川町五丁目の一軒屋に婆やを一人雇って住んでいた。

休日になると、兒玉は飼犬を連れて歩きながら、愛読書の『北越軍談』や『太平記』などの軍記物語を好んで読んでいた。

そんなある休日、兒玉はいつも通り、犬を連れて歩きながら読書して帰宅した。

「帰ったぞ」

と兒玉が玄関口で叫ぶと婆やの返事がくるが、

「おお、帰ってきたか」

と婆やではなく他の聞き覚えのある返事が返ってきた。

「山県さん、来てたのですか」

兒玉は山県の声が聞こえた茶の間の方に行った。

茶の間には山県が座っており、その膝の上に5、6才の男の子が座っていた。

「この子はお主の倅か？」山県は尋ねた。

「いや、私のおんづ（弟）です。」

兒玉は山県の膝に座っている弟を自分の所に寄せた。

「しかし、どうしたのですか。山県さんが私の家に来るとは」

「わしも暇をしとってな」

と言って、山県は懐から一通の封筒を出して兒玉に渡した。

兒玉は封筒の中身を覗いた。そこで、一番に目にとまったのが、
『…兒玉十三朗少佐…近衛第3番大隊長二任ズル…』と書いてあつた。

皇居の側に近衛の駐屯地があり、そこに近衛第3番大隊が駐屯していた。

ここで兒玉は、生涯の友となる同部隊第1番大隊長少佐、黒木為^{ため}と^{とも}に出会う。

黒木は薩摩国鹿児島城下加治屋町猫之薬小路、薩摩藩士帖為右衛門の三男として産まれる。

先の戊辰戦争の際は薩摩軍4番少隊長を勤め鳥羽・伏見の戦いで鳥羽街道で新式銃装備の幕府軍に対し、黒木率いる部隊は旧式の銃で戦い、的確な指揮により見事幕府軍部隊に集中射撃を喰らわせ幕府軍部隊を退かせた。その後、宇都宮城攻防戦の際は官軍（薩長軍）の事前射撃をしないうちに黒木は自分の部隊を先導し堂々と城壁にとりつくという無鉄砲な行動をとり、結果的には、数で勝る幕府軍を敗走においやった。

黒木と兒玉には一つにして大きな共通点が存在した。少数の部隊で大多数の敵を打ち破るという事だった。

日本史の例をあげると、源平合戦の一つ、一ノ谷の戦いで源義経率いる少数の騎馬武者による鶴越の逆落としによる奇襲攻撃や、鎌倉幕府末期に登場した楠木正成の奇襲戦法のように、日本の古典的

英雄の様な戦いを行った事だった。

二人はよく酒を酌み交わしながら、これからの日本の軍隊について、新しい戦術について自分達の知識の限り話し合った。

一つ例を出すと、ある日、

「のう黒木、ガツトリング砲を知っとるか？」

と兒玉は黒木に言った。

「ああ、連発式の銃の事か」

と黒木は言って兒玉の杯に酒を注いだ。

ガツトリング砲とはガトリング砲の事で当時の日本ではそう呼称していた。

「あれを各歩兵連隊の各部隊に配備して、さらに鎮台直轄の独立連隊を創れば良いと考えとるんだ」

兒玉はそう言っ杯に酌まれた酒をなめた。

「しかし、ガツトリング砲とはなあ」

黒木はガトリング砲の威力について実感が湧かなかった。黒木だけでなく日本軍全体はガトリング砲の評価が低かった。北越戦争の際、長岡藩家老河井継之助は二挺のガトリング砲を購入し山県率いる官軍兵士を大勢薙ぎ倒した。しかし、山県はガトリング砲の威力を肌身を持って感じたが、その後のガトリング砲の軍で有効活用し

ようと考えず、陸軍卿となつた今も考へてはいない。

「惜しいんだよなあ。ガツトリング砲はわしも長岡で戦つてたときにちよした（さわる）ことがあつたが、ありゃあ、ばかにひどい兵器だつた。鉄砲玉がどつとでてなあ、そのとたん、突撃してきた敵兵共が全員死んでしまつたよ」

と兒玉はかつての体験を語りガツトリング砲の威力を語つた。

ほう、と黒木は頷いて酒を飲みつつもその目は真剣そのものだつた。

「ガツトリング砲を1個鎮台や近衛に少なくとも100挺は欲しいのお」

兒玉はそう言つて酒をなめた。

「つまり訓練などを加えて約800挺は必要か、多すぎるのお」

と黒木は言つた。

「しかしのお、黒木い、信長が長篠の合戦で武田騎馬軍団を破つたのは当時の新兵器鉄砲を金も惜しまずに3000丁揃えたからではないか、戦に勝つには新兵器をどつと揃え、新戦術を駆使しなければいけんぞ。本当は2000挺と言いたいんだがなあ」

兒玉は酒の肴を箸でつまんで口に運んだ。

「それになあ黒木、今の軍の目的は国内の治安が目的だがいずれは清国や欧州列強国と戦うことになるはずだ。まあ、いずれはだが、

今のうちから世界の新兵器を購入し、それに合う新戦術を練らねばならん。ガツトリングについてはもう、わしの頭にその運用法が練ってある」

と言つて、黒木に戦術案を話した。

「…確かに、後は実戦で試すのみだな」

「まあ、そういうわけだ、よし！明日にでも山県さんにこのガツトリング砲の意見書を携えて来るか。」

と、いう具合に兒玉と黒木がそれぞれ考えた案を山県に提出し予算の面で彼を困らせたが、兒玉の強い影響もありそのことが無理を押し採用されていった。

第二話・ガツトリング砲（後書き）

第三話：二人の兒玉

日本の新時代・明治

月日が経つにつれ、新国家を作り上げる者、それに従う者達とそれによって身分を失った士族との溝は深まっていた。

明治政府は新国家建設のため、これまでの士農工商の身分を無くし、名目上の四民平等を掲げ大名、武士の階級を廃止し、元あった身分を問わず華族、士族とした。その後、秩禄処分により、士族の家計を圧迫され廃刀令の施行による武士の特権を剥奪された。この事は、平清盛から七百年間も続いた武士の時代の完全な終焉を意味していた。

文明国家は貿易によって栄える。日本も殖産興業に力を注ぐも欧州列強との対等な貿易は行えず、明治維新により西洋技術を東アジア国家で初めて導入した日本だが、列強国の視点からでは、『発展途上国の一国』に過ぎなかった。

この事により明治政府は隣国の李氏朝鮮に目をつけた。この頃の朝鮮は、日本の江戸時代のように鎖国政策と封建的身分制度が数百年間も続いけられており、日本と朝鮮の国力の差は歴然としていた。明治政府は国力の促進のため、政府は朝鮮に開国を求めた。しかし、朝鮮側は今までの自国の文化を放棄し、西洋文化を取り入れた日本を軽蔑しはては『猿』と罵り日本の要求を退けた。

朝鮮の対応により明治政府内では『征韓論』が沸き上がった。しかし、『征韓論』は朝鮮の日本に対する対応による報復措置ではなく、あくまで開国を要求する手段であり、『征韓論』を主張する

主要人物は西郷隆盛、江藤新平、後藤象二郎、板垣退助、副島種臣らであり、これに異を唱えるのが欧米視察から帰国した西郷の親友の大久保利通、木戸孝允、岩倉具視や伊藤博文、大隈重信、黒田清隆等が対立し、結果、西郷、江藤、板垣等『征韓論』派六百余名は明治政府から去って行った。この一連の流れを『明治六年の政変』と言う。

西郷隆盛が明治政府から去ったことにより、士族の不满は一層募り、さらなる追い討ちに先に記述した秩禄処分や廃刀令が重なり、反政府の気運は更に高まり、政府と士族は互いに相手を滅ぼそうという一触即発の事態に陥り、この事が後に、日本最後の内乱に発展していく。この事態が後に、日本最後の最大の内乱に発展していく。

『明治六年の政変』により下野した江藤新平は九州の旧佐賀藩で征韓党が政府に対する反乱計画の企てを阻止すべく憂国党の島義勇と共に佐賀に帰郷するも、島が政府が征韓党の反乱計画を察知し軍の出勤を計画していることを知り、そのことを島が江藤に知らせたら「最早戦は避けられぬのか！」と叫び拳を床に叩いた。

そもそも江藤は、佐賀士族の反乱計画阻止する身であったが佐賀士族達から征韓党の首領推薦されていた。江藤は政府の行動に対し、自らの運命を佐賀士族と共にすることを決意し、江藤新平は征韓党党首となり、政府に対して、初の大規模な不平士族の反乱を起こした。

政府との直接衝突は明治七年2月15日、佐賀県権令岩村高俊とその護衛のため数百名の隠る佐賀県庁佐賀城を包囲。

2月19日、佐賀討伐発令、前日14日に横浜を出航した内務卿大久保利通率いる鎮圧軍が博多に到着する。

この鎮圧軍の中に一際注目を集める部隊が存在した。

その部隊は千名にも充たない大隊弱であるが、ガトリング砲を集中配備された独立実験部隊である。

『独立ガツトリング砲隊』それがこの部隊の名である。隊長は石本謙九朗という陸軍大尉である。彼は北越で、ガトリング砲の威力を肌身をもって味わい、右足に三発の銃傷を受けた。また、兵学にも精通しており、そこを独立ガツトリング砲隊創設に携わった兒玉十三朗の目にとまったのであった。

政府軍の攻勢は22日に開始された。

独立ガツトリング砲隊は各中隊ごとに散開され、主たる場所に配置された。佐賀県鳥栖市近郊の朝日山にて、鎮圧軍に雄叫びを挙げ、突進してくる佐賀士族にガツトリング砲は火を噴き、『タタタツ』と一定の銃音が響き渡り一連射撃が終わると突っ込んで来た佐賀士族はその全てが倒れ屍の山を築き、血の河が流れ出た。そのガトリング砲の威力を目にした鎮圧軍のガトリング隊以外の将兵達をも騒然とさせた。一挺のガトリング砲だけで鎮圧軍に対する佐賀士族の突撃が大損害のもとで断念させられ、この現象が散開していた各ガトリング隊で起こり、朝日山の土は大勢の佐賀士族の血を吸い込んだ。この数時間の戦闘で戦いの勝敗は決し、以降鎮圧軍はガトリング砲の援護のもと掃討戦に以降した。

「今頃はガツトリング砲隊が佐賀士族をうちまかしているなら、わしの大隊を出さなくてよいのだが」と、兒玉十三朗は一人呟いた。彼は青山練兵場の場外の練習場で青空を見上げながら佐賀の戦況を予測していた。彼の部隊近衛歩兵第2連隊第3大隊にも出動命令が下され、出動待機中であつた。

「後は、石本が戻つたら奴の報告書を見て浮かび上がった問題点の改善と新戦術を……」

兒玉は途中で口を止めて、目を閉じて呟いた。

「皮肉だあ、列強から国を守るためガツトリング砲隊を作つたが、ガツトリング砲の弾を最初に喰らつたのが日本人だとはな……」

数日後、江藤新平、島義勇等が捕えられ斬首に処せられた。

その後陸軍首脳部からガツトリング砲の威力が認証され正式に各鎮台直属のガトリング砲大隊の設置と各歩兵連隊にも数挺のガトリング砲が配備される計画が立てられ、更に国産ガトリング砲の製造にも踏み切つた。

佐賀の乱に熊本鎮台兒玉源太郎大尉が従軍していた。彼もガツトリング砲に魅せられた一人だつた。

「ガツトリング砲、確かに凄い兵器だ」

兒玉源太郎には並外れた才能がある。佐賀の乱の後、23の年齢で熊本鎮台准官参謀となり、二年後の明治九年、神風連の乱が起こり、

鎮庄後上層部から『兒玉少佐八無事ナルヤ』という連絡が届いた程であった。

彼は昔から特別な教育を受けてきた訳でなく、むしろ、生活が辛く苦しい少年時代を送っていた。嘉永五年周防国都濃郡徳山村の中級武士兒玉半九朗の長男として産まれた。源太郎が5歳の頃父と死別する。幼少の身であり家督を継げず、姉婿の次郎彦のもとで養育を受ける。源太郎は次郎彦を本当の兄や父と思慕うも13歳の時に次郎彦は左幕派により殺害され、兒玉家の家録が失われ一家は困窮の淵に立たされた。

4年後、明治維新が起きた。彼は、献効隊半隊士令として従軍これが縁で源太郎はその後新設された陸軍に入り今日にいたる。

『西郷が兵を挙げる』この噂が九州、東京と広がっていった。

陸軍内部では特に薩摩士族との戦いが起こると高い確率で予想されていた。

『兒玉十三朗が熊本鎮台に来ると言うことは、薩摩との戦に備えるためだ』と多くの将校が囁いていた。この頃、兒玉十三朗は陸軍での評価が急上昇しており、各連隊対抗の模擬演習でも最高の負け無しの成績を残し戦略、戦術にかけても申し分なく『今正成』と言うあだ名がつけられていた。

『正成』とは鎌倉時代末期に活躍した楠木正成のことで後醍醐天皇の下で鎌倉幕府と戦い、千名にも満たない軍で幕府の大軍に互角以上の戦いを繰り広げ後醍醐天皇方の勝利に大きく貢献した。また、

兒玉十三郎の愛読書が『太平記』と言うこともありそのあだ名がつけられた。

明治十年一月十三日

「十三郎少佐、お主とは6年前東京で顔を少し会わせただけで話しをするのはこれが初めてだがとところでお主、今年でいくつになるか」

と、熊本鎮台指令官谷干城少将が尋ねた。

「今年の9日で30になりました」

兒玉十三郎は言った。彼はこの日に熊本鎮台に着任して、鎮台指令官の谷に挨拶しに訪れていた。

「30?にしてもお主の面構えはどうみても30には思えんぞ」

谷は言う。谷だけではなく兒玉十三郎と初対面する者は皆口を揃えて谷と同じことを言った。

兒玉十三郎の顔立ちは幼さが残る十代の少年顔をしており、そのことについて当の本人は「毎日が忙しい過ぎて老ける暇がない」と、軽く流すだけであった。

「まあ、よい、ところで少佐、お主の考えを聞きたい。西郷さんは動くか」

谷は兒玉に聞いた。

「そうですね、西郷さんの人柄を考えれば『動く』のではなく、『動かれざるおえない』のではないでしょう。佐賀、萩、神風連、秋月等の土族反乱には西郷さんは加わりませんでした。あの人も日

本人同士の戦争は望んでおらんでしょう。しかし、薩摩士族は必然的に兵を挙げましょう。その際、御一新で苦楽を共にしてきた西郷さんも、侍として立ち上がるのではないでしょうか」

「ふうむ、そうか。」

谷は眉をひそめた。

「上は西郷さんが兵をあげた際の對抗策として私を第13歩兵連隊連隊長として熊本鎮台によこしたのは感ずいています。そこで谷少将、西郷さんの拳兵の際の私個人としての対策ですが…」 兒玉が言いかげようとしたが谷が「そのことについては山県さんから連絡が届いとる。『兒玉十三朗の進言は聞くように』と言われておる」といった。

「そうですね、さすがは山県さんだ、わかつている。それで私の13連隊に第6砲兵大隊から1個小隊を私の指揮下に置かせてもらえんでしょうか」

「それだけか、お主の進言で山県さんを散々泣かしたと聞くがなあ」と谷は兒玉を皮肉った。

「まあ、時間が余りありませんからな」

兒玉はそう言ってこれからのこれから起こる戦争についての予測を話した。

少なくとも、薩摩の兵隊は3万、対し熊本鎮台は1万、しかも、鎮台部隊は各駐屯地に点在しており、いざ戦争になれば、鎮台指令部を中心に援軍到着まで第13歩兵連隊を主力に防衛戦を展開せねばならず、その兵力は約4千前後、しかも兵の主体は農民出身の徴

集兵で勇猛果敢に攻め込む日本最強の薩摩士族を相手にするので当然士気の低下は免れない。

そこで、歩兵連隊に直接の野戦砲兵を入れることで兵の士気向上を計るとというのが、兒玉十三朗の考えであつた。

兒玉十三朗の案はそのまま採用され、第13歩兵連隊に選抜された優秀な砲兵1個小隊が配属された。

兒玉十三朗が歩兵第13連隊の置かれている熊本に来て数日が過ぎた頃、兒玉源太郎と彼の親友である小倉の第14歩兵連隊長乃木希典少佐が訪れた。

第三話：二人の兒玉（後書き）

次話から西南戦争の話しに入ります。

第四話：西南戦争（一）

兒玉十三朗は兒玉源太郎、乃木希典と初対面早々に親しい仲となつた。

「全く、どいつもこいつも目先の事ばかりしか見えんでいかわ。」

兒玉十三朗は酒を舐めながら前に座つて一緒に酒を飲んでいる兒玉源太郎と乃木希典に言つた。

「おつ、有名な兒玉十三朗の『酒の勉強会』が始まつたな。」
と、兒玉源太郎が言う。

陸軍では兒玉十三朗が酒を飲んでゐる内に国際情勢、国防政策等いろいろと話し始めるの事で有名で、いつしか『酒の勉強会』と言われるようになった。また、『酒の勉強会』で語る内容が全て筋の通つて奥が深い内容でもあり、兒玉十三朗の名を高めた一因ともなつていた。

兒玉十三朗はロシアについて話した。彼が昔、山県有朋に動向して欧州諸国に行った際、近代軍事を学び、ついでに欧州の歴史についても目を通していた。中でも、欧州諸国で唯一日本海を挟んだ日本の隣国であり、世界最大の国土と陸軍を持つロシア帝国について調べた。

「ロシアという国は信頼が出来ん。今に清国、朝鮮そして日本を自国の勢力下にして来るに違いない。」

十三朗は言う。彼は自分の机から世界地図を取りだし、テーブルに置いてある酒肴を隅に移し、真ん中に地図を拡げた。

「ロシアはクソ寒い国だ。余りにも寒いんで港も凍って冬は使い物にならん始末になる。そこで、冬になっても港が凍らない清国、朝鮮、そして日本が必要になる。しかも、日本の地理は大陸側から見て太平洋への入り口に辺たる。欲張って太平洋へ進出するなら、ロシアにして見れば口から手が出る程欲しいはずだ」

「つまり、いずれはロシアの勢力が日本に及ぶ今、日本人同士が争っている場合出はない。と言うことか」

兒玉源太郎が言った。兒玉源太郎の天才振りはこちらいったところにある。

「そういう事だ。西郷さんはその事は百も承知だ。しかし、いくら西郷さんでも川の手で押し流される石のように、血気盛んな薩摩隼人一万の力に動かされた。薩摩土族は強い。こんだ（今度）の戦はへたすると我が軍が負けるかもしれんな。それは乃木も知ってるはずだろう」

「うむ、確かに若い士官は我々と違い実戦を知らん。兵等も志願して入って来た者出はなく、制度によって入って来た若者達だ」

三人の中で乃木は余り喋らず、あえて十三郎は乃木を喋らせた。

「陸軍上層部に言っても余り取り合ってくれんが、こんだの戦で上層部の連中も分かるだろう」

兒玉十三郎は立ち上がり窓の方へ行き外を覗いた。外では兵達が銃剣術の鍛錬に励んでいる姿が見える。

明治十年二月十五日

この日、九州南端の鹿児島は六十年振りに大雪となった。西郷率いる薩摩士族が熊本城に向けて進軍していた。

一方で政府軍側の熊本鎮台司令部のある熊本城では天守にまで及ぶ原因不明の大火災が起きた。辺りから馬鹿大声を上げて兵士達は消火活動を努め走り回る。将校達も被害状況の確認や現場指揮等と混乱状態であった。そんな中、兒玉十三朗は何食わぬ顔をして司令部に一番遅く現れた。

「十三朗、お主は何やとつた」

兒玉源太郎の声に合わせ司令室にいた谷熊本鎮台司令官以下幕僚達も兒玉十三朗に視線を向けた。

「火事たつて、弾薬庫に火いに移らなけりや対したこたあない。それよつかあ、他の基地に連絡して警戒させるよお頼まんといかんと、十三朗は谷に向かって進言した。

「この火事は敵の揺動とみるべきです。味方が火事に気いとられとる隙に攻められる恐れがあるでしょう。我が13連隊は三大隊に分け、一つは消火に、一つは警備、偵察に、最後は待機させとります。閣下は各基地に連絡して警戒と出動待機の命令を」

「わかつた」

兒玉十三朗の進言を谷は素直に聞き入れた。しかし、熊本城の火災で薩摩軍の攻撃は無く、兒玉十三朗が設置した防御陣地にも被害は無かつた。

翌二十日、兒玉十三朗の放った偵察隊と熊本に到着した先発の薩摩軍が川尻にて戦闘が起きた。先に攻撃（発砲）を仕掛けたのは偵察隊であり、薩摩軍の士族は政府軍の徴兵された兵を「土百姓の鳥

合の衆」と呼び、その「土百姓」から先手を受けたものだから、薩摩軍の反撃は凄まじいものであった。

薩摩軍の本隊が続々と到着し、二十一日には全軍が熊本城を包囲した。政府軍は四千の兵力しかなく、熊本城に立てこもり防衛戦に転じるも兒玉十三郎少佐以下各々の指揮官達は兵達を統率して奮戦した。政府軍にはガトリング砲を各歩兵中隊事に配備されており、さらに13連隊には第6砲隊から臨時編入した一個少隊も有り火力では決して薩摩軍には劣らず、兵力の差を火力で補なった。

乃木希典少佐指揮の歩兵第14連隊は、襲撃を受け孤立状態の熊本城へ援軍のため、同二十一日に小倉を出発した。この情報を薩摩軍に察知し、二十二日の午後、14連隊が熊本城に程近い熊本北部の植木に達した時、薩摩軍の木村三介・伊東直二率いる四百の部隊と14連隊の第3大隊の間で戦闘となった。

第3大隊にもガトリング砲が配備されており、政府軍側が掃射し有利に戦闘を続けていたが、日が暮れ周りが暗くなった頃、伊東隊の一部が第3大隊に奇襲攻撃を行った。

この時、岩切正九郎と言う男が奇襲を受け混乱する第3大隊の連隊旗手河原林雄太少尉を斬殺し、連隊旗を奪い取られてしまった。

連隊旗は天皇から親授された物である天皇の分身として神聖に扱われており、その連隊旗を奪い取られてしまった事実を知った乃木は深く落胆した。

第五話：西南戦争（二）

東京

鹿児島逆徒追討軍が編成され鹿児島逆徒征討総督・総司令官であるが実際は大義名分上の飾り・ありすがわのみやたるひとしんのうに有栖川宮熾仁親王が、参軍・副司令官であるが事実上の最高指揮官・には陸軍から山県有朋中将、海軍から川村純義中将が任命された。隷下に

第1旅団

第2旅団

第3旅団

第4旅団

別動第1旅団

別動第2旅団

警視庁警視隊（別動第3旅団）

別動第5旅団

警察官となった土族より臨時徴募巡查から成る新撰旅団と、総勢六万の大軍が順次鹿児島に向けて出動した。

九州 熊本

一方、薩摩軍は大きな誤算をしていた。当初は熊本城を短期間に

陥落させる予定であつたが、政府軍兵士の抵抗は激しく、下手に攻撃させると一方的な損害を受け、薩摩軍は長期戦に持ち込み、主力による熊本城包囲網を敷くこととなつた。

熊本城にたてこもる政府軍の状況は以前と変わらず防戦一方であつた。しかし、谷干城少将たにたてき、樺山資紀中佐かはやますけのり、兒玉十三朗少佐、兒玉源太郎少佐、川村操六少佐、奥保鞏少佐等の指揮官、参謀指揮のもと善戦し続け、士気も衰えない。

中でも兒玉十三朗の活躍は華々しかつた。毎夜自ら一個中隊を指揮して薩摩軍に夜襲をかけ物資を奪い、薬瓶に火薬を仕込ませた即席爆弾を投げつけ薩摩軍の陣地を燃やし暴れ、その結果、薩摩軍の将兵は無駄な警戒感を抱き疲労を溜まらせ、味方の将兵の士気を鼓舞させた。

二月二十四日、九州に到着し南下中の追討軍 熊本鎮台隷下がつた歩兵第十四連隊もこの傘下に入る。は薩摩軍とが高瀬付近で戦い攻防の末にこれを破る。

続いて三月一日、田原坂と吉次峠にて激突。政府軍は早期決着を謀るため軍を主力と別動隊に分け、主力の任務は田原坂・吉次峠の薩摩軍防衛線正面突破のため、別動隊は薩摩の援軍部隊の封じ込めであつた。

作戦は三月十一日に決行された。しかし、ガトリング砲を大量に支給されていた政府軍は地の利を利用して防衛線を張つた薩摩軍を破る事が出来ず、銃撃と抜刀白兵に手を焼いた。政府軍は正面突破を諦め田原坂の西側、横平山を占領してから田原坂・吉次峠の攻略に乗り出した。また、薩摩軍の抜刀白兵の対抗策として『毒をもつて毒を制する』要領で政府軍内の士族出身者五十名からなる『抜

刀隊』を組織して試験的に薩摩軍と交戦させたが、戦死十三名、負傷者三十六名に及んで敗退した。しかし、薩摩軍に対しての効果が実証され、三月十三日、新たに警視隊から剣術に優れた者達、九百名が選抜され『警視抜刀隊』が編制された。

政府軍の再攻撃は一四日に行われ、警視抜刀隊は薩摩軍の抜刀白兵に有効に対処出来、彼等の中には旧幕府側の人間が大勢おり先の戊辰戦争での逆賊の汚名をそそぎ、今度は大義名分の下でかつての敵であった薩摩と戦えるのであって『戊辰の仇！』と叫んで切り込む者もいた。だが、意気込んで敵陣に深入りしすぎ全滅した部隊も続出した。しかし、薩摩軍の防衛線は依然と強固で、田原坂・吉次峠の防衛線突破は三月三十一日まで及んだ。

また、田原坂攻略を前後して、各方面の薩摩軍の防衛線は突破されつつあり、戦局は政府軍側に傾きつつあるも戦争終結には程遠い道のりであった。

四月五日 熊本城

熊本鎮台司令官谷干城少将を始め、参謀、主要部隊の指揮官が集まり今後の善後策を協議した。殆どどの将校は救援到着まで籠城戦継続を主張するも兒玉十三朗は出撃を主張した事で物議呼んだ。特に兒玉源太郎との議論は今にも腰に吊した軍刀を抜いて切り合いになるか、良くて殴り合いを起こす具合で周りにいる者を困らせた。

「薩摩主力をこの城に釘付けにする事で征討軍来援をもって挟撃をすれば良いと何度も言えば分かる！」

兒玉源太郎は自分の席の正面に座る兒玉十三朗に指をさして籠城戦の有効性を訴えた。二人は年の差を問わない仲の良さは誰もが知っていたが、戦略戦術に関しては自分の主張を譲らず彼等の仲など無かったかの様であった。

「確かに籠城戦は最もな策だが、それはあくまで戦術上の事であつて戦略上役に立たん！遅かれ早かれ戦は我が方が勝つ。しかし、遅く勝つてはいかん！戦争が長引けば金の無い国家は疲弊する。この事態に列強が我が国に謀略を仕掛けてくる事も考えられる！それとも何か源太郎？貴様は前線で戦う事が恐つかねえんか！」

「なあに！？」

この言葉に兒玉源太郎は腹を立てて、椅子を蹴り飛ばし席から立ち上がり腰に吊した軍刀に手を伸ばそうとした。兒玉十三朗は兒玉源太郎を睨んだまま微動さにしない。兒玉源太郎は軍刀を抜こうとせずそのままの姿勢を保ち、少ししてから静かに席に着いた。

「では、兒玉十三朗少佐は出撃を主張することは何か策があるのか？」

十三朗に問掛けたのは谷少将だった。

「はい、我が鎮台兵は四千弱であり、正面から一万の薩軍とぶつかれば負けます。そこでロシア式戦術をもって戦うのです」

と、十三朗は顔を谷に向けて『ロシア式戦術』について簡単に説明を始めた。

「防御陣地を構成して前進して行くのです。戦闘になつた際も我々は防御陣地で防戦、敵戦力を消耗させます。いざとなれば、後方陣地に撤退して防戦して同じことをします。かつて、ヨーロッパの大半を手中に納めたフランスのナポレオンもロシア遠征のさい、この戦術により敗れてその地位を失う原因にもなっています」

「ふうむ」

谷は腕を組んで考え込んだ。兒玉十三朗の考えは申し分ない。し

かし、事が上手く行く保障はない。

その後も議論は続いたが、結局は籠城戦派全てを兒玉十三朗は言い負かせてしまい、熊本鎮台は熊本城より出撃することとなってしまった。

第六話：西南戦争（三）

四月七日 熊本城

兒玉十三朗は出撃に際して、少尉以上の指揮官たちを集めて訓示を言い渡した。

「今日に至るまで我が熊本鎮台は一カ月以上、日本最強の薩摩士族と戦い続けてきた。それは一重に諸君一同並びに、兵士達の賜物である！そして今、東京より賊徒討伐軍が駆け付け、薩摩軍と壮絶な戦いを繰り広げている！が、雌雄を決するまでにはいったておらん！この状況を打開するために我ら熊本鎮台は城から打って出て、討伐軍の救援に向かう！」

訓示を聞いていた士官達は十三朗の『救援に向かう』という言葉に反応した。救援されるのは自分たちの方であり、討伐軍は薩摩軍に阻まれている状況は城内にいる全ての人間が知っていた。

兒玉十三朗の訓示は続く。

「なるほど。諸君等が不思議がるのも無理はない。我が鎮台は数で勝る数万の薩軍に包囲され、孤立無縁の状況だ。国民から見れば我々は『来援を待つ弱き味方』と女々しく見られ、官軍本隊の活動を期待している。が、その官軍本隊は薩軍と一進一退を続けているのが現状だ。今こそ我が立ち上がり敵味方に我々の勇猛振りを見せ付けてやるのだ！」

なお、この決定は将校の無能無策によるものでも、背水の陣でも決していない。戊辰の戦を第一線に立ち戦ってきた指揮官等と、百二十の兵で官軍数万と互角以上に渡り合ったわしの指揮の下、貴官等に大勝利を与えてみせる！」

そこにいた士官達は兒玉十三郎の迫力に魅せられた。兒玉十三郎は軍刀を抜き挙げ掲げ叫んだ。

「勝利は我等の奮闘に有りだ！」

士官達も自らの軍刀を抜き上に挙げ雄叫びを揚げた。

熊本鎮台の攻撃は歩兵第13連隊隷下砲兵小隊の砲撃から始まった。

兒玉十三郎の作戦は、まず、砲撃で敵砲を沈黙させ、後に歩兵部隊を前進させ、味方砲の射程範囲内の一部占領、占領後、防御陣地を構築、薩軍の逆襲に備える。

砲撃後、歩兵戦となる。最初はどちらも銃撃戦から始まり、しばらくして薩軍が抜刀白兵のため飛び出して来た。鎮台兵は銃やガトリングを浴びせ辺りを薩摩土族の屍の山を築かせ、血の川を流させるも出撃した鎮台側のガトリングは数挺しかなく、段々とその距離が縮まっていき、鎮台側もガトリング砲の援護下で白兵戦に移った。

作戦遂行中に予想外の事態は起こるものだ。想定しうる事態に備え、第二、第三の策え十三郎は用意していたが、それでも、不安は消えずに『不測の事態』を気にしながらも十三郎は軍刀の一片手持ち、誰よりも先頭にたって戦った。

「連隊長殿！御一人での深入りは危険です！下がって下さい」薩摩土族との乱戦の中、兵等が兒玉十三郎の暴れ振りに不安を感じて、兒玉十三郎を囲むようにして自重を促した。

「おお、それよりも、貴様等のそれは返り血か!?」兒玉十三朗は側に寄って来た兵士達に指を指して訪ねた。兵士達は返り血であると首を立てに振って応えた。

「そうか!」十三朗は笑顔で兵士等の肩を叩いた。

もちろん、十三朗の顔も軍服も返り血で濡れ、真っ赤だ。軍刀はいつの間にか薩摩士族達が所持している刀に変わっていた。その刀の剣先から血が垂れて刃が所々で欠けている。

辺りから悲鳴や銃声等が響き渡り、会話が聞き取りにくい中で兒玉十三朗は胸に息吸い込んで、周りの騒音に負けない程の声を出して叫んだ。

「聞けや!鎮台兵!この戦!勝ったぞ!城にいる残りの三個大隊一千がやって来る!それまで一步も退かず踏み止まって頑張れえい!!!」

増援は嘘であるが、鎮台兵は『増援』と『勝ち』を信じて奮起し、薩軍には動揺が起きた。

辺りにいた兵士達は目をキョトンとさせていた。

「おい、貴様等、今わしが叫んだ事をそのまま辺りに言いふらせ!はよ行け!はよ!」

鎮台と薩摩軍の乱戦は戦った者達にとっては長く続いたと感じているが実際は十分程で終わった。

薩摩軍は退いた。辺りには両軍兵の屍が重ね合い様々な破片が散らばり、土は赤く染まっていた。

兒玉十三郎は部隊を整えさせて後方陣地に引いた。

後方陣地に着いて部隊の損害が思った程少なく、不測の事態も発生せず、思った以上に作戦の第一段階が達成された。

「流石は、兒玉だ」と後方陣地で兒玉十三郎を迎えたのは同鎮台の川上操六少佐であった。

「いよあ、川上い。全く、返り血と汗で着物がグチャグチャでいかんわ。はよに着替えんと風邪をひくわ。」十三郎は手拭いで顔に付いている返り血を拭き取りながら返事をした。

「おはんはよく暴れもうしたなあ、着物が全部真っ赤で、おいはとても真似は出来なか。」川上はあきれ返るように、十三郎の軍服を見ながら言う。

「ん、なあに、兵達は皆わしと同じだ。それよっか、たいした陣地をこしょおた（作る）なあ。わしが思った通りの出来栄えだわ。」と十三郎は陣地に潜り込んだが、彼の言う『陣地』とは『塹壕』のことを指す。

見張り台、ガトリング砲が各方面を向き、相互に援護射撃ができ、通信機も備え付いている。二人は見張り台に上がり外を眺めた。

「村上よあ、わしゃあ、薩摩を買いかぶり過ぎとつたんかもしれん。」

「うん？」

「所詮薩摩士族は刀を持つだけの侍の集団にすぎん。先の戦で横たわっていたんわ、殆んどが薩軍だった。確かに向こうさんは刀にかけては強かった、しかし、切り合う前で、向こうさんは負けていた。殆んどが突っ込む前に銃撃で倒れた。」

十三朗はここで間を挟んで、自身の身なりを整えてから話しの続きを話し始めた。

「薩軍は弱いでいいが、その弱い薩軍にてこづり、多大な犠牲と物資、時間を費やす官軍本隊は更に弱い。何故か分かるか？将や兵に問題は無い。有るの士官の質だ。」

「連隊長殿！」後ろから士官が現れた。

「ん、どうした。」

「谷閣下が御越しになりました。」

「ん、分かった。」

十三朗と川上はその場を後にした。

熊本鎮台の出撃により戦争は大きな機転を迎えた。熊本鎮台はその後進撃を続け、半月後には官軍本隊と合流を遂げた。その後の戦闘は敵軍掃倒に以降し、全ての戦いは六月二十八日をもって終了した。

第七話：転属

熊本

西南の役が終息して八月、熊本は西に有明海が面し、瀬戸内海式気候に近く夏の気温は高い。兒玉十三朗は歩兵第13連隊と共に熊本の駐屯地に帰還して部隊の再編と戦後処理に追われて多忙をきわめていた。また、戦争での功績により中佐へと昇進していた。

そんなある日、十三朗は谷熊本鎮台司令官に呼ばれ、鎮台司令部が置いている熊本城に来た。城の至る所に砲弾や銃撃等の戦いの傷跡が残っている。

（数百年前に建てた城なのに、よくまあ守り通せたもんだなあ）
十三朗は先の戦争を振り返りながら、損傷した箇所を見渡し、谷のいる司令室へと向かった。

「閣下、兒玉中佐が参られました」

司令官付士官が十三朗が来た事を谷に告げた。

「入れてくれ」

士官は谷からの入室許可を十三朗に告げた。十三朗は士官に軽く敬礼をして司令室に入った。

司令室に入ると、谷が机に座り山の様な書類を一枚一枚にサインをしていた。戦後処理に加え事務、軍務等と机の上での仕事は戦場で指揮を執るより大変であり、連隊長の職務の方がまだ楽だと十三朗は思った。

「兒玉十三朗参りました」

「おお、来たか」

谷は顔を十三郎に向けて筆を下ろして引き出しから封筒を取り出した。

「山県さんからだ」

谷はそう言つて封筒を十三郎に渡した。十三郎は封筒の中身に目を通した。

「東京への転属…ですか」

「うむ、元々お主がここに来たのは薩摩士族の反乱を迎え討つため、その目的が無くなった今、東京に帰つて来いと言つ訳だ」

「それで、来月までに…」

「ん、どうした中佐。転属が気に入らんか？」

谷は長年の経験と勘で十三郎の微妙な動作を身のがさなかつた。戦場ではそういった些細な躊躇で戦いが左右され、国家の大計が危ぶまれる事を谷は心得ていた。無論十三郎も、それでいて谷の言つた事の意味を察していた。

「いえ、転属についてはありません。ただ、後顧の憂いを残して下りますので」

谷は少し考えて言つた。

「乃木か」

乃木は戦争中、歩兵第14連隊の軍旗を紛失させてしまった事に過剰なまでの責任を感じていた。その後、汚名返上か、または死に

急ぎたいかのように敵中に飛び込み戦い続け、負傷し後方の安全地帯に設けられた野戦病院に收容されるも第一線に戻ろうと脱走を繰り返した。この頃には熊本鎮台は熊本城から破竹の勢いの進撃により官軍本隊と合流しており数カ月ぶりに再会した兒玉十三朗と源太郎は乃木の変わり様に啞然とした。後に彼等の計らいにより乃木は二人の目の届く熊本鎮台参謀に回されて第一線から退かされた。しかし、乃木の感情は収まらず参軍 陸軍征討軍司令官 の山県に軍旗紛失の処分を求めたが、山県からは紛失後の戦いぶりや処分を求める責任の強さがかえって潔く思われ軍旗紛失の罪は不問となった。この不問は誰もが認めるところであったが乃木はそれでも自分の犯した罪を許す事が出来ず今日までに至る。

兒玉十三朗は司令室を出た後、兒玉源太郎の元を訪ねた。

「いやあ、久しぶりだのお、十三朗」

参謀室にいた兒玉源太郎は十三朗が入ってきて、椅子から立ち上がり彼を迎えた。源太郎の他に川上操六に着任したばかりの西島助義がいた。

「久しいなあ、源太郎に川上、君が西島か」

「はい、西島助義です」

西島は初対面の十三朗に敬礼をした。十三朗も答礼をし返して辺りを見渡した。

「乃木はどうした？」

「うむ、仕事を終えたらさっさと自室に籠りおった」

「…そうか、まだ直らんか」

十三朗は帽子を脱ぎ後頭を搔きながら、空いている椅子に座った。

「わしがまだ逆賊だった時、官軍の軍旗を何度も搔つ払つてそんなに官軍兵に向かつて『こんげえ旗なんざあ、雑巾にもなんねえやあ!』って叫びながら燃やしたが、その時の官軍大将だった山県さんはケロリとしとつたがなあ」

「十三朗さあ、よくまあ恐れ大きい事お」

川上は十三朗の話しを聞いて腕を組んであきれ返る。

「そういう奴なんだよ乃木は、それがあいつの良いところだが、いまそれが裏目に出ている」

源太郎は明治維新以来の親友である乃木を決して見下す事をせず、むしろ自分がない所を持っている乃木を尊敬さえしていた。

「しかしなあ……」

十三朗は『いくらなんでも度が過ぎる』と言いたかったが、言うことを控えた。その後、西島は十三朗に戊辰、土族反乱の際の戦略、戦術や対応を学び、源太郎は再び仕事に着き、川上は外に出かけて行った。外はすでに日が落ちて暗くなっていた。

前の廊下から慌ただしい足音が聞こえてきた。足音の主が参謀室の前で止まり「失礼します!」と慌ただしく兵卒が入って来た。

歩卒は息を荒して源太郎を見つけて報告した。

「乃木中佐が切腹を図ろうとしています!」

この兵達は兒玉源太郎の指示で常に乃木の動きを監視していた。

十三朗は歩卒の報告にギョツとした。源太郎は何い!?!と叫んで

乃木の下に飛んで行った。源太郎の次に十三朗も部屋から飛び出した。続いて西島も出てきたが、源太郎や十三朗に追い付かず、十三朗は源太郎に追い付いて並んで走った。

乃木の部屋近くまで来ると乃木叫び声と兵の声が聞こえてくる。部屋に入ると二人の兵が乃木を押さえ付けて片手に持っている短刀を取ろうとしていた。

「乃木、馬鹿なまねはよせ！」

源太郎は乃木の両肩に手を置きなだめさせる。

「ご苦労だったな後はわしらが何とかするすけ、下がっててくれんか」

十三朗は兵達に退出を命じた。二人の兵は乃木を放し十三朗に敬礼をして部屋を出た。擦れ違いざまに西島が入って来た。

「死なせてくれ兒玉」

乃木は今にも泣きそうな目をして源太郎に言った。

「ならん！考え直すのだ、乃木！」

「いいや、陛下から授かった軍旗を失った自分を許す事は断じて出来んのだ！」

「乃木よ、あんたは立派な忠臣だ」

十三朗は膝を下ろし乃木に言った。

「だがの乃木よ、今貴様が腹ば切るならわしだって腹ば切る事になる」

「どうしてだ？」

「わしは昔逆賊だった。恐れ多くも陛下に弓を向け、陛下の兵を大勢殺めた。陛下の軍旗さえ奪い焼いた。それも全て自分が今の地位を手にするためにやった事だった。わしは乃木よりも罪が深い」

「……」

「それになあ乃木よ、貴様は忠臣として死して陛下に詫びてけじめをつけようとしているが、そいつあ、筋違いだわ」

「何故だ!？」

乃木は十三朗の胸ぐらを掴み自分の償いを否定する理由を訪ねた。今の乃木は多少の錯乱状態にあるとその場にいた三人は思った。

十三朗は次の三つの事を話した。

最初に、軍旗は陛下が授けた尊い物であり、それを失ったとなれば確かに罪な事だが、陛下は決して将の命をもつて罪を償えとは決して言わない。ここで命を落とせば陛下の御心を傷つける事になり、これこそが最も罪深い事である。

次に、日本の南北時代の例えを話した。忠臣楠木正成は後醍醐天皇のため、鎌倉幕府の大軍と戦い常に奇抜な戦術をもって数で勝る幕府軍を翻弄させ、幕府滅亡に導くも、その後の足利尊氏の反逆の際、自軍の劣勢を補うため京の都で戦う事を進言するも戦を知らない愚かな公家のためにそれが叶わず、それでも忠臣として湊川で足利軍の大軍の前に討ち死にした。そして、楠木正成が死んだ事で後醍醐天皇の大いなる大望は潰える事となり、忠臣楠木としては最後まで生き続け帝のために戦い続けねばならなかった。乃木としては、

『忠臣』として生き続けねばならない。

最後に、我々軍人は最早『侍』ではなく、恥じを受けての自害は無駄死にであり、『軍人』は恥じを噛み締めて生き続け、汚名を晴らす事こそが自身の名誉であり陛下に対する真の忠義である。

乃木は十三朗の話しに納得したしまったようで胸ぐらを掴んでいた手が自然と離れ、顔を下に向けたまま黙り込んだ。

十三朗は乃木の短刀を拾い刀を鞘に納めた。

「乃木よ立てるか？お主やあ疲れとるんだ。医務室に行くぞ」
源太郎が優しく話しかけ乃木に寄って立たせようとさせた。

「兒玉、わしは今は死なん。だが、いずれは腹を切るぞ」

「分かった、だが、一人では死ぬな、そんな時はわしも呼べ。介錯してやる」

源太郎はそう言つて乃木に付き添い部屋を出た。廊下には谷司令官や、将兵等が集まつて今までの経過を固唾を飲んで見守っていた。

「この短刀はわしの転属祝いに貰つておくか」

十三朗の言つた事に横にいた西島は訪ねた。

「転属するんですか？」

「ああ、来月までにな」

二人が部屋を出た。廊下には谷だけが残っていた。

「ご苦労だったな」

「いえしかし、丁度良かったですよ。私がここに来ている時にこんな事態が起きて」

「うむ」

「では、私はこれにて」

十三朗は谷に敬礼して熊谷城を出た。彼の転属はそれから数日たつてから行われ東京に戻った。

第八話：陸軍大改革論

東京

九州から帰京した兒玉十三朗は、西南の役での教訓を踏まえた陸軍の将来の展望についてのレポートを半年かけて作成し、『陸軍大改革論』というタイトルで山県有朋に提出した。

陸軍大改革論の主な項目は、

- (1) 国内及び国際情勢、戦略戦術に関する知識を習得する陸軍大学校の創設。
 - (2) 各鎮台の強化。
 - (3) 兵站、衛生等を管理する『後方支援連隊』の創設。
 - (4) 気球連隊の創設。
- であり、紙の山と化したレポートを山県は一枚一枚を丹念に目を通していった。

兒玉十三朗は、山県の座る机の前に置かれているソファアにくつろいでいた。彼は愛読書の『太平記』を読んでいる。途中、山県が声をかけてきたので、本を閉じて顔を山県の方へ向けた。

山県はレポートを隅へずらし、煙草を吸っていたが、その表情は良くなかった。

「この改革案は随分と将来を見据えた大掛りな物だなあ」

と、山県は苦い口調で言った。理由は予算にある。日本の国家予算は常に乏しい。その乏しい予算内で内政は、国内のインフラ等を行い。海軍では、軍備拡張のため外国から最新鋭の軍艦購入という、贅沢な買い物をしており、お陰で陸軍に予算増額の目処が立たって

いない。

山県は兒玉に予算の事の諸事情を話した。だが、兒玉も譲らない。

「陸軍は創設から十数年、まだ至らぬ所が多々あります。欧州列強に比べても水準以下。その事は西南の役で山県さんが一番分かっているではありませんか。歩兵だけ、砲兵だけ増やしたところで、強い陸軍は出来ません」

と、言つて結局は兒玉十三朗に頭が上がらない山県が全面的に妥協することとなった。結果的には陸軍の改革予算は、彼の人力と裏工作で政府の予算案に組まれる事となる。

「兒玉、一つお主の考えを聞きたいが」

山県は煙草を灰皿に捨てた。

「日本と清国は戦になると思ふか？」

山県の質問に十三朗は迷う事もなく頷いて言った。

「起こるでしような、近い将来に朝鮮を巡つて」

「朝鮮、か」

と山県は呟いた。西南の役後、国内の問題解決させた日本は朝鮮に確固たる影響力を築こうとしていた。朝鮮は経済的な関係以外にも日本の安全保障上必要不可欠な地形であつた。清に足場を固めた列強勢力進出から日本を守る防波堤としての役割を担わせるため、朝鮮は日本の影響の下で近代化をさせる必要があつた。しかし、朝鮮を古くから属国としてきた清と対立し、日清間の関係は悪化した。さらに北の大国ロシアも朝鮮進出の隙を伺つていた。

「山県さん、私からも一つ伺いますが」と兒玉は言った。

「うん、何だ？」

「政府の方針こそは朝鮮の独立を掲げているますが、最終的には朝鮮を日本に取り組むなんて考えてはいませんか？」

山県は眉をひそめて考え込んだが、しばらくして口を開いた。

「お主には、隠し事など通用せんからな」

と言つて、朝鮮の領土化の野心がある事を認めしたが、あくまで、まだこの考えはほんの一部の者の考えに過ぎないという。

兒玉もこれを聞いて腕を組んで考え込んでから、

「悪いとは言いませんが、戦をやる以上に大金が掛って骨の折れる大仕事です」

と言った。

当時の朝鮮は、自国の文字を書けるのが、身分が高い家柄位のみで、国民の殆んどは書けない。また、鉄道も無く、インフラに産業等は日本の江戸時代のこれに当たる。近代化しない状況で領土化してしまえば、日本同等の近代化が必要で、これ等に莫大な資本を投資しなければならなくなる。

さらに、抵抗運動も起こる。かつて欧州諸国が植民地化していった地域で抵抗運動が無かった例は一つも無い。鎮圧は一日や二日で終わるものではなく、月日を問わず各地で発生し損失も大きい。

山県は、うむ、とだけ返事するのみだった。兒玉は窓の方に寄っ

て外を見た。空は晴れはたり気持ちのいい健やかな日だ。兒玉は大きく息を吐いた。彼も野望を抱きここまで登り上がってきた一人の男として国を強くしていきたいと思っっている。国の領土を広げたいとも思っっている。だがそれは、占領国の各領地に占領政策を掲げた表札の設置や占領政策を取り仕切る人間を派遣するだけの戦国時代とはわけが違う。占領者が異民族である事を理由に武器をとって戦い続ける。兒玉はその事を重々知っていた。

「まつ、山県さん、時間はまだたっぷりあります。それに、その時になれば私を占領地に遣わせてください。私がなんとかしますよ」

「うん、約束しよう。……所で兒玉よ、髭はどうした？」

「髭……」

兒玉の言葉はいつもとはちがいがい弱々しい。

「昨日、家でこの論文を書き終わってごろ寝してた際におづに切られたんですよ」

途端に山県は腹を抱えて笑いだした。兒玉の顔に生えていた立派な髭は無く綺麗に剃られていた。その顔は十代の若者顔であった。

「ああ、あの子か。それにしても、お主の年は31だろ？だが、どうして若者顔なのだ？」

この疑問は山県だけではなく、陸軍内で噂となっていた。

兒玉自身も楽な事ではない。兒玉十三郎の名は広く知られているが、会見の際、外国人武官等と初対面の時等は最初、彼等は彼を兒玉十三郎と知らず、兒玉から自己紹介すると「君が兒玉かね？」と毎度の事そう言われていた。

「そらあ恐らく、…いつも忙しいから更ける暇がないからでしょうかね？」

兒玉は頭を掻きながら言う。

「兒玉よ、嫁を貰う気はないか？」

「よつ嫁…ですか」

兒玉は目を見開いて山県の言葉に耳を疑った。

「ん？『今正成』と言われた戦上手も、これは苦手か？」

山県はニヤニヤしながら小指をチヨイチヨイと動かして促した。

「まあ私は、禁欲主義ではありませんが、いやあ、まいりましたよ閣下」

兒玉は顔を赤くさせ後ろ頭を掻き回した。

「で、どうする気だ？」

山県の問いかけに兒玉は笑顔を見せた。

「では閣下、ここは一つよろしくお願いします」

そう言っつて兒玉が山県の部屋を出て、廊下を歩いていたら、後ろから聞き覚えのある呼び声が聞こえた。振り返ると親友の黒木がいた。

「久しぶりだのお、兒玉！髭がなくなって見間違える位に鼻垂れ小僧になったなあ。はははっは」

と、黒木は馬鹿笑いしながら兒玉の肩を叩いた。最初は嬉し笑いであったが、髭のない彼の姿をみて本当に笑いだした。黒木の笑いに釣られて、辺りにいた将校もクスクス笑っていた。

兒玉十三朗の妻となったのは人は、山県有朋の友人で元治元（1864）年に池田屋事件に遭遇し、死亡した杉山松助の親類で、二十歳になたばかりの娘で名を、杉原トミと言つ。

二人の見合いは東京の山県の私邸で行た。

「あなたが、兒玉十三朗様ですか？」

と、彼女からも言われてしまつた。だが、兒玉は一目で惚れ込んでしまつた。

明治11年、日本の各地で田んぼに黄色く実つた稲を刈り取る9月の事。この頃には日本の国内事情も一応は安定し、数年間は大きな流血沙汰も起こらない平和な時期が続いた。

第八話：陸軍大改革論（後書き）

次話から数年後、十三郎の弟が海軍に入ってから
の活躍を書きま
す。

第九話：海軍へ

日本海軍は創設当初、陸軍の従属の様な存在だった。

『鎮台』を編制した陸軍は外征よりも国内の治安維持を重視していた。万一に敵国の侵略があつても敵軍を国内で殲滅する事が基本戦略とされていたために海軍は制海権確保のための新鋭艦を購入する機会が無かつた。むしろ、当時の国家財政を考えると陸海軍も列強と同水準の戦力を保持する事は不可能であつた。

海軍創設時、軍艦は小型艦6隻でトン総合計は約2400トンしかない世界最弱の海軍だった。

海軍が拡張期に入つたのは明治15年の事だった。

きっかけは隣国の清国にあつた。

清国は19世紀の中頃、国内でイギリスからのアヘン密入から端を発したアヘン戦争（1840～1842）、続くアロー戦争（1856～1860）に近代装備、編成の列強に敗れた。さらには、二つの対外戦争に前後して国内では洪秀全率いる新興宗教団体の太平天国の反乱（1851～1864）に対して従来の軍では対応しきれない事を痛感させられた。

こうして清国政府はヨーロッパ近代文明の技術を導入して国力増強と富国強兵を目指した洋務運動を開始した。

清国の近代化の規模は日本を遥かに凌ぎ、軍事力も整備増強されていった。これに危機感を抱いたのが日本陸軍のトップ山県有朋だった。山県は隣国の近代化とそれによる軍事力の拡張によつての朝鮮への影響を恐れ、『隣邦兵備略表』を明治帝に奏上し、日本の軍備拡張が始まつた。

更に、軍事拡張に油をさす事件が朝鮮で起きた。

朝鮮国王高宗の実父、興宣大院君が当時朝鮮の政権を担っていた王妃閔妃一族に対して反乱を起こした。これにより朝鮮在住の日本人も巻き込まれ、軍事顧問に行使館員等、約十数人が殺害された。興宣大院君は政権を奪取に成功しが三日天下に終わった。反乱を鎮圧したのが清国であった。

この事により、朝鮮政府は清国側に傾いた。日本の危機感はさらに膨大した。陸軍増強は山県有朋が発言し、海軍増強は重臣の岩倉具視が発言した。これにより海軍は、明治16年には、48隻の軍艦建造計画が建議されて実行に移された。

海軍兵学校 - 海軍将校育成のために明治2年に海軍操練所という名で開設された。その後、海軍兵学寮に改称されて海軍兵学校に改称された。授業ないようは英語が中心であった。教官は英国人、黒板の文字や教科書も会話も英語を使う割合が高かった。

明治19年、築地の海軍兵学校に第17期生55名が入学した。この中に、秋山真之という松山出身の男がいた。彼は入学当初の成績は平均並みであったがその後は成績主席となり卒業の時までその座を死守した。彼の勉強方法は、教官の教え方の癖を見抜き、出題してくる問題を予想する事と過去の試験を集めて出題率の高いのを把握して徹夜をすと言う無茶苦茶なものだが彼はこうして試験で高得点を出している。

秋山とは対照的に入学時に成績最下位の座を争う者がいた。名を兒玉十五朗こゝろといい、兒玉十三朗こゝろの弟である。

兒玉と秋山とは入学当初からウマが合いよく勉強を教えてもらっ

ていた。

「全く誰だば、学科や会話に英語なんぞ取り入れたんは」
兒玉英語書きの教科書とノートと睨めっこしながら英語嫌いを常に口にする。

「海軍は日本の海だけを縄張りにした昔のような水軍とは違い、世界の海に出ていく以上は軍艦一隻々々が国家を代表するものであって、その士官が英語を話せないのようではみつともないぞな」
と秋山は上着のポケットから煎り豆を取り出し一粒を口にほおりこんで残りを兒玉に渡した。

「すつかし秋山あ、んな（お前）はほんとに勉強の教え方がばかにうまいなあ。おかげでわしはなんとかやっていけるわ」

兒玉は秋山からもらった煎り豆をカリカリ音をたてながら食べた。

「あしが、大学予備門に入ってた頃、おまい（お前）みたいに英語苦手の同郷人がいたからな、教えるのには慣れてるぞな」

「その同郷人とわしとでは、どっちが覚えがいいほうだ？」

「兒玉の方だな。おまい（お前）は徹夜に強くてしっかりの結果を出しているからな」

「そうか、そいつあよかったわ」

そう言って、また英語と睨めっこを始め毎夜徹夜をした。

兒玉十五郎は英語こそは最終的に克服は出来なかったが、他の学科は入学後に徐々に成績を伸ばしていき、上位に昇っていった。

日本海軍はイギリス海軍式を採用しており、駆け足をする習慣があった。海軍程時間に厳しい所はなく1秒でも早く持ち場に着く事を要求された。

そのため海軍兵学校では毎年3月に全学年が各分隊ごとに別れて築地から飛鳥山までのマラソン大会が開催される。

兒玉と秋山は同じ分隊で首位についていたが最後には越されてしまった。その自分達を抜いた先頭を走る相手分隊長の男の顔は長距離を走った様な顔ではなく白く青ざめていた。

兒玉や秋山達はギョツとした。

「よお、誰だばあの死人みたいな顔しとつたんは？」

兒玉は走りながら、横を走る秋山と後ろにいる同分隊のメンバーに聞いた。

「ありゃあ確か、一学年上の広瀬とか言つたなあ」

と、仲間の一人が言った。

広瀬 - 本名を広瀬武夫という。豊後（大分県）岡藩竹田の生まれで、西南の役で自宅を焼失し、飛弾（岐阜県）高山に移り住み、この小学校を卒業し、明治18年の海軍兵学校入学まで小学校の教師を務めた。兵学校入学後は、日本柔道の総本山として名高い講道館で柔道を学び、海軍と柔道が俺の嫁だと断言するほどであった。

彼は我慢強い。先ほどマラソン大会で死人のように青ざめていたと記したが、その時に彼の左足は骨膜炎になって激痛にさらされていた。それを我慢しての完走して、しかも優勝した。

上官が彼の異常に気付いたのはこの翌日の事であった。軍医は足を切断するか迷ったが、取り合えず様子を見ることにした。この判断が正しく、足の骨膜炎は次第に和らいだ。

この広瀬武夫と秋山真之に兒玉十五朗は、その後ふとしたきっかけで親しくなり、下宿を共にし海軍の将来について語り合った。

第十話：メツケル

兒玉十三郎が陸軍省に提出した『陸軍大改革論』はそのまま陸軍の政策とされ、明治15年に陸軍大学校は創設された。

兵学教官を外国から招く事となり、その対象国がドイツとなった。

陸軍は創設当初フランス陸軍式の訓練を採用していたが、話を遡る事12年前の明治3(1871)年にヨーロッパで列強の勢力図が変換する事態が発生した。

フランスとプロイセン王国の戦争 - 普仏戦争(1870)~1871) - である。

プロイセン王国とは、かつてドイツ諸侯連合国家であった神聖ローマ帝国(962)~1806)の一公領であったが、19世紀の初めにフランス皇帝ナポレオンによって締結されたライン同盟によって844年の歴史に幕を閉じた。

新たに『ドイツ連邦』が誕生したが連邦国家としてまとまる事はなく、その中でプロイセン王国は1862年、国王ヴィルヘルム1世の時に首相のオットー・フォン・ビスマルクはプロイセン中心によるドイツ統一のため富国強兵と外交強硬策が主軸の『鉄血政策』を掲げ、国王がこれを採用して近代化に励んだ。

そして、1866年に南の隣国で列強のオーストリア帝国と戦争 - 普墺戦争(1866) - が勃発した。

現在のオーストリアの国土は北海道とほぼ同じ(若干北海道が小さい)だが、帝国時代から第一次世界大戦の終結まで国土はその4倍で、西はイタリアのベネツィアを、アドリア海に面したりエーカ、

スプリット - 現クロアチアの地方都市 - を、東を現ウクライナ西部を、北は現チェコを、南はハンガリーからルーマニアのトランシルバニア地方を有する帝国であったが、プロイセンはこれを破った。

普墺戦争の勝利を機に、ドイツ連邦を解体再編し、新たにプロイセン中心の『北ドイツ連邦』を誕生させた。

ドイツ情勢に危機を抱いたのがフランスで1870年に戦争が勃発した。

戦争はプロイセン側が有利に進め、9月のセダンの戦いでは10万人のフランス軍が降伏し、自ら陣頭指揮に立っていたフランス皇帝ナポレオン3世も捕虜となった。翌年1月にはパリを占領し、フランスは降伏した。

対仏戦の勝利によりプロイセン国王ヴィルヘルム1世は占領下のヴェルサイユ宮殿で戴冠式を行い、プロイセン王国を中心としたドイツ諸国統一国家『ドイツ帝国』の皇帝となり、列強の仲間入りを果たした。

普仏戦争中に、一人の日本人青年がロンドンで困り果てていた。名を桂太郎という。

彼は、山県有朋の直系で維新後にフランスに留学しようと思気込んで渡欧したが、上記の通りフランスは戦争中でも劣勢であった。桂は落胆した。

そんな桂に声をかけたのがイギリス公使館に勤めていた桂と同じ長州出身の青木周蔵という男だった。

「ドイツに行つてはどうだ？」
と、青木は桂に言った。

桂は半分やけくそでこれに従った。

フランス語しか習わなかった桂にとってドイツの生活は大変なものとなった。しかも、官費留学ではなく私費留学だった。それでも彼はくじける事なく、ドイツ語を学び、ドイツの文化に触れ、ドイツ軍事を吸収していき、次第にドイツ式の軍事鍛練が日本に必要なと悟るようになった。帰国後、陸軍軍人となった桂は山県にドイツ式陸軍を採用するよう説いたが、山県は難色を示し難航した。そこで桂は兒玉十三朗に目をつけ、山県を説得するよう働きかけた。兒玉と桂は関係が殆んどなく親しくは無かったが、知人ではあった。

兒玉は桂から話を持ち掛けられ、二つ返事で承諾した。

兒玉も独自の情報網から戦争の情報を入手しており、その情報量は日本にいながら普仏の情勢が手に取るように分かる程に膨大で正確だった。

しかも兒玉は、これからの日本陸軍はドイツから倣うべきと記したレポートを作成しており、これを見た桂は驚愕した。様々な尺度から見た他国とドイツ式陸軍の比較と利点、将来の展望等と詳細な内容が盛り込まれており、桂の持つドイツの軍事知識を遥かに上回っていた。

「お前はドイツに滞在していた事があるのか？」

桂はこう言わざるおえなかった。

「明治の2年の時に数日だけいた」

と言つて、全て独自のルートと独学で学んだことを話した。

桂は、他人の意見に横槍を入れる山県が兒玉十三朗の意見だけでは何の口出しもしないでそのまま受け入れる理由を少しは理解したような気がし、敵に回したら確実に負けると思い背筋が冷たくなるのを感じた。

しかし、桂のもくろみ通り、兒玉は山県の説得に成功した。だが、

日本陸軍をフランス式からいきなりドイツ式に変えては日仏関係に悪影響を与える事から段階的にドイツ式に転換していく事でまとまった。

ちなみに、桂が山県の後継者なら、兒玉十三郎は陰の黒幕という形だった。

明治17年、山県は陸軍卿大山巖と協議し、陸軍大学の外国人教官をドイツから招聘する事を決定し、翌18年ドイツに打診し陸軍大臣とドイツが誇る参謀本部長モルトケは人選を彼の愛弟子で参謀少佐メツケルに決定した。

しかし、当の本人は困惑した。十数年前に自称近代化と唱える極東の片田舎の島国までわざわざ出向く必要があるのかと、その事についてモルトケは、

「極東の片田舎まで行ってドイツ技術を示す良い機会ではないか。それに、アジア人の国とは言え優秀な人材は揃っているし、君の優遇も保証してくれる」

と、メツケルを説得した。

「一日だけ時間を下さい」

と、メツケルは言って参謀本部を後にし、日本についてある事を調べた。

モーゼルワインが日本で飲めるかどうかである。彼は、大のワイン好きでワインさえあれば何もいらないと考える程であった。折しも横浜でモーゼルワインが入手できる事をしり日本行きを決意した。

ドイツ帝国陸軍少佐のクレメンス・ウィルヘルム・ヤコブ・メツケルが来日したのは明治18年のことであつた。彼が日本に来て初めに行つたことは陸軍の軍事制度を笑う事であつた。

陸軍の大部隊『鎮台』について、海外遠征能力を持たず、兵站を重視しない部隊をヨーロッパの諸国陸軍の標準部隊 Division - 師団 - のように扱う事について、陸軍の直轄の城をヨーロッパの要塞のようにしている事について笑つた。

日本陸軍側はメツケルの意見を親身に受け入れ『臨時陸軍制度審査委員会』を組織し、陸軍改革に努めた。

陸軍を笑うメツケルであつたが、一目を置く物もあつた。

『陸軍大改革論』であつた。

ある日、兒玉十三朗は山県有朋に兒玉源太郎、桂太郎、川上操六に連れられ三宅坂に立てられたヨーロッパ風のメツケルの住宅に入った。

メツケルと兒玉十三朗は初対面するが、例によつて、君が兒玉かね？と、年と顔、体格が矛盾する兒玉に戸惑つた。

「君の書いた『陸軍大改革論』を読ませてもらったが、成程これを考えるのはヨーロッパの軍人でも希であるな」と、メツケルの話すドイツ語を通訳が訳した。

それを聞いて十三朗はニヤリと笑つた。

メツケルは続けて喋り、通訳が訳した。

「君は近代軍事学に精通しているらしい。ぜひ話がたくて呼んだのだ」

メツケルはモーゼルワインとグラスを取りだし振る舞った。

話は夜遅くまで続き、メツケルは日本に来て初めて痛飲した。

十三朗の話す事に共感し、メツケルの軍事学を一つ聞いて十を理解するのでメツケルはいよいよ上機嫌となった。

「モルトケの言っていた以上に日本には優秀な人材が大勢いる。これでは私が日本にいる必要が無いのではないか？」

メツケルはワインを一息で口に注ぎ込んだ。

「いいいや、我々は理解は出来ませんが日本人だけでは何も出来ません。確かに陸軍大学校に入る若造は優秀です。しかし、頭が良いだけで戦を知らない鼻垂れ供です」

十三朗はワインをなめて肴のチーズを一口かじってから話を続けた。

「我々も18年前に戦を経験してそれなりの自信はついていますが、近代軍事制度についてはまだまだです。ですから『知謀神の如し』と言われるメツケル少佐が日本陸軍に必要不可欠なのです」

十三朗の周りにいた各々も首を縦に振り相槌をうった。

結局、メツケルとの飲み会は朝まで続き、その日は全員が二日酔いをして全滅してしまった。

メツケルが陸軍大学校の講壇に立ったのは翌明治19年の事であった。

メツケルは早々から専門的な軍事学については語らず、軍隊の初歩行動・操典・を話し、学生から反感を買った。

しかし、メツケルの話す操典は学生達が陸軍士官学校で教わった操典より正確で文句の着けようが無かった。

その後から次第と軍事学について講習するようになり、普仏戦争になぜドイツが勝利したか、国際法と開戦の時期と攻撃について彼の持つ知識を学生達に植え込んだ。

学生達はメツケルに愛想を込めて『渋柿ジジイ』というあだ名をつけていた。そして学生達はこれから起こる戦争の主要参謀や指揮官となって行くのであった。

メツケルはその後も学生達に指導し、陸軍改革にも貢献し明治21(1888)年に帰国した。

また、同年には6個鎮台が廃止され新たに海外遠征能力を持った6個の『師団』が編成され、さらに7個の独立旅団が編成され、日本各地工廠・軍直轄の軍需工場・では試作野戦砲やガトリング砲にかわる新兵器の機関銃の開発、製造が活発になっていた。

第十話：メツケル（後書き）

御意見、感想をお待ちしています。

第十一話：馬

明治21年

陸軍は前年から埼玉県所沢の一带を買収し、兒玉十三朗中佐を責任者とした『陸軍気球審査団』は5月25日の晴天の日に初の気球有人飛行試験を行った。

気球は、1783年にフランス人のモンゴルフィエ兄弟が初の気球有人飛行に成功させ、フランス革命戦争（1792～1802）では、フランドル戦線でフランス軍が敵情視察と着弾地点観測のためにガス気球を使用した例を除いて戦闘に投入した例がない。

日本では、明治10（1877）年に教育用理化学機器を製造する島津製作所の所長島津源蔵が同製作所で開発されたガス気球に乗り、日本人初の有人飛行を行い36mまで上昇した。

兒玉十三朗はこれに目を付け、『陸軍大改革論』の作成の後に軍が島津製作所に高性能の気球開発を要求して今に至った。

飛行場には、山県有朋を初めとする陸軍の主要人物に各師旅団長とその参謀達がいた。彼等が見守るなかで気球はゆっくりと高度を上昇させていった。

気球には兒玉十三朗と研修を受けた大尉と中尉の三人が乗り込んでいる。

「やあや、こりゃあばかひどい（すごい）ったらありやしねえて。下にいる人間が粒にしか見えねえわ」

と、兒玉十三朗は上機嫌で二人の尉官に方言の入った新潟言葉で

喋りかけながら、周りの景色を子どもの様に身を乗り出しながら見渡していた。現にその様にしか見えていない。今年で四十一の中年になるというのにその外見は少年そのものであった。

すると、閣下。と望遠鏡で下を覗いていた大尉が十三朗を呼び、

「目標を発見しました」

と言った。

「どこだば？」

十三朗は大尉の方に体を向け手にしていた望遠鏡で指示された場所を見た。

所沢の西にある貯水池に陸軍部隊が布陣をしていた。これは、予め飛行試験と同時に気球による偵察任務の能力も検証するために敵役の陸軍部隊の所在は気球の乗員には秘密にされていた。

「いたぞいた！中尉、『所沢の西の貯水池より連隊規模の敵部隊を発見』と紙に書いて下に落とせ」

命令を受けた中尉は書いた紙を金属製の筒の中に入れて地上に投下した。

地上の陸軍首脳達は落ちてきた筒を拾い、中に入っていた紙を見て一同の意見が一致した。

後に、所沢の陸軍気球審査団は『気球第1連隊』と改編され、各師団には連隊規模を、独立旅団には大隊規模の気球部隊の編成される事となった。

同日25日の晩 東京 山県邸

「ご苦労だったな兒玉」

と、山県は十三朗の盃に酒を注いだ。

「なあに、対した事ではありませんよ」

と十三朗は酒をなめた。しかし、彼がじっくりしていない事に山県は気付いた。

「どうした兒玉。浮かない顔をしておって？」

「わかりましたか山県さん」

十三朗は言った。

山県は、主とは明治始まって以来の付き合いではないか。と言って笑った。

十三朗は舌を出し、軽く後頭をポンツと叩き『一本取られた』という表情をした。

「まあ、山県さんのおかげで気球に大砲、機関銃と私の頭に画いた部隊に近付きましたかね、山県さん。騎兵についてどう考えとりますか？」

十三朗の間掛けに山県は腕を組んで考えた。

「騎兵かあ、昔の騎馬武者とは違い将兵問わず乗馬する兵種の事であるう。それが主の悩みの種か？」

十三朗は苦々しく思った。

山県をトップとする陸軍には騎兵について関心を持つ者は殆んどいなかった。

原因は騎兵という兵種が日本の国防事情、地理、経済に合致しなかった事にある。

騎兵は、その高い機動力を活かした偵察、伝令、奇襲、追撃、側面攻撃、背面攻撃、後方攪乱等と多目的任務をこなす当時の列強国陸軍の花形兵種であった。

18世紀、プロイセン国王ヒリードリヒ大王が騎兵を決戦用の胸甲騎兵、偵察・奇襲・追撃専門の軽騎兵、胸甲騎兵と軽騎兵の中間に当たる竜騎兵の三つに分けられ、以後の列強国陸軍騎兵部隊の主流となった。

そして近代、隣国のロシア帝国の有するコサック騎兵が質と規模ともに世界最強の座に就いていた。

列強国陸軍を模範とする日本が騎兵を重要視しなかった理由の一つは、以前も記述をしたが、創設当初の陸軍は『鎮台』を設置して、その主任務は国土防衛であり、険しい山岳が国土の八割を占める日本では平地を駆ける騎兵は適さなかった。

その後、鎮台から外征能力を得た師団になっても騎兵は大隊規模にしか増強されなかった。

理由は、騎兵は『作る』のではなく育成するからであった。仔馬の頃から育成するためにかかる資金や時間は他の兵種より膨大であ

ったためであった。また、馬について他にも問題があった。

かつて、日本の在来馬による日本騎兵を見たある外国人将校が、馬のような馬。と、皮肉った。

日本の将校は言い返す事ができなかった。日本の在来馬は馬格が小柄で短足で持久走が駄目であった。

そこで陸軍は外国から雌馬を数頭を輸入し、日本馬との間で品種改良した馬を繁殖させているが、数が揃わないのが現状であった。

馬だけでなく、日本人の歴史観にも原因があるだろう。

戦国時代、日本最強と言われた武田騎馬軍団が長篠の合戦で織田・徳川連合軍の三千の鉄砲隊によって一方的な敗退をした。その後の歴史上で大規模な騎馬軍団が編成された例がない。

近代、銃火器の発達と普及が目覚ましくなり、騎兵も大きな的となり被害が多くなる傾向にあるが騎兵の機動力はまだ重宝視されていた。

（騎兵も大事な兵種の一つだ。騎兵を増やさんといけんがはてさて、どうしたもんか……）

と、十三朗は考えながら酒をなめた。だが、彼の脳裏には騎兵が駆け回っており、酒を味わう事が出来なかった。

十三朗の悩みを解決出来る人物が今、フランスに留学している事実を知るのは後少し先の事であった。

第十二話：好古 前篇

日本の騎兵将校秋山好古がフランスに留学したのは明治20年の事であった。

彼は安政6（1859）年に伊予国松山の下級藩士の家で生まれた。10才の時に明治維新が起こり、松山藩は徳川方に着いた事で朝敵とされ、朝廷に多額の賠償を支払われた上で、朝廷方の土佐藩の保護下に置かれた。

鳥羽・伏見の戦いに出兵した事で藩の財政は悪化。更には朝廷への賠償支払いのために松山藩の財政は危機に瀕した。この影響は藩の下級武士の家、秋山家にも大きな打撃となった。秋山家の家族は好古を含め育ち盛りの子どもが4人もおり家計を圧迫した。さらに、もう一人小さな家族が加わった。明治元年に五男が誕生した。

これには両親も困惑した。始めは産婆に頼み、墮ろそうと考えたが、考えただけで行わなかった。いくら家計が苦しいとは言え、我が子を殺す所業が出来るわけがなかった。そこで寺に預ける事を考えたが好古は反対した。

「あしが大きくなったら、偉くなってお豆腐程のお金をこしらえるから赤ん坊を寺に預けるのはいやぞなもし」

と、好古は言い、ついに両親折れ、赤ん坊を寺に預ける事も殺す事もしないで育てる事にした。

赤ん坊は淳五郎真之と名付けられ、兒玉十三郎の弟の十五郎の海軍兵学校の同期として共に精進する事となる。

好古は家計と勉学に必要な道具を揃えるため、風呂屋で働いた。17の歳に大阪の師範学校 教員育成の学校 - に入学し、翌年の明治9年7月に卒業し、その後は大阪、名古屋で教員の仕事をして生計をたてた。

明治10年、19歳にして教員の仕事にようやく馴染めて来た頃、名古屋の付属小学校の主事で好古と同郷の和久正辰に会った。歳は三十半ばで、明治維新を体験した和久は、日頃から薩長の天下が気に入らなかつた。

『薩長の出身』

という理由だけで能力の欠片もない人間でも優遇されていた。これに不満を抱かない者はなく、和久もその一人であつた。そんな時に好古が現れた。

(この男は教員より軍人に向いているな)

と、和久は好古の『鼻』を見て思った。好古の鼻は、外国人のように大きな鼻をしていた。和久は、大きな鼻の人間は根性と責任感があり、立派な人物になると聞いた事があつた。

「秋山君、君は軍人になる気はないか？」

と、和久は単刀直入に好古に言った。

「軍人に？」

「そうだ、今の薩長の時勢で朝敵の汚名を着せられた藩の人間は例え頭が良くても学校の教員程度にしかねなんだが、西洋の制度を加えた新しい軍隊を作っている。そのためにかつての朝敵を問わず人材を集めている」

「…あしは軍人になる気はございません」
と、最初は和久の誘いを一蹴したが、好古も武士の家の生まれとして、また男として軍人という道に心が動じた。その後も和久は軍への入隊を勧められ、ついに好古は折れた。

好古は西南戦争の混乱の中で、明治10年の5月に陸軍士官学校第3期生として127名と共に入学。修業期間が1年短い騎兵科に入ることにした。彼の他に同期で騎兵科に入ったのは他2名であった。士官学校は明治12年12月に卒業し陸軍騎兵少尉となり、翌年7月には東京鎮台騎兵第1大隊第小隊長に任じられ、明治16年騎兵中尉に昇進し、更に昨年創設された陸軍大学の第1期生として入学が決まった。

余談だが同年に上京してきた弟の真之と平川町の借家で過ごしたが、生活そのものは極端に質素で厳しいものだった。家の中は生きていくために必要な最低限の物しかなかった。茶碗は1つしかなく好古が茶碗に注いだ酒を飲み干すと真之に渡しそれで飯を盛って食う。おかずは沢庵しかない。階級上、高い給料を貰っているが、その殆どは酒代に消える。好古の頭には騎兵と酒の事しか考えていないと言っても過言ではなく、衣食住については『生きていく』事を満たせればそれ以上の欲は出さなかった。時に好古25歳のときであった。

陸軍大学校に入学して早々から軍事学を学ぶ事はなかった。まだ外国からの教官の選定作業中であり、その間一般知識を明治18年まで学んだ。

ドイツ帝国から来たメッケル少佐の講義は無茶苦茶であり不満を言う学生も多かったが、それでも実戦的であり誰もがメッケルの言

葉に耳を傾けた。ある時メツケルの講義が終わり教室から出ようとした好古はメツケルに呼び止められた。

「なんででしょうか？」

メツケルは好古にペラペラとドイツ語を話しかけてきた。

「……？」

好古はただ呆然とドイツ語を聞き、何を言っているんだこの髭親父は、と内心で思っていたら日本人の通訳官が助け舟をよこした。通訳官はドイツ語でメツケルに一言何かを言うとメツケルは驚いた顔をして少し好古の顔を除いて一言だけ言って去っていった。

「君の日本人離れた鼻を見てヨーロッパ人と間違えたんだよ」と、通訳官は言っつてメツケルの後を追った。一人残った好古は苦笑いをした。

第十三話：好古 後篇

明治18年12月に好古達、陸軍大学校の第1期生が卒業した。だが、当初は19名いた学生のうち卒業できたのは半数の10名が卒業した。

その10名の卒業生達のために陸軍大学校に各界の著名人が集まっていた。

「騎兵中尉秋山好古君」

「ハイツ！」

好古は叫ぶように返事をして、中央に設置された階段を上がり陸軍大学校初代校長の兒玉源太郎の前に立った。

「参謀職務認証書を授与する……しっかりと頑張れよ」と、兒玉は好古に参謀資格書を手渡した。

こうして好古は陸軍大学校を卒業し、明治19年の4月まで参謀本部勤務をしていた。その後、東京鎮台参謀となり6月には大尉に昇進した。

そして、同じ騎兵で一階級上森岡正元大尉と共に在京の騎兵将校を集め『騎兵会』を結成し、階級をと問わず酒を飲み交わしながら日本騎兵の将来を憂い、愚痴をこぼしながら今後の騎兵の展望を話し合った。

こうして好古が騎兵将校として充実していた頃に大事が舞い込んできた。

フランス留学中の旧松山藩主久松定謨が同国のサンシール士官学校への入学が決まった。そこで、その補導役に好古が選ばれたのだ。選ばれた好古にとっては困った話だった。

（今は誰もがドイツに留学する時世で、フランスに行くとは、困ったことになったぞな）

近い将来にドイツ留学を考えていた好古であったが、先祖代々からの主従関係は明治の時代となっても易々とは絶つことは出来ず、松山にいる父の面目を考えれば断ることもできなかった。

返事を留保しているうちに松山から久松家の家令藤野漸すずむが好古の借家に訪れた。

「是非とも信（好古の幼名、信三郎）さんには定謨様の補導を承ってほしい」

「……………」

「信さんは将来陸軍の担うためドイツに留学したい事は重々承知している。しかしそこを何とか曲げてはくれまいか？」

「……………」

「……………やはり、駄目か…無理もないのかのう。信さんが無理のなら仙波に頼むしかないかのう」

（仙波に!?!）

藤野の言葉に好古は異様な反応をした。

仙波太郎 旧松山藩出身で好古より四つ年上であり陸軍士官学校第二期学生の歩兵科であり陸軍大学校同期で卒業時の成績は第三位であり、好古とは良い酒仲間であるが彼は武士ではなく庄屋の子である。

旧藩主・華族・の補導役が武士以外の人間が選ばれたのであれば好古の立場は無くなる。

「この秋山、渡仏いたします」

「そうか、かたじけない！」

藤野は好古に近寄り、彼の手を強く握り取った。

（藤野様には一杯食わされたぞな）
秋山は思った。

こうして好古は軍服に飾られた黄金色の参謀肩章を外すこととなり、出世への道が遠ざかってしまった。

「フランスに行くのか？」

と、好古の上司で東京鎮台司令官の三好重臣中将は言った。

「はい」

「騎兵会はどうするのだ？」

「盛岡大尉に頼んであり、問題はありません」

「私費留学になるぞ」

「久松家より手当がきます」

「そうか……」

好古に将来の参謀として高い期待を抱いていた三好は彼の渡仏は反対でありどうにか思いとどまらせようとあれこれと言ったが遂に兜を脱いだ。

「では、私はこれで失礼いたします」

そう言って好古は三好に敬礼をして指令室を出ようとした時、後ろから三好が呼び止めた。

「何かあつたら手紙をよこせ、力になってやる」

「はっ、ありがとうございます」

好古は再度敬礼をして指令室を後にした。

明治20年7月25日、横浜港を出港しフランスのパリへ向かった。

渡仏は好古にとって最良の結果となった。大陸の列強国・文明国としてその培ってきた騎兵の伝統に触れていき好古にとって宝庫のようであった。

「フランス騎兵の馬術はドイツ騎兵のそれとでは比べ物にならないに立派なもんぞなもし」

好古もまたサンシール士官学校でフランス騎兵を学んだ。そのために馬1頭を購入し馬の世話をする人間も雇い、このため久松家の手当てがあっても常の食事がパンとチーズだけの質素なものとなる日が続いたが、常に質素を主んじていた好古にはこれと言ってさし支えがあるものではなかった。

こうして好古がフランス騎兵に浸っているうちに一つの結論にたどり着いた。

「日本騎兵はフランス流のままが良い」

と好古は考えたが、ドイツ式に転換されつつある日本陸軍の中で騎兵だけがフランス流で通すのは無理があった。

そんな時に転機が訪れた。明治22年、山県有朋陸軍中将兼内務大臣がヨーロッパの地方制度の視察のためにパリを訪れた。これは内務大臣としての面でありもう一つの面は日本の指導者の一人としてドイツ式に転換したことで冷えきった日仏関係の改善のためにパリを訪れた。

挨拶を兼ねて山県の宿泊するホテルへと向かった。ホテルには軍人や外交官等様々な役職のため渡仏した在仏日本人でこったがえしていた。

好古は順番を待ってから山県のいる部屋に入った。そこには山県についてきた武官や文官などがおりその中央の椅子に山県だけが腰を下ろしている。

山県は好古の事を知っていた。かつて戊辰戦争で共に戦った、好古の上司であった三好重臣から彼の話聞いていた。

「秋山大尉であります」

「君が秋山か三好から話は窺っている」

「そうでありますか」

これが好古と山県の初交渉であった。その後も山県は好古をちよくちよく呼び、² ³ 会話をして終わるが繰り返されたが次第に会話の量も内容も増えつていった。

そしてある日の事、

「これを南仏のリヨンで静養中の高官に届けてほしいのだが」

1年間フランスに滞在している好古はフランス語にも堪能しており些細のない仕事ですぐに引き受けパリ駅から汽車に乗りリオンへ向かった。ここで好古は油断をした。長い道のりのため、旅の共に携えていたブランデーを飲んでいたらつい居眠りをしてしまった。

好古が目覚めると、前の席に見知らぬ日本人の少年が本を読んでいた。

(こりゃあ、夢か?)

好古があくびをした丁度に少年は彼に気付いた。

「目が覚めたか、秋山大尉」

と、少年は言った。

「君は誰ぞなもし？」

「兒玉十三郎」

「！あなたは兒玉閣下でありましたか！？」

好古は一気に酔いと睡魔から覚め、敬礼をしようとしたが、十三郎は手を前に出して制止させた。

「いいんていいんて、んげなこつたあ（そんなこと）こつけど」（こんなところで）でしのうて（しなくて）」

「はあ、ところで閣下もリヨンに用があるのですか？」

「いや、んなに用があつて山県さんから居場所を聞いてすつ飛んできたんだが…しっかし秋山、気をつけるや」

「？」

「んなが酔っぱらつて寝込んでた時に物盗りがんなのそればあかっぱらおうとしとつたぞ」

と、十三郎は好古の荷物に指をさした。

「そうでしたか、危うく失態を犯すところでした」

「何ね、気にすることはない。まあ、そんげこたあいとして早速本題に入ろうか」

ニコニコしていた十三郎の顔が一変して真剣になった。

「はい」

「騎兵についてんなの考えを全て聞きたい」

好古は今まで培ってきた騎兵概念・展望などまた、いままでのうつぶんをはらすかのように騎兵を軽視してきた陸軍の体制も指摘した。

十三朗は黙って好古の話を聞いていたが途中で、汽車は途中駅に着いた。

「わかった、もういい！」
と言つて話を中断させた。

「大体の話はわかったわ。秋山大尉、んなに日本騎兵の全てを任せるすけ、面倒な事があつたらわしに言えや力になるすけに」
十三朗は席を立ちあがった。

「閣下はここで降りるのですか？」

「ああ、まだわしにはやる事が山ほどあつてなあ、また他所に行かにはいけんで」

そう言つて十三朗は汽車から降りた。

好古は汽車の窓を開けて十三朗を見た。

「閣下、恩にきります」

「気にすんなや、これも日本のためだかな、秋山こんだあ日本で会おうー！」

「はい、閣下もお元気で！」

好古を乗せた汽車は汽笛と鳴らして走り去って行った。

(秋山好古、想像通りの使える男だ)

と、十三朗は思った。

第十四話：大津事件

明治の時代が20年経っても、国民達の日本の近代化への努力は驚く程続いていた。

明治22（1889）年2月11日に『大日本帝国憲法』が発布された。

12月の末には、山県有朋を総理大臣とする内閣が誕生した。とはいえ、山県内閣の政策の裏には常に十三郎の知恵が働いていた。

大日本帝国憲法は、アジアの国の中でも長い歴史と文化を持つオスマン帝国が1876年に公布したオスマン帝国憲法に次いで2番目である。しかし、オスマン帝国憲法は1877年の露土戦争の敗北により政治は皇帝による専制に移行してしまい、1878年にオスマン帝国憲法はその機能を停止してしまう。

日本の大日本帝国憲法は翌年の明治23年、憲法の公布後から安定的な継続を続いていく事となり、実質アジアで最初の憲法に基づいた国家運営がなされていた。

同年に第一回の衆議院選挙と帝国議会が行われた。

日本の近代化もようやく、その地盤が固まりつつあった中、明治24年に日本の存亡に関わる重大な事件が発生した。

5月も中旬に入った頃になる。政府内には重苦しい空気が漂って

いた。軍部も同様である。

東京 陸軍省

一室に山県有朋と彼の片腕の兒玉十三朗がいた。

「まったくもって、ひどい事になりましたな」 十三朗は言った。

山県は眉間に皺を寄せ、手に持つ煙草を灰皿に捨てた。灰皿は山県が捨てた煙草の山となっている。山県内閣は5月6日に総辞職しており、今回の『事件』責任は松方正義内閣まつかたまさよしが負っていた。

「全くその通りじゃ……兒玉、日本はロシアと戦になると思うか？」

「現状からでは予想出来ません。しばらく様子を見守らねばならんでしょう」

「ふうむ、たかが青二才一人のために日本が潰れるかもしれんとは」

山県は煙草を灰皿に捨てた。

事の発端はこうなる。

ユーラシア大陸の半分を侵略によって領土を拡大してきたロシア帝国は、ヨーロッパへの勢力の拡大を図るために政治腐心が浸透するオスマン帝国に目をつけた。

中世の時代、ヨーロッパ諸国と争った西アジアに君臨する大国と

しての面影などは今は無く、ロシアとのギリシア独立戦争・クリミア戦争・露土戦争の三つの戦争により、オスマン帝国の領土を徐々に削られていった。このロシアの行為に横槍を入れて来たのがドイツ帝国とイギリスである。

誕生間もないドイツ帝国は自国権益保護ために列強諸国の勢力均衡を計るため、宰相ビスマルクはイギリスを用いて巧みな外交力により、ベルリン会議を開催し、ロシア帝国が獲得したオスマン帝国の権益の放棄させる事に成功した。

こうして、ロシア帝国はヨーロッパでの勢力拡大に失敗した。そこで次に目をつけたのが、貧しく未開拓の多いアジアであった。

ロシアはヨーロッパ進出と並行してアジアで一大事業を進めている。モスクワから極東のウラジオストクまで全長9,794km、ロシア国内東西を横断する世界最長の鉄道『シベリア鉄道』の建設であった。

このシベリア鉄道の建設の視察のため皇太子ニコライは艦隊を引き連れてウラジオストクに向かった。その途中に日本を観光目的で訪れた。

日本政府としては、日露関係の向上への絶好の機会と捉え、国をあげてニコライを歓迎した。国民達も歓迎を尽した。しかしこれは日露友好を期待するもの出はなく、超大国ロシアへの恐怖心が根底にあった。また、一部では艦隊を引き連れてきたニコライ皇太子を『日本を征服するための下見に来たのではないか』との噂が囁かれた。

ニコライを乗せた軍艦アゾフ号は4月27日に長崎に寄港した。

ニコライは5月4日に政府公式の記録では初めて日本の地に降りたとされているが、実際はお忍びでチヨクチヨク長崎の街に行っていた。

九州は長崎、鹿児島を観光し、次に京都を周り季節外れの五山送り火を観覧した。そして、5月11日に琵琶湖への日帰り観光を済ませ、ニコライ一行を乗せた人力車は天津市に入った。

天津市の街中には多くのロシア国旗と日の丸国旗がなびき、ニコライを一目見ようと民衆が集まり、彼等を監視するために滋賀県警の警察官が警備にあたった。

警備にあたる警察官の中に守山署に所属する巡査の津田三蔵がいた。西南戦争に官軍として従軍して各地を転戦していき、功績から勲七等を授与され、国家に対する忠誠心の厚い男であった。しかし、この厚い忠誠心によって彼の運命は最悪の方向に向かって。

ニコライを乗せた人力車が津田の前を通りかかった時に事件は起きた。

津田は突然、腰に吊してあるサーベルを抜きニコライに斬りかかったのである。右側頭部を斬られ傷の深さは9cm程に達していた。津田はニコライに止めを刺す前に捕まった。

この事件が世に言う『大津事件』である。

日本に暗雲が漂った。

事態を知った明治天皇は自らニコライが療養している京都の常盤ホテルに出向き、見舞いに伺った。

政府は『ロシアの報復』を危惧し、津田三蔵の死刑を司法に要求したが、就任したばかりの大審院（最高裁判所）院長児島惟謙こしまこれたかは行政による司法への干渉は日本の法治国家への威信に関わり、後々の外交交渉に悪影響を及ぼすとして、あくまで法に基づく裁判を行うべきと主張して一步も譲らなかつた。

「山県さん、政府としては津田を死刑にしたいようですね」

「うむ、伊藤（博文・現貴族院長）さんに青木（周蔵・現外務大臣）君に西郷（従道・つぐみち現内務大臣兼陸軍中将）君が主な面子だ」

山県は少し間を置き、十三朗の表情を伺ってみた。彼の表情はいたつて変わる事は無かつたが、山県は長い付き合いから十三朗の考えを把握した。

「児玉は津田の死刑には反対か？」

「いえ、津田を殺してやりたいと思っておりますが私としては…」

…」

後日、児玉十三朗は西郷従道を訪ねた。ロシアについての報告書を提出した。

今回の事件を口実にロシアは、北海道と千島列島の割譲。また、対馬と佐世保の租借の可能性は有るとするも実行に移る可能性は低いとしていた。

領土割譲を足掛かりに、段階的に日本圧力をかけ植民地化にすることは火を見るより明らかな事であり、そうなれば極東の勢力図はロシアに一気に傾く事は明白である。そうなれば、インドに権益があるイギリスにとって『目の上のたんこぶ』であり、イギリスは自国の権益保護のため、外交力を駆使してロシアに横槍を入れて来るとしている。

次に、ロシアの武力行使の可能性も極めて低いとしている。極東方面でのロシア陸軍の兵士を万単位で輸送するだけの船の数がない。

海軍としても標的となる日本海軍の艦を安全地帯に一時的待避を行わせる事とすれば問題は無い。また、ロシア海軍が日本国土に艦砲射撃してくる可能性も杞憂に過ぎず、仮に行ってきたとしても国際世論がロシアを批判し、日本の味方となる。と、分析と詳細が詳しく書かれていた。

「児玉さあ、これに書かれている事を信じてようござんすか？」

西郷は声こそはおっとりとしているが、その目付きは鋭く、威圧を放っていた。

彼は若き日の頃、薩英戦争に従軍し列強の圧倒的な技術力と沿岸の村々に対する艦砲射撃による非道行為（国際法に違反していたためイギリス本国は艦隊司令官を批判した）を間あたりにしており、当時を知る者は列強に対する恐怖心と警戒心がとても強い。

「はい、児玉源太郎や川上操六らと検証し合って出した結果です。ロシアは攻めては来ません。閣下、日本はやつと憲法や議会が出来て、列強と同じやり方で政治が出来るようになりましたが、今回の事件で政府が司法に干渉してしまえば、法を尊守するイギリスが我が国の法制度を厳しく評価して、列強との対等な外交交渉が出来なくなります。そうなればこれまでの苦勞がごとく水の泡となり、血を流して倒れていった多くの同胞達も報えません」

西郷はしばらく無言でうつ向いた。彼の中で二つの感情が衝突し合っていると十三朗は思った。

「よか分かった。……しかし、万が一ロシアと戦ゆっせになったら腹を切らねばならんぞ」

と、西郷はうつ向いたまま言った。

「わかっております。ロシア軍を退けた日には、この腹をかつさばきます。介錯はいりません」

「それならよか。伊藤さん達には、おいが話しをつけておきましよう」

西郷は顔を上げて普段のおっとりした口調と表情をして言った。

「閣下、ありがとうございます」

十三朗は西郷に対して深く頭を下げた。

5月24日に裁判が始まり、午後に判決が下された。

謀殺未遂ノ犯罪ニシテ被告三蔵ヲ無期徒刑ニ処スルモノ也

6月3日にはロシアから『貴国の法規に基づくものとせば満足するの外なし』という返事が届き、領土割譲や賠償金の要求はなかった。

この裁判の結果は海外から法治国家として日本の評価が高く、後の不平等条約解消に大きく影響する事となる。

児玉十三郎が裁判の結果を知ったのは25日の事で、前日の24日に児島から児玉宛ての電報が届いていた。

電報には『カツカ ノ ゴシエンニ カンシャイタシマス』と書かれていた。

第十五話：海軍事情

明治24年 東京 某料亭

「大津での事件、お疲れだったな兄さま」と、十五朗は十三朗の盃に酒を注いだ。

「なあに、山県さんや西郷さんに『こうした方が良い』と言っただけさ」

十三朗はそう言って弟の注いだ酒を舐めた。

「ですが閣下のおかげであしの兄^{あに}さんは仕事がかどって大変感謝しています」

言っただのは秋山真之である。

十三朗が久しぶりに平川町にある自宅に帰ってきた時、丁度海軍にいた十五朗が帰って来ており、真之を連れて来て共に勉学に励んでいた。

十三朗は気晴らしと言って、行き着けの高級料亭に二人を連れて行ったのだった。

「秋山君、君の兄さまはこれだと決めたら最後まで貫き通す男だね？」

「はいっ」

「だから騎兵を任せただ。騎兵はこれから必要になる」

この言葉に十五朗と真之は即座に反応した。

「兄さ、ひよっとすると日本は清と戦になるんか？」
と十五朗は言った。

「ああ、朝鮮を巡って戦になる」

「しかし、閣下」

真之が口を挟んできた。

「うん？」

「閣下は北洋艦隊をご存知ですか？」

「北洋艦隊……ああ、北洋水師の事か」
と、十三朗は手を叩いた。

清国は列強との戦争や国内での反乱に手痛い敗北をした反省から、西洋技術の導入を計るため『洋務運動』を行った事を以前触れた。

清は幾度の戦乱によって国力が衰退したとはいえ、近代化の規模と速度は日本を上回っていた。

海軍も洋務運動の影響を受けた。

北洋水師

南洋水師

広東水師

福建水師

と、四つの近代艦隊が整備され、このうち日本海軍から『北洋艦隊』と呼ばれる北洋水師は、山東半島の先端部の港湾都市威海衛を拠点に日本海軍を仮想敵と見なして配置されている。また、他の三水師に比べ最新鋭の艦が優先的に配備されており、この艦隊戦力だけで日本海軍の戦力を上回っていた。

北洋水師には、大国清としての威信と近代化する海軍を象徴する二隻の艦がある。

定遠^{ていえん}

鎮遠^{ちんえん}

と命名されたドイツのフルカン造船所で建造された甲鉄砲塔艦と呼ばれる戦艦で性能も当時最高性能を誇っていた。

排水量は常備7,220t

全長91・0m

全幅18・3m

巨艦で、装甲も厚い所で350mm、薄くても70mmと分厚く、現在の大砲では、この装甲を貫く術は無いと言われていた。更に主砲は30・5cm20口径連装砲と強力でしかも、世界で初めて回

転式砲塔を2基4門装備されており、日本海軍の軍艦の中に定遠・鎮遠に勝らずとも劣らない艦は一隻も無くまさに、大人と子どもの差であった。

この二隻を筆頭とした北海艦隊は明治24年に『親善』を名目とした威圧外交で日本各地の港に寄港し、各界要人を招待しての親睦会と称して定鎮・遠鎮の主砲試射等の性能を披露し、日本人に二艦の強大差を植え付けた。

兒玉十三朗と十五朗に秋山真之も各々別の場所でのこの艦の性能を目にしていた。特に、海軍兵学校を卒業して間もない十五朗と真之は、海軍将校の端くれとして暇を見ては共に対定遠・鎮遠の対決法を思案する日々に明け暮れていた。

「つまり海軍さんは定遠と鎮遠が目の上のたんこぶで現状のままで戦になったら危うくなる。と言うわけか」

と、十三朗は真之に尋ねた。

「はい、あの二艦が喧嘩（海戦）の相手では分が悪いです。それに今の海軍の予算では定遠のような艦は買えません」

「ふうむ、成程なあ」

十三朗は腕を組少しの間考えた。この間に真之と十五朗は出される料理を口に運んでほうばった。

海戦は野戦とは違う。海上には艦を隠せる障害物等はなく、常に艦の性能で勝敗が決する。

「海軍に疎いわしが言うのも何だが、やはり新しい軍艦を買っ
かないなあ」

十三朗は口を開いた。

「兄さあ、さつき秋山が言ったろが、海軍には定遠と鎮遠程の戦艦を買っただけの銭が……」

「いややれ、『戦艦』を買っんじゃない」

「じゃあ、何買っん？」

十五朗が尋ねた。

「足が速くて砲をどつと（沢山）撃てる艦だ。それなら、巡洋艦でもいい。清の様な堅艦巨砲が造れるなら足の速い軍艦だって造れていいこてね」

「閣下、巡洋艦では戦艦は沈められませんぞな」

当時の海戦における艦隊決戦では軍艦に搭載された口径の大きい大砲と数の差で勝敗を決める一因を担う。そのため、戦艦は巨艦であり、大砲を沢山搭載できる上に装甲も厚い。

一方で巡洋艦はその名の通り、遠くの地まで遠戦するために設計されているため、ある程度のサイズはあるが、戦艦に比べれば小さく、攻守ともに劣るため戦艦を沈める事は出来ない。十三朗は陸軍だから海軍の知識が疎いため、軽弾みで言ったのかと真之は思った。

「いや、何も『沈める』事にこだわらんで速い足を活かして、敵を翻弄させながら大砲を撃ち込んで艦の上の建造物を破壊しまくるんだ。そうなりゃあ、戦艦もただの海に浮く鉄の塊に過ぎん」

「…そうか、成程」

真之は深く首を振って納得した反応に機嫌を良くした十三郎は、
一つ戦国時代の話をした。

『甲斐の虎』と称された武田信玄亡き後、織田信長が戦国の世に
台頭し、天正三（1575）年には長篠の合戦にて信玄の子の武田
勝頼が率いる騎馬軍団を三千丁の鉄砲を使用した事によって粉碎さ
れた。

鉄砲隊と言う新しい兵種を軍の主力とした信長は一気に天下取り
に乗り出し、勢力を拡大させていく中で天正五（1577）年、能
登に進行中の四万の織田軍が加賀国の手取川に布陣中に雨の降る夜
陰に紛れた上杉謙信の軍勢に夜襲を受け大損害を被り敗走した。こ
の時、鉄砲は暗闇の中だったための絞る事が出来ず、更には雨の
湿気のために火縄に火がつかず鉄砲が使えず、鉄砲隊は上杉軍に蹂
躪された。

どのような新兵器にも弱点というものは必ず存在し、そこを突く
のが大将の素質であり、大将は敵が攻めて来ると予想する所からは
決して攻めず、予想外の所から攻め込むものだと言った。

定遠と鎮遠による威圧外交は清国側の予想とは裏腹に、日本海軍
の戦力増強に拍車が掛った。帝国議会では、海軍の軍備拡張のため
の予算が可決され、日本初の戦艦富士と八島の発注が決定した。

後に日本は、国家の存亡を賭け幾度となく諸外国との大戦争を繰り広げていく。その都度、日本海軍は『連合艦隊』という主力艦隊を繰り出していき列強諸国に強い存在感を示していく事となる。

明治24年に、二人のコンビが日本海軍を世界に通用する強大な海軍へと改革し、『連合艦隊』を作っていく事となる。

一人は山本権兵衛（しんのひょうえ）といい、周りからは『ごんべえ』と呼ばれるので、その名で通す薩摩国加治屋町出身の男で、戊辰戦争の時は年を誤魔化して薩摩の藩兵として従軍して各地を転戦した。戦後は特に何かにしていこうとは考えず、相撲取になろうと思っていた所、同郷の西郷隆盛の説得を受けて旧幕臣の勝海舟の下へ師事した。その後、海軍兵学校の前身の兵学寮第二期生に入り、創設されたばかりの海軍に入った。

この時代、権兵衛のみならず当時の薩摩隼人の大人から子どもまで、何らかの考え等が相手と食い違い、埒が明かなくなったら最後の手段として拳で語り合う習慣があり、年や階級を問わない。

兵学寮時代、同期にして同郷の東郷平八郎と意見が対立してもめた。結局、白黒つけるために喧嘩となったが、軍人である以上拳で語り合う事が出来ず、マスト登りで勝負を着けたり、講義の祭りはこうではないのですかと、日本人の新米講師に意見した。講師も意地を張り反論すると、『お前は実戦を経験した事があるか!？』と、自身の戊辰戦争での実戦経験を下に、何時いかなる時に兵を動かすかを艦に応用させた考えを述べて講師を言い負かせた。

また、行動も大胆である。彼が若い海軍士官であった頃は、薩摩の人間だけしか海軍に入れず、権兵衛はいわばエリートであった。そのため、海軍士官達は薩摩士族の令嬢を妻に迎える者が多かった

が、権兵衛はある日、同期と品川青楼にいった際、その若い遊女の一人に新潟からきた登喜子という娘がいた。彼女は貧しい漁村の家の三女であるため遊女となった。

登喜子の身の上と華麗さに心を奪われた彼女を権兵衛は自分の女にする事を決心し、直ぐ様同志を募り、ある晩に仲間と共謀して品川青楼から登喜子を連れ出してしまい、そのまま権兵衛の妻とした。この事態は当時、薩長の時代であり、海軍は薩摩の人間に権兵衛の知人が多きいたために不問とされ事なきをえたのだった。

その後、権兵衛は巡洋艦高雄に高千穂の艦長を歴任し、明治24年に陸に上がり海軍大臣官房主事となった。この時の階級は大佐で異例の職務であった。この人事を行ったのは海軍大臣兼内務大臣にして、陸海軍中將の西郷従道である。

権兵衛と従道には直接の接点はなかったが、兄の西郷隆盛は、かつて相撲取になろうとした権兵衛を説得させ海軍に入れた過去があった。

兄が見込んだ男であり、また、権兵衛の噂は陸軍にいた頃から耳にしており、かなりの切者と従道は思ったからであった。

権兵衛にとって従道の海軍大臣就任には難色を示した。従道は長い間陸軍に居たため何かと面倒が生じるのは目に見えていた。

そのため、権兵衛は従道のために今後の海軍の政策を示した大量のレポートを提出した。後日、権兵衛は従道にレポートを読んだ感想を尋ねたが、従道は読んでいない、と言った。権兵衛は最初ばかりは海軍に慣れるため忙しくて読む暇がないと思っただが、その後もレポートを読んだかと聞く度に、読んでいないと返して来るのでつ

いに堪忍袋の緒が切れた。

「閣下！何故おいの報告書を読まんのですか！」

権兵衛は眉間に皺をよせて従道に怒鳴った。しかし、当の本人はニコニコしていた。

「おはん（お前）は上官のおいによくそげんな態度がとれるな？」と従道は言くと、おはんの様な人の階級をいちいち気にしていたら、何時までたっても海軍は三流のままです！と怒鳴った。

（兄おやの言う通り、この男は使える）

と従道は思い、高らかに笑いだした。

「山本はん、おいは長い間陸軍にいました。じゃっけん、いまさら海軍の事など頭に入りもはん。それで山本はん、ここは一つ海軍の政策はおはん一人に任せよ思いました。おはんの仕事に何か問題が起きればおいがそれを掃除します」

従道の心中を知った権兵衛は、先程までの怒りが何処かへと吹き飛んで行った。こうして、一大佐の身分の権兵衛が一人で海軍を改革していく大義名分を得た。

この時期で権兵衛が行った政策の事の中で特に力を注いだのは人事の刷新であった。

2年かけて『予備役編入者名簿』を作成し、明治26年に従道に提出した。予備役に編入されるのは将官を8名、尉佐官89名の計97名に上った。この中には海軍軍令部長や権兵衛と親しく付き合っただけの薩摩出身者が殆んどであった。

流石に従道も眉をひそめたが、全てを権兵衛に任せため、人事刷新を承認するしかなかった。

後日、名簿に載った97名の将校を海軍省の一室に集め、予備役編入の件を伝えた。この事を伝えるのは従道の仕事であつたが、あえて権兵衛がこれをした。

当然、97名の将校は不満をあらわにした。

「この人事を決めたのは誰だ！」

一人の将官が権兵衛に大声で問掛けた。おいです。と、権兵衛はあっさりと答えたら、途端に97名の矛先が一瞬にして権兵衛に集まり、罵声が飛んだ。

「おはんは大佐の分際で何を考えている！」

「こんな事では海軍は弱くなるばかりだ！」

「これで軍の秩序があつたものではないわ！」

など云々と似たりよつたりの罵声を権兵衛は微動さにせず黙つて暫く聞いていると、誰もが言う事を言つて何も言わなくなつた。

「おはん等に聞くが…」

と、権兵衛は口を開いき、装甲艦の仕組みを言える者は居るか？と尋ねた。すると、彼等は互いの顔を見渡すだけで誰かが装甲艦の説明をして来る気配をみせなかつた。

また、少ししてから、今の世界海軍の情勢を詳しく話して、日本

海軍がどのようにしていけばよいか話せる者は居るか？と尋ねたが誰一人話せる者は居なかった。この時、権兵衛の目付きは獲物を狙う虎の様に鋭くなっており、いよいよ周りをこの視線で圧倒してき

た。
「おはん等は、御一新（明治威信）の時にただ薩摩出身者だった者や、幕府海軍の船乗りなだけが偉くなっただけで縁に今の海軍情勢に疎い者ばかりだ」

最早、誰も言い返す者は無く、先程までの威勢は消え失せ権兵衛の独壇場と化していた。

「海軍は、艦隊や艦を操るには優秀な人材がいる。おはん等がいなくても西洋の海軍教育を受けた若つかもんが立派に海軍を引つ張って行く……海軍のため、日本のためと思うのならどうか私情を捨ててくれ」

こうして将校等は一人、また一人と力無く次々と部屋から出ていき、最後に残ったのは数名の権兵衛の友人達であった。

「…許してくれとは言わん、申し訳ない」
と、権兵衛は席を立ち、頭を下げた。

「山本はん、おはんの言う通りこの人事が海軍のためならおい達は何も言わず海軍を去り申す」

と、一人が言うつと、後の数人も頷いた。

「すまん」

権兵衛は目に涙を浮かべた。

人事刷新が行われていく中で海軍の新型艦が続々と配備されていた。

松島

敷島

橋立

と、日本三景から名をとった最新の防護巡洋艦を筆頭とし、国産初の巡洋艦も一隻就役させた。

秋津洲

が、それである。

更に、定遠・鎮遠に対抗するため、当時としては最速23ノットを誇った巡洋艦

吉野

を就役させた。これは、15ノットしか出せない定遠・鎮遠に対し23ノットの最速で翻弄させ、小口径の砲で打撃を与え、最終的にはスクラップに追い込むという作戦であり、偶然にも兒玉十三郎が秋山真之に話した戦略がそのまま海軍戦略と同じであった。

第十六話：朝鮮有事

明治27（1894）年

日清間の対立の要因となっている朝鮮で反乱が起きた。

朝鮮の歴史は、14世紀の末1392年、日本では將軍足利義満が半世紀に渡り国内を二分して争った南北朝の動乱を終息させた時期に、高麗の武將李成桂が国王恭讓王を廃位させ、自らが国王となり彼の子孫が朝鮮に君臨し続けた。

その後の時代の経過の中で、豊臣秀吉の朝鮮出兵で国運が尽き掛けたが、秀吉の死去と共に難を逃れた。しかし、1619年に明と朝鮮の連合軍はサルフの戦いで後の清となる後金に敗れ、明の滅亡後に城下の盟を結ばれ清の属国となる。それ以降の朝鮮は平和を保っていたが、大陸西方のヨーロッパでは各国が絶えず戦いを繰り広げて行く中で絶対主義が芽生え、大航海時代が始まり、植民地争奪の侵略政策が始まった。

19世紀には、いよいよ東アジアに及び、朝鮮の宗主国の清が最初の餌食とり、多くの権利を奪われ半植民地化が進んだ。日本は辛くも明治維新によって植民地化を免れた。しかし朝鮮は、旧態依然のまま鎖国を維持していた。

1866年8月、米英の民間企業が共同運営する武装商船ジェネラル・シャーマン号が朝鮮の平壤に不法侵入し、退去勧告を要求してきた朝鮮の使者を拉致した挙句、上陸した船員が周辺の村々を襲撃し、略奪と殺戮を行った。

この蛮行に激怒した民衆と軍はジェネラル・シャーマン号を焼き

打ちし、船員を皆殺しにした。

同年10月にフランス海軍の極東艦隊が朝鮮に来襲した。これは、ジエネラル・シャーマン号の事件から遡り、この年の3月に国内のキリスト教信者を弾圧し、パリ外国宣教会のフランス人宣教師を9名含む8000人を処刑した事件がありその報復をしに来たのだ。

フランス軍は手始めに江華島を占拠した。その後、撤退を条件に賠償と責任者の引き渡しと通商条約の締結を要求した。しかし、朝鮮王朝は要求を拒絶したためフランス軍は更になる軍事行動を行い、艦隊船員から陸戦隊を組織し陸上戦を行ったが、旧式の装備でも物量で勝る朝鮮軍に苦戦を強いられた。また、戦場が朝鮮と遠方であるため補給と軍艦の整備の面においてフランス軍は日に日に苦しくなり遂には得るもねも無く撤退した。

それから5年後の1871年に、今度はアメリカのアジア艦隊がジエネラル・シャーマン号事件の報復のため来襲したが、フランス軍と同じ様に補給が滞る遠方のため朝鮮に一定の被害を与えただけで撤退した。

この時期が、朝鮮に置ける異国勢力の撃退、則ち攘夷が最盛期であった。

一方で、日朝関係は冷えきっていた。日本は近代化によって此までの古い体勢を捨て、西洋に基づいた国家運営と隣国との関係を築こうとしたが、朝鮮は日本の一連の行為を認める事ができなかった。いや、その当時はヨーロッパ列強等も日本の近代化を『猿まね』と嘲笑った。

ヨーロッパに置ける近代化の歴史は各国が数百年かけて争い蓄積していった制度と科学文化の結晶であつて、それを東洋の島国が、しかもこの間まで古い封建社会だった国が西洋の様な近代化を行おうなどと、到底出来ない事だと、どの国も誰もが考えていた。

話を戻す。とにかく朝鮮は近代化した日本との国交を開きたく無かつた。日本としては、朝鮮を開国させ、近代国家に必要な貿易によつて得られた資本が欲しかつた。

そこで日本は西洋流の砲艦外交を行う事にした。

日本と朝鮮間の航路研究と測量のため日本は軍艦を朝鮮に派遣した。当然、朝鮮には何の通達もしていない。そして、朝鮮の江華島で軍事衝突が起きた。

日朝両国は互いの行為に非難を言い合つた。そこで日本は朝鮮に『戦争』という外交カードを出して来た。これには朝鮮も青ざめた。そこで宗主国の清国に外交的圧力を日本にするよう要求したが、かなわなかつた。日本が先手を打つて清国の大官等と接触し、日朝間の問題に干渉しないよう手を打つた。頼みの綱を失つた朝鮮は日本の要求案全面的に飲み、開国した。それに続き列強も日本と同様の要求を行い通商条約を締結させていった。

こうして海外の製品が朝鮮にもたらされ、国内経済は大混乱した。王朝内では各勢力が政権獲得のため互いの足を引っ張り合いこの事態を解決できる状態ではなかつた。

民衆は苦しんだ。いつの時代でも政府が駄目になると、その“ツケ”を払うのは経済的弱者であつた。

こうした中で反乱が起こった。朝鮮国内で『東学』という東洋の朱子学や西洋のキリスト教の思想とは異なり、朝鮮で生まれた独自の思想である。

この東学党が民衆を先導し、全羅道を占拠し、討伐に来た国軍を撃退した。これに合わせ、全国で民衆が武装蜂起した。

朝鮮王朝内では事態打開のため清に救援を要請する事に決まった。

清国は直に軍艦5隻と5000名の派兵を決定した。この決定は1885年に日本と結んだ天津条約に基づいて日本に通達した。

天津条約 日清両国がこの条約を結んだ前年、朝鮮で甲申政変と呼ばれる日清両軍の衝突事件が起きた。そのため今後、日清両国が朝鮮を巡る紛争を防止するため締結した条約である。

そして、この条約の中に朝鮮で有事が発生した場合、日清両国のいずれかの軍のみが朝鮮に派兵し、その際、日清どちらかの派兵国が派兵の件を通達する取り決めが合った。

日本

清国の朝鮮派兵は清国が通達する以前から朝鮮と清国の公使館を通じて情報を得ていた。

この時の内閣は第2次伊藤博文内閣で、外務大臣は陸奥宗光で、陸奥は情報を獲ると直ぐに陸軍から参謀次長の川上操六を私邸に招

き協議した。協議の内容は日本の朝鮮出兵である。

「陸軍の方では派兵の準備は整つております」と、川上は言った。

陸軍はかつて来日したドイツ将校メツケルの指導の基でプロイセン式陸軍となっていた。

宣戦布告と同時に軍を動員するのでは無く、布告前から事前の情報収集に基づき軍を動員し、敵より優勢な位置から宣戦と同時に相手の出鼻を打つのであった。

川上自身も昔プロイセンへ留学しており、プロイセン式の熱心な信者であった。

そのため、彼の部下で特に優秀な者を清国や朝鮮に派遣し国情を探っていた。

「で、派兵の規模は？」

「一個旅団を考えています」

「一個旅団だと？」

当時の旅団の規模は約2000人で清国の派兵規模に較べ劣勢であった。

「閣下、一個旅団は戦時ならば各兵種を旅団の直轄となり規模は八千となります」

それを聞き、陸奥は安堵した。

「後は、伊藤さんだな」

「はい」

後日、陸奥は川上を連れて報告のため伊藤のいる首相官邸を訪ねた。

「清国が朝鮮に派兵するだ！？」

伊藤博文はこの事実を陸奥の口から初めて聞いた。

「我が国も急ぎ派兵せねば朝鮮は清国の属国となります！」
と、陸奥は力強い口調で伊藤に説いた。

「派兵だ！？陸奥、それでは清との天津条約を違反する事になるぞ！」

「閣下、この派兵は（明治）15年に朝鮮と結んだ済物浦条約に基づくもので派兵の大義名分です！」

済物浦条約とは、1882年に起きた朝鮮兵士反乱（壬午事変）によつて日本人が多数殺害され、日本は朝鮮にて、再度事変が発生した場合には邦人保護のため軍を派兵する取り決めを結んだ。

「……では派兵の規模は」

伊藤は妥協した。陸奥は合図で後ろに控えていた川上が前に出て説明を始めた。

「一個旅団を派遣します」

「一個旅団でも多くはないか？」
伊藤の問かけに川上は返した。

「では閣下はもう一度、壬午事変の時の様に同胞の命を危険にさらしてよいのですか？」

「そんな事を言っているのではない！」

「数個大隊や一個連隊では十分な保護は出来ません。一個旅団が一番妥当な規模です」

もはや、この議論の主導権は陸奥と川上が握った。

「……仕方がない、一個旅団の派兵を閣議で決議する」
この時、一個旅団の規模が二千程と伊藤は思っていた。

(これでよし)
川上は心中で微笑んだ。

「川上参謀次長、一つ訪ねるが」と、伊藤は言った。

「何でしょう？」

「派兵する旅団の団長に誰を行かせる？」

「少将の兒玉十三郎を行かせよと思っております」

「兒玉十三朗……」
伊藤は呟いた。

官邸を出た川上は兒玉十三朗に会い派兵の事情を説明した。

「よし分かった、派兵の件は承知した」
十三朗は二つ返事で承認した。

「頼みます、兒玉さあ」

「だが川上や、一つこの派兵規模に付け足しが欲しいのだが……」

「付け足し？」

「ああ、医者に支援物資を沢山よこして欲しい」

「何故だ？旅団の兵站到不備があつたか？」

「いや、旅団の兵站は十分だ。しかし、朝鮮の民衆を助ける事を考えると少なすぎるなあ」

「？」

「蜀漢の玄德は常に民衆を第一と考えていたから国を持たない時から民衆の支持が高かった。これに習って日本が内乱で苦しんでいる朝鮮の民衆を助ければ、民衆は少なからず日本を支持するはずだ」

ふうむ、と息を吐いた川上は後ろ頭を掻き回し考え込んだ後承認

した。

第十七話：戦闘（前書き）

この話から日清戦争編に入ります。

第十七話：戦闘

閣議で、朝鮮への派兵が決議されたのは6月2日の事である。

6月5日、陸軍は大本営を設置し広島第5師団が動員され、隸下の第9旅団を主体とした『混成第9旅団』が編制された。翌6日に清国は派兵を日本に通達をし、日本も7日に朝鮮との濟物浦条約に基づき派兵を天津条約に基づき清国に通達をした。

第9混成旅団の編成は以下の通りである。

第1陣

混成旅団司令部

歩兵第11連隊

騎兵第5連隊第1中隊（二小隊除く）

野戦砲兵第5連隊第3大隊本部及び第5中隊

工兵第五大隊第1中隊

第1野戦病院

輜重隊

兵站監部及び司令部

第1輸送部隊

第2陣

歩兵第21連隊

騎兵第5連隊第1中隊の二小隊

野戦砲兵第5連隊第6中隊

衛生隊

第2野戦病院

輜重隊残り

兵站司令部残り

第2輸送部隊

第1陣が宇品港より2隻の巡洋艦の護衛に伴い出兵し、6月12日に仁川に到着して首都の漢城へと向かった。日本派兵の目的は当初邦人保護であったが、仁川に上陸する前日の11日に朝鮮王朝は東学党と和議を結んだ事で事態は収拾の方向へと向かったため、日清両軍の朝鮮駐留の意義が無くなった。

しかし、兒玉十三郎は『朝鮮の人道支援』を名目に医療支援と復興支援を混成第9旅団隷下の部隊で行わせた。その際、十三郎は作業の効率化のため地元有力者と接見して融和を図った。そして日に

日に支援の要求が増えていき、朝鮮駐留の大義名分を得ていた。

その頃、外交官の大鳥圭介は海軍陸戦隊430名を引き連れ朝鮮王朝の首都漢城へ入り軍事力を背景に圧力をかけ日本軍駐留の承認と清国軍の撤退を要求していた。

一方で日本の伊藤内閣は、清国に朝鮮の内政改革を日清両国で行う提案を持ち出したが清国は拒否し、更に朝鮮に増援を送った。日本もこれに対抗して直に混成第9旅団の第2陣を送り、いよいよ朝鮮における日清両軍の軍事緊張は高まり衝突は時間の問題となった。

日清両軍の最初の戦闘は海上で起きた。その7月24日、朝鮮半島西岸の豊島沖で日本海軍と清国海軍が遭遇した事から始まる。

この時鉢合わせしたのは日本海軍連合艦隊の第1遊撃隊であった。

編成は

旗艦「吉野」つほこしん 坪井航三少将

防護巡洋艦「吉野」4,216t 艦長 河原要一大佐

防護巡洋艦「秋津洲」3,150t 艦長 上村彦之丞大佐

防護巡洋艦「浪速」3,709t 艦長 東郷平八郎大佐

対する清国海軍は

防護巡洋艦「濟遠」 2,440t

水雷巡洋艦「広乙」 1,000t

この時点で戦力の差は歴然であり、日本海軍が優勢であった。ただ両国は宣戦布告がなされていなかったため、両海軍は何事もなく互いの距離が3000mまで近づいていた。日本側は国際法に則り礼砲の準備を始めていたら先に清国側から砲音が響いてきた。最初は誰もが清国海軍の礼砲と思った事だろう。しかし、次第に砲弾が落下する時に響く不気味な音が鳴り響いてきたと思うと、突然近くの水面から巨大な水柱が出現した。衝撃が第1遊撃隊を襲った。清国海軍が実弾を撃ってきたのであった。

日本海軍も直ちに応戦した。砲戦の中で吉野の放った砲弾が濟遠の艦橋に命中し指揮系統が混乱した。更に後部砲塔に命中して多数の死傷者が出た事で濟遠は降伏旗を掲げた。

広乙は秋津洲と浪速に追い込まれ海岸に乗り上げ座礁した。

降伏旗を掲げた濟遠であったが逃走を行った。第1遊撃隊の吉野は追撃した。吉野の速度は23ktと、世界最速を誇っていたが濟遠はジクザク走行をして吉野を翻弄させ、生きている砲で応戦をした。

ここで吉野は弱点を突かれた。吉野の主砲は15?単装砲4門ととても非力で濟遠を沈める程の巨砲は無かったため、1隻だけの深追いは危険と判断した坪井は追撃を中止した。

同日、日本の外交圧力に屈した朝鮮王朝は大島公使に牙山に駐留する清国軍の掃討を依頼した。これを受け、混成第9旅団は軍事行動に動いた。

第十七話：戦闘（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

御意見や御感想がありましたら、ぜひともお送りください。

第十八話：快進撃

明治27年（1894）7月28日、混成第9旅団は朝鮮忠清道成歡で清国軍を攻撃した。

清国兵の敗走ぶりは惨めなものであった。重い大砲や物資を放棄し、無傷の者や軽傷者は這う這うの体で我先と平壤まで逃げて行った。

同日、兒玉十三朗は戦後処理を参謀等に任せ数名の将兵を連れて戦場跡を見に行った。地面を覆う遺体の全てが清国兵の亡骸でしか無かった。

遺体からは異臭が放たれ、将兵等は鼻を押さえたが、十三朗だけは清国兵の遺体を見つめていた。空を見上げれば無数の鴉が旋回しながら飛び回り、彼等が去るのを待っている。生きた人間がいなくなれば、鴉達は地上に降りて清国兵の遺体をついばみ食べるのだ。

季節は7月の末、遺体の腐敗も早い。

「皆、覚えておけよ。戦で死んでいくのは若い兵卒達だ。将校は死地に行かせる兵卒等のためにもしつかりした策を練らんといかん」
そう、言つて十三朗は馬を歩かせた。

（成歡の清軍などまだ序の口……平壤にいる一万の清国軍だな）
既に十三朗は平壤に清軍の主力がある事を知っていた。

8月1日、日清両国が宣戦布告をした。

陸軍は順次、後続の部隊を朝鮮に派遣した。その中には第5師団長の野津道貫中將がおり、14日に漢城に入り兒玉十三朗に会い報告を受けた。

「騎兵による複数回に及ぶ北方偵察の結果をまとめたところ、平壤に約一万二千の兵が居ります」

と、十三朗は野津に言って報告書を手渡した。

「ご苦勞だったな兒玉さん」

「いえ、働いたのは部下達です」

「そうだったな、では後で彼等に酒でも携えて行くでしょうか」

「ありがとうございます中将」

「ところで、平壤の敵だが……どう考えている兒玉」
そう言って野津は机の上に朝鮮半島の地図を広げた。

「敵は1万余と言っても装備は我々よりも劣り、第5師団のみで十分に戦えます」

成歡の戦いの時、清国兵の装備はバラバラで旧式の火縄銃を使用する部隊もあったが、まだ良い。長槍と盾のみの部隊が多々あり、それが最前線で戦っていたのだった。

「成歡の戦いで士気が著しく落ちていきます。この機を逃さず攻めるのが上策でしょう」

「そうか、私も同じことを考えていた。それにいつまでも師団が漢城に居座つては朝鮮王朝も動揺を隠せなくなる」
この時、漢城には第5師団司令部と歩兵第10旅団が駐留している。

ここに、平壤攻略が決まった。

平壤攻略は9月15日に行われた。

この時の日本軍の参加兵力は

第5師団 師団長野津道貫中将

混成第9旅団 旅団長兒玉十三朗少将

歩兵第10旅団 旅団長立見尚文少将

歩兵第18連隊 連隊長佐藤正大佐

歩兵第18連隊は、第3師団の隷下であり、第3師団そのものも本来ならこの作戦に参加出来たはずであったが諸事情により先発隊の18連隊のみしか作戦に参加できなかった。

戦いは日本軍の大勝に終わる。兒玉十三朗の旅団が清国軍に王手を入れたのだが、それにはこの戦いに参加した新兵科の活躍があつ

た。

気球部隊である。

西南戦争後の明治11年、十三郎が山県有朋に提出した改革論（第八話：陸軍大改革論を参照）により編成された部隊で、高い高度からの偵察により、騎馬よりも広範囲での敵の行動を把握できた。さらに言えば筒抜けであった。

第5師団隷下の気球第5連隊は、前日の14日から偵察を開始し、これにより日本軍は清国軍の清国軍よりも多くの情報入手でき、終始清国軍の裏を突く形で戦いを進めたのだった。

兒玉十五郎は、海軍少尉砲術士官として砲艦『赤城』に乗艦していた。

赤城は、明治23年（1900）に小野浜造船所で竣工した摩耶型砲艦の4番艦である。

常備排水量622t、12cm単装砲2基を主砲とする砲10門と、戦艦や巡洋艦の相手には遠く及ばないが日本海軍の貴重な戦力を担っている。

現在、赤城は朝鮮半島と中国大陆の間に位置する黄海を哨戒している。

そして十五郎は、艦内の食堂で食事をとっていた。すると、前の席に食膳を置き、士官が一人座った。

「やあ、佐藤さん」

十五朗は、佐藤という士官に親しげに声をかけた。

「兒玉、君の兄^あぢやはただ者じゃないな」

佐藤は、そう言つて味噌汁をすすつた。

本名を佐藤鉄太郎と言い、階級は少尉。十五朗の一期上の先輩で赤城の航海長を務めている。

「そうですか？」

「わしは陸軍には疎いが、お前の兄ぢやが気球部隊の創設を山県閣下に要望した話は聞いている。今回の平壤攻略で大活躍したじゃないか」

鉄太郎は副菜を口に入れ、白米を食べる。

「まあ、それでだ兒玉、わしの勤^あぢやあ、明日か明後日には北洋艦隊が動く^あとみるな」

「えつ？」

「平壤の戦いに敗れた清軍は朝鮮から退却か、更に精銳の増援を送るかだ。だから、兵隊を短期間で運ぶのに便利な海上輸送をする^あとみれば、北洋艦隊が動く^あ筈さ」

鉄太郎は再び箸を取り食事に専念した。

9月16日、北洋艦隊は朝鮮に向かう陸軍部隊の海上輸送の護衛

のため出動した。翌17日、丁度周辺海域の哨戒をしていた日本海軍の主力艦艇から成る連合艦隊の本隊と偶然遭遇した。

連合艦隊は、旗艦の巡洋艦「松島」を筆頭に排水量4,217tを有する「橋立」、「厳島」の3隻を主力とし、定遠・鎮遠と言う『熊』を倒すために建造された世界最速の23ノットを誇る防護巡洋艦「吉野」と第1遊撃隊として日清開戦の発端となった豊島沖海戦に参加した「秋津洲」と「浪速」、防護巡洋艦「高千穂」と「千代田」、そして艦齢が20年強の旧型軍艦の「扶桑」と「比叡」、かつて西南戦争で兒玉十三朗と共に熊本城籠城で奮戦し、後に海軍に転移して海軍軍令部長となった樺山資紀が乗る仮装巡洋艦「西京丸」、その護衛を行う砲艦「赤城」であった。

一方で北洋艦隊は、戦艦「定遠」、「鎮遠」は元より、巡洋艦を8隻従えていた。

当時の海戦は、軍艦に積まれた大口径の砲の搭載数で雌雄が決し、そのため艦を守るために纏う装甲は分厚くならなくてはいけない。そのため、軍艦は必然的に巨艦となり、「戦艦」と言う分類の軍艦が誕生し、列強は競って戦艦の建造に着手した。

清国海軍の「定遠」、「鎮遠」は『堅艦巨砲主義』の先駆けであった。

明治20年代の日本は、『帝国』と名乗っていないながら、未だ発展途上国に過ぎず、「秋津洲」程の軍艦を数隻造るので手一杯であった。

とにかくも、戦艦2隻が今海戦に出てくる以上、日本海軍には分がない様に見える。

しかし、将兵の質や士気には日本海軍と雲泥の差があった。

例えば、銃を持つ人が経験と知識が豊富にある名手であれば、飛ぶ鳥を落とす事が出来るであろう。だが、銃を持つのが子供であり、銃を持つのも初めてであれば、飛ぶ鳥は落とせず、発砲の振動で尻餅をつくだろう。

日本海軍は創設の時より、とにかく出来る事からした。高い軍艦が買えなければ、人員の質向上に徹した。将校は海戦術を、兵士には艦の操作を各々に徹しさせた。

日清開戦前に、日本海軍の艦隊運動を見たイギリス海軍のある大佐は、ヨーロッパの水準に達している。と評価したのだが、一大佐の言葉を誰もが鵜呑みにした。

しかし、今、黄海で行われようとしている海戦で、大佐の言った事が事実であったと実証されようとしていた。

北洋艦隊は、横列陣をもって前方の連合艦隊に進んだ。敵弾の命中を受けにくい利点があるが、攻撃の際には、前部主砲のみしか射てない欠点がある。

連合艦隊は、単縦陣をもって北洋艦隊に艦の横つ腹を見せる形で吉野を先頭にかつての第1遊撃隊の面子であった艦隊が連合艦隊からみて最左翼の巡洋艦「揚威」に向かつて進んだ。艦の側面であるため、敵弾の命中率は高いが、前後主砲と側面に備え付けられた副砲を射つ事が出来る。そう言う意味で現時点で発射できる大砲の総数では、連合艦隊が優勢であった。

そして、吉野と揚威の距離が3000mに達した時、吉野は敵に向けてある砲を一齐に射ち始めた。吉野に続く高千穂と秋津洲も発砲した。砲弾は揚威と隣の超勇に降り注いだ。致命傷にはならなかった。豊島沖海戦の時にも述べたが、吉野は速度はあるが小口径の砲しか積んでいない。それは、高千穂や秋津洲にも言えた。

揚威と超勇に致命傷を与えられなかった。つまり、初戦で沈める事はできなかったが、艦上は悲惨であった。至る所に大小の穴が開き、逃げる事ができない多くの将兵が負傷した。その悲痛の声と姿を聞いて見れば、生涯忘れはしないだろう。

連合艦隊全艦も発砲した。

北洋艦隊も負けじと応戦する。

激しい砲撃戦が繰り広がるにつれて、両艦隊の指揮系統や艦隊運動は乱れていく。

西京丸と赤城は戦闘区域から離脱するよう指示があり、それに従った。しかし、離脱したつもりが激戦の真っ只中に入ってしまった。しかも、定遠と鎮遠に睨まれたのだから堪らない。

主砲こそは撃つて来なかったが副砲をバンバン射ってきた。

西京丸には軍令部の所要人等が乗艦していた。赤城は定遠、鎮遠の注意を引き付けるため、砲をめっぴら撃った。

それによって、西京丸は一応の危機は脱したが、今度は赤城が集中砲火を浴びる事となる。

十五朗はとにかく叫んだ。砲音に負けなくらいの声を腹の底から出した。そうでなければ部下に声が届かない。

「……！」

部下が十五朗に何か告げたが聞こえない。

「まっと（もっと）、でっかな声で言えや！」

と、十五朗が怒鳴る。

「向こうの方で隊が沈んでいます！」

「何い!?!」

十五朗は示された方角を向くと、交戦する敵艦の奥の方で確かに艦が沈んでいく。敵か味方が確認するため、首にぶら下げている望遠鏡で確認した。

「ありやあ、清軍の艦だわね！」

声を聞いた兵達は喜び湧いた。

（これだったら、何隻かの艦が助けにくる都合がつくかもしれ…）
十五朗がそう考えている時だった。

赤城に数発の砲弾が続け様に直撃して爆発した。これにより、十五朗を含む将兵数十名が薙ぎ倒された。

赤城艦橋にも砲弾が当たり、艦長の坂本八郎太が戦死した。代わりに自身も負傷しながらも、佐藤鉄太郎が指揮をとった。

その後、コルベット艦の比叡が助太刀に入り、赤城は絶体絶命の

危機から脱した。

黄海での海戦は日本海軍の勝利に終わる。

北洋艦隊は「経遠」、「致遠」、「揚威」、「超勇」、「広甲」の5隻を損失し、他の艦も大きな被害を被った。

連合艦隊には沈没艦は無かったが、旗艦「松島」、「比叡」、「西京丸」、「赤城」が大破した。日本側の戦死者299名で、内赤城からは90名の戦死者を出し、船員の殆んどが負傷した。兒玉十五朗もこの海戦で左手の小指と中指を失い、左目を失明する重傷を負った。

第十九話：旅順

日清戦争を通じて、欧米列強の日本への見方が180度変換した。

列強国は、開戦当初から清国が勝つ事を予想していた。陸軍兵力の規模と海軍艦艇の質のみで比較ば清国が上回っている。

しかし、実際に蓋を開けて見ると、朝鮮での地上戦は清国軍が日本軍に連敗を重ね、遂には朝鮮半島から駆逐された。

海上では、世界有数の艦隊と言われた『北洋艦隊』が、黄海の海戦で、巡洋艦から成る日本海軍の連合艦隊に叩きのめされてしまう。

そして10月の下旬、朝鮮半島の日本軍は、清国と朝鮮の国境を流れる鴨緑江を渡り清国領土に侵入した。古来、日本と中国は、白村江の戦い・元寇の役・朝鮮出兵と、3度の戦争を行い、戦場は朝鮮と九州などであったが、今回の4度目の戦争、日清戦争で日本の軍勢が初めて中国の地に足を踏み入れた瞬間、アジアの勢力図が変わった。

また、清国も『眠れる獅子』から『豚』へと転落し、列強の仲介により日本との講和を思索し始めだした。

日本としても清国との講和を望んでいた。そもそも、戦争の目的は朝鮮の主導権を賭けた物で、北洋艦隊を叩き、清国軍陸軍を朝鮮から追い出した以上、戦争目的は達成していたのだ。

しかし、日本は列強からの仲介を拒絶し、戦闘活動の継続を行った。

兒玉十三郎は事の真相を確認するために山県有朋のいる軍司令部にやってきた。

この時山県は、陸軍第5師団と第3師団から成る『第1軍』の軍司令官として出征していた。

「遼東半島を取るう!?!」

十三郎は眉間に皺を寄せた。

山県は逆鱗に触れてしまったのかと心中で思った。

「だが兒玉、敵国の領土を取る事は国際法の習わしだぞ」と、山県の援護をしたのは第3師団長の桂太郎である。

しかし、桂の発した言葉が更に火に油を注いだ。

「政府も軍も目先の領土しか無いのですか!」

十三郎は一喝した。途端、その場にいた将兵の誰もが固まった。

「遼東半島がそのまま日本の領土になると考えているのですか?」

「それはどういう意味だ?」 山県は尋ねる。

「遼東半島の旅順は天然の良港です。成程、確に奪い取る価値のある領土です。ですが、果たして日本だけが狙っていると考えてるんですか?」

「あつ!」

桂は何かを直感して思わず口を開いた。

ロシア、山県が言うと十三朗は首を縦に振った。

「日本が遼東半島を国際法に則り領土とすれば、恐らくロシアは同盟国と連携して『アジア平和』を名目に干渉をしてくる魂胆でしょうな。そうなれば、日本の国民は対露感情が高まり、世界最強のロシア軍と戦を挑む事態となる筈です」

十三朗の迫力ある断言に、その場にいた誰もが息を飲んだ。しかも、彼の予測は後に、その全てが尽く的中していく。

この時、10月下旬の事。陸軍は大山巖大将を司令官とした陸軍第2軍は着々と旅順に部隊を陸揚げさせていた。

第2軍編成

第1師団

第2師団

第6師団

秋山好古はこと時、陸軍少佐で第2軍所属の第1師団、騎第1大隊の大隊長として旅順にいた。

彼等、騎兵第1大隊の任務は偵察であった。

10月28日、盛京省（遼寧省）花園口で陸揚げを完了した騎兵

大隊は11月3日に行動を開始した。

最初の難所、金州方面攻略のための偵察任務である。

金州は旅順方面と内陸を結ぶ要所であり、ここを落とす事で旅順との連絡網の分断を図っていた。

この時の騎兵大隊の編成は大隊本部と2個騎兵中隊から成っていた。

第1師団はこの内1個中隊を隷下部隊の連絡手段のため残し、代わりに歩兵第2連隊の第3中隊を騎兵第1大隊の指揮下に加えた。

秋山騎兵第1大隊は清国軍との少規模戦闘をしながらも順調に偵察を行い、第1師団の金州方面攻略に貢献した。

この金州攻略の際し、乃木希典少将の指揮する歩兵第1旅団が上級部隊の第1師団の命令が出されない内に、独断で攻撃を開始し、見事に金州攻略に成功させた。

金州方面を占領し、大連にも進入した陸軍は、続いて海軍と協力して、遼東半島の先端部に位置する旅順攻略に乗り出す。

旅順には、清国軍の基地があり、西洋技術を盛り込んだ近代要塞となっている。

『旅順を落とすには大軍をもってしても半年はかかるだろう』とフランス東洋艦隊提督クールベーが評価した。

当然、日本軍にも噂が入って来る。しかし、旅順攻略は困難では

無いと、最初に結論付けたのは秋山好古であった。

この時、秋山の騎兵第1大隊に、第6師団の騎兵第6大隊の一部が指揮下に加えられたため、『秋山支隊』と名付けられていた。

彼の支隊は連日旅順の偵察に出て、地理を調べ、敵の配置を探り出して、偵察報告と結果を踏まえた旅順攻略手順をまとめた『上申書』を第2軍司令官の大山巖に送った。

大山巖は、西郷隆盛の従兄弟で、共に明治維新に活躍した。人物である。彼には指揮官としての素質があった。それは、群を抜く奇抜なアイデアを出していく戦争の力リスマでは無いが、『統率力をもつて人材を適材適所に配置して、余計な口出しをせず彼等の好きなように行動させる』このため有能な参謀の作戦をそのまま、本作戦へ移す事が出来る。

と言う訳で、秋山の提出した『上申書』の中の旅順攻略手順はそのまま、旅順攻略作戦に移されたのだった。

旅順には天然の港湾があり、そこに市街地が置かれ、港湾都市の後方に黄金山、饅頭山の砲台があり、この二つの山の周辺に東から鶏冠山、二龍山、松樹山、椅子山の各堡壘に守られている。

この旅順要塞に対し、第1師団が最初に椅子山を行い次いで松樹山の攻撃を行う。

第1師団が松樹山の攻撃開始と同時に、第2師団隷下の第12旅団が二龍山の攻撃を開始する。

秋山支隊は遊撃隊となって第1師団の西側に配置された。

旅順攻略作戦は11月21日と定められた。当然だが、秋山支隊は旅順攻略開始されるまで偵察活動を行い続けた。

そして、11月17日の日も、支隊の先頭に立ち進んだ。一団が山間堡と呼ばれる平野に達した時であった。行路偵察を行っていた斥候騎兵が慌てた調子で戻って来る。

「敵、およそ一個旅団が此方に向かってまいります！」
と斥候騎兵の一人が言った。

「案内せい」

好古はそう言って、副官の稲垣三郎中尉と従兵を率連れ手綱を弾いた。

斥候に案内されて丘に上がった好古は首に架けていた双眼鏡を取り示された方角を覗いた。

目に入って来たのは人の大群である。誰もが小銃を持ち、隊列を組んで進んでいた。少し場所をずらして見ると、馬に引っ張られる大砲も見えた。その数十門程。

対する秋山支隊は騎兵2個中隊と歩兵1個中隊の計3個中隊しかない。

「大隊長殿、ここは一先ず後退するべきでは？」
副官の稲垣が言った。

確かに正論だ。始めから勝負にならない戦力差である。しかも、ここは平野で小さな丘位しかなく、待ち伏せ攻撃は出来ても、伏撃

は出来ない。正面きつて戦えば皆殺しにされかねない。しかし好古は、稲垣の意見と真逆の事を言う。

「いや、ここで迎え撃つ」と、さりげなく言った。

好古の言葉に、その場にいる斥候に従兵、稲垣は自分の耳を疑ぐり、えっ？と誰かがつい声を溢してしまった。

「し、しかし大隊長殿……！」

稲垣は意見を言おうとしたが好古が止める。

「おまい（お前）も騎兵なら分かるじゃろがあ、ここで逃げれば上からの騎兵の評判が下がる。それにい、僅かの兵だけでも戦う日本軍の姿を清国兵に見せ付けてやるのじゃ」

そう言つて、首に下げた水筒を取りだしグイッとラッパ飲みをした。中には支那酒が入っている。

つまり、今後の日本騎兵の将来と戦争での日本軍優勢を支えるため自分達が生け贄になる。そう解釈が取れる。だが、今の状況を考えると、この事しか頭に浮かばない。

「ですが、我々400の大隊（秋山支隊）では、あの一個旅団には勝てません！」

稲垣はとにかく反論した。この場にいる人間の中で彼だけが好古を止められる唯一の存在だった。

「何も『勝つ』必要は無い。ようは『負け』なければよい。引き上げるぞ！」

手綱を引き、好古は馬を走らせた。次いで斥候や従兵が後を追う。

(大隊長は部隊を全滅させる気か?)
心中で思いながら、最後に稲垣が馬を走らせた。

好古は直に騎兵第1中隊に馬から降り歩兵戦を行うよう命じ、敵旅団の前進してくる本道の東側に展開させた。続いて騎兵第2中隊は乗馬のまま本道の西側に展開させた。そして歩兵中隊は本道正面に配置させる。

一方の清国軍も秋山支隊の存在に気付かない訳が無かった。直に部隊を所定の位置に展開させ歩兵を前進させつつ攻撃を開始した。

清国軍の弾丸が雨の様に容赦無く秋山支隊に注がれて行く。

しかし、日本軍一個大隊400に対し、清国軍一個旅団はその戦力全てを日本軍の大隊に注いでいる訳出はなく、戦っているのは、先頭を進んでいた尖兵隊と援護砲兵であった。

秋山支隊の兵隊は、その事実を知っても知らなくても、『敵の物量』に圧倒され、最初から士気は低かった。その上、頭上からは砲弾が降って来る。

だが、秋山支隊は良く戦っている。敵の兵士の顔を確認出来る距離まで接近してきた頃だった。

突然、日本軍から従来の小銃の発砲音と似て異なる『タタタツ』と安定した連発の発射音が鳴り響いた。途端、最前線にいた数十名の清国兵が一辺に薙ぎ倒された。これには清国軍兵士は度肝を抜い

た。

機関銃である。日本軍は保有していたガトリング砲に変わる新兵器として機関銃を導入していた。これを出征部隊の各中隊ごとに4挺ずつ支給されている。

しかし、機関銃で払った代償は大きく出た。清国軍は大砲をどつと撃ち込んで来た。戦況はますます不利となってきた時だった。後方で指揮を執っていた好古が最前線に現れた。彼は支那酒をグツとラツパ飲みをしながら兵士に告げた。

「あしは旅順に行けと言われているが後退の命令は受けてい無い。退く者は去ればええ」

そう言つて馬を走らせようとした時だった。

清国軍に爆発が起きた。大砲を撃つたのでは無く、砲弾が降つて来たのだった。突然の砲撃だったため混乱が生じ始め、退却を始めた。

秋山支隊を救つたのは後方にいた歩兵第3連隊と付属の砲兵部隊だった。第1師団隷下の気球連隊が戦闘中の秋山支隊を発見し、直に応援に向かわせたのだった。

とにかくも、秋山支隊は窮地を脱せた。戦闘を振り返ってみれば終始秋山支隊は分が悪く不利であったが戦死者は11名と軽微であった。

21日、日本軍は旅順総攻撃を開始する。

『半年はかかる……』と言われた旅順はわずか1日で占領した。これはクールベールが旅順要塞を過大評価した訳ではない。好古の作戦が神算鬼謀だった訳でも無い。日本兵が有能だった訳ではない。清国兵が弱すぎたのであった。

清国兵のほとんどが漢民族の人間であり、女真族（満州族）によって支配された清国に絶対的な忠誠をしている訳ではなく、19世紀から清国の幾度となく列強と戦争して出来た負け癖が日清戦争で如何無く発揮されたのだった。

この時、日本の将校、もしくは清国軍の将校も清国の滅亡は近いと感じただろう。

第二十話：満州優攻立案

「満州を取る？」

第1軍司令官山県有朋は目を見開き聞き返した。同じくこの場にいた桂も息を呑んだ。

「そうです」

兒玉十三郎は頷いた。

「しかし、何故満州を取ろうとする？」

「日本が遼東半島を取ろうとするからです」

「分からん。それと満州にどう関わりがある？」

先日まで、遼東半島の割譲を望む日本の姿勢を非難していた兒玉があべこべに満州の割譲という、壮大な話しを持ち出して来たのだ。

「満州を取るの、いわば『毒を食わば皿まで』と言っちゃつです」
「よ」

と、兒玉は言った。

日本が遼東半島を割譲することでロシア帝国の南下に支障が生じる。ここでロシアは友好国と共に日本に干渉をしてくる事になる。そうなれば日本国民は、将来のロシアとの対決に備え心血を注ぎ重税の中で暮らして行かなくてはならなくなる。

そこで兒玉が思案したのはこうである。満州地方を占領し、後のロシア干渉の際に清国に多額の金額で返還させついで鉱山、主要工

業の利権を獲得するというものだった。

「……」

山県は首を縦に振りながら話よ呑みこもつとしていた。

「しかし兒玉……」

桂が話に入る。

「満州を占領すると簡単に言うが、どうやってあんな広大な土地をとる？」

当然の疑問である。満州の面積は日本の倍ある。この広大な領土をどうやって占領をするのが桂には見えなかった。

「まず、満州に『日本軍総勢200万』と言う流言を流します。その後、先発の騎兵に『抵抗しなければ日本軍は危害を加えない』と書いた高札を各諸都市に掲げればいい」

「他には？」

「それだけで十分」

「そんな嘘八百だけか？」

「今の清国はまさに『烏合の衆』に過ぎず、民衆も兵士も我が身の安全を求めている筈だ。そういった群衆は騙され易いもの。武器を用いず謀略を持って『戦わずして勝つ』事も兵家の常だよ」

桂の質問が終わると、続いて山県が問掛けた。

「で、何時行動を開始する？」

「今直ぐにでも」

「勝算はあるのか？」

「あります」

兒玉は力強く応えた。そして更に言葉を加える。

「そこで山県さんには、東京に戻って閣僚の説得して講和時期を延ばして欲しいのです」

「では、第1軍司令の後任は誰にする？」
と、桂は言った。

「野津中将が適任良い」

山県は眉間に皺を寄せて悩んだ。戦地での環境に少なからず負担が溜り、体調が良くなかった。そのため、判断に支障が出ていた。

「兒玉、お主の言う事は良く分かった。しかし、伊藤さんに大山さん、陛下は戦争の拡大を反対している。わしの力に及ばんかもしれんぞ」

「分かっています。そうなれば、軍の指揮下から脱してまで目的を達成する覚悟です。勿論、私一人が責任を取り腹を切るつもりです」

「…」

山県は暫く沈黙を続けた。

「…よう分かった。わしはもう何も言わん。お前がお国のためと
思つのなら存分にせえ」

そう言つて山県は椅子から立ち、兒玉の肩に手を置く。

「全てが終わつたら、帰京して陛下に事の次第を説明させる機会
をやる。腹を切るのはその後でもいいじやろ。お前が腹を切るなら、
わしも腹を切る。桂、お主も異論は無いな」

「ええ、全て兒玉に任せましよう」

日清戦争は新しい局面を迎えようとした。

第二十一話：海軍の凱旋

月日は明治28年（1895）3月の末、日本軍は黄海に突き出る二つの半島の一つである山東半島港湾都市の威海衛を攻め、これを占領する。

威海衛には、先の黄海海戦で甚大な被害を被った北洋艦隊が居座っており、これに完全な止めを刺す事となった。

こうして、戦争の主導権は日本の揺るぎないものとなった。しかし、まだ戦争が終わる気配がしない。

第1軍が満州の占領地を順調に広げて奥地まで軍を進めていた頃、兒玉十五郎は佐世保にいた。昨年の黄海海戦で、彼は左手の指二本と左目を失う重傷を負い、治療のため内地に帰国していた。

佐世保鎮守府

海軍はこれ以上の大規模海戦は生じないと判断し、連合艦隊が佐世保に凱旋させた。

艦隊の中に、巡洋艦「筑紫」の姿があった。

筑紫は、イギリスのアームストロング社が、1880年進水させた排水量1350tの小型の巡洋艦である。武装は、25口径25・4cm単装砲2基を主砲とする砲7門と魚雷発射管を2門装備する。

日清戦争の際、連合艦隊の主力戦隊に組み込んでもらえず、偵察

や哨戒活動に使わされていた。

この筑紫に、秋山真之が乗艦していた。真之も、十五朗が黄海海戦で負傷した事を耳にしていたが、会う機会に恵まれずにいた。

港では、大勢の民衆が戻ってくる各軍艦に万歳、万歳と声を高々と出し、手を振って出迎えているのが見えた。

真之は十五朗に会い、彼の姿を見て驚いた。

左目には眼帯を付けており、顔の両頬には魚の骨の様な傷跡が残り、左手の指二本が欠けている。

「たまげたか？」

と、十五朗は真之の心中を察して笑いながら言った。

「ああ、酷い姿になったのお」

「まあ、黄海海戦でいっちゃん被害を受けたんは『赤城』だったすけなあ」

「…」

「俺の部下がいっぺえこと（大勢）死んじゃった」
そう話すと、十五朗は急に沈んでいく。

黄海海戦の時、北洋艦隊の執拗な砲撃を赤城は受けた。そのうちの一発が十五朗の近くに着弾して爆発し、彼を含むそこに居た兵全員を吹き飛ばした。

十五朗は壁に強く打ち付けられた際、暫く気を失った。そして意識が回復して体を起こし、頭が惘惘とする中で十五朗の視界に入ったのは、煙りを上げながら無造作に開いた大穴の先で燃え上がる北洋艦隊。そして、血で真っ赤に染まった艦の床や壁である。

（赤城が血を噴いた？）

と、目覚めたばかりで思考が鈍っていた十五朗は最初にそう思った。しかし、そうではない。

辺りを見渡すと血まみれになって血を流し倒れている部下や肉片であつた。

直後、自身に激しい激痛が全体に走り渡った。この時初めて自身も片目と指二本を失い、体中の傷口から血を流して全身が血まみれになっていた。自身や部下の血で一帯を赤く染めていたのだった。

「…と、まああん時は本当に敵の艦砲に撃たれた赤城が血を流したと思つた。とにもかくにも馬鹿酷い戦だったわい」

十五朗は黄海海戦の時の惨状を語った。

今、二人は軍港をあてもなく歩いている。

「全くだな、北洋艦隊の主力隊が赤城一隻に集中砲火をするとは清国海軍も落ちたもんだな」

「うん、統率の執れない軍隊ほど始末の悪いモンはねえな」

二人は歩いているうちに、巡洋艦「筑紫」が停泊している所まで来ていた。筑紫も赤城ほどではなかったが損傷が目立っている。

「すつかし、筑紫もだいぶやられたなあ」と、十五朗は筑紫を眺めた。

「威海衛攻撃の時に撃たれた跡じゃ」

「ほう、威海衛攻略に出たのか」

「下士官、兵が3人死んだ」

「…そうか」

艦の上での死は、陸の上での死とは違う怖さがある。狭い艦内で血を一杯に飛び散らせ、五体を残さず引き千切る確率が高い。

「兒玉は、海軍を続けるか？」と、真之が言った。

「何だば、いきなり？」

「あしは、威海衛の攻撃で筑紫が撃たれた時、血まみれになった甲板を見た」

真之は血で満ちた甲板を見て衝撃を受けた。

「あしは、戦争が恐ろしくなった。頭を剃って坊頭になろうと考

えている」

この真之の言葉に十五朗は表情を苦くした。

「秋山、んなの気持ちは分かるがな……」

十五朗は次に出す言葉を考えながら口を濁らせた。

「んなはどうして海軍に入ったたんば？」

「あしか」

と、真之は過去を思い起こした。15の時、『太政大臣になる！』
と言う夢を抱き、故郷の伊予松山を出て上京し、努力の末に大学予
備門に入学をした。

しかし、学生生活を送っていくにつれ、将来の進路が変化をして
いった。大学を出て偉くなっても達成感を得られるだろうか。あし
の才能をもっと別の分野で活かせないだろうか？

真之は考え抜いた末、一つの結論に辿り着いた。

軍人になろう。

秋山家は、元々武士の家であり、また、子どもの頃は地元でも喧
嘩を繰り返すガキ大将でもあり、『争い事』を好む所があった。

恐らく、真之の軍人への道に進む背後には、秋山家の系図と自身
の育った環境があったのだろう。

「秋山、おらあ海軍を続けていくぞ」と、十五朗は言った。

確かに軍人である以上、戦いで死や負傷、不幸は覚悟せねばいけない。しかし、誰かが戦い、自分だけが安全な場所から眺めている事の方が、目を失い、指を失う以上に辛いものはない。十五朗はそう考えていた。

「まつ、ゆっくり考えろや秋山。まだ時間はあるすけな」
そう言って十五朗は、真之の背中を軽く叩いた。

真之は、ああ。と頷き、ポケットから煎り豆を取り出して食べた。

第二十二話：憂鬱

明治28年8月1日

日清戦争は日本軍が中国の満州全域を占領した事で終結した。

山口県の下関で結ばれた日清間の講和条約は、

- 一、清国は朝鮮の独立を認める。
- 二、東北部 満州 全域、台湾、澎湖列島の割譲する。
- 三、賠償金10億テールの支払い。

この三つが条約の主な柱となったが、これは清国の存在を揺るがす悪夢の様な内容であった。

そもそも清国は漢民族の起こした王朝ではなく、中国の征服地である東北地方の女真族じゆんが起こした征服王朝である。

その女真族の聖地である満州が日本の領土になる上、千年以上の冊封関係にあった中国の属国の日本に多額の賠償金を支払う事は中華思想に反することであった。

しかし、清国政府には日本との戦争を継続する力はなかった。政府内部での腐心が進み、開戦以来陸海で連戦連敗を重ね近代艦隊と名を誇った北洋艦隊も日本海軍に海軍史に名を残す敗北をし、満州を取られて国民からの支持も一気に急落した。

日清戦争によって東アジアの勢力図は大きく変化する事になる。

清国アジアの大国から転落し、列国の植民地化していくことになる。清国に換わって、日本がこれからのアジアに君臨していくことになるだろうが、大きな問題があった。ロシア帝国である。

19世紀の帝国主義の時代、ロシアは国土こそは世界最大であったが殆どが冷帯気候である。そのため主な貿易港は冬季には凍結してしまう。そこで不凍港を求め勢力の拡大を行った。南下政策である。1860年の北京条約によってロシアは清国から沿海州を獲得し、不凍港都市ウラジオストクを築いた。

ウラジオストク、これは日本語に翻訳すれば『東方を支配せよ』と読む。つまり、ロシアの南下政策の最終目標はアジア世界の支配であるのだ。

明治28年8月2日

児玉十三郎は新聞で下関講和条約の内容を知った。彼は今、満州ハルビンのハルビンにいる。

(一難去って、また一難…、か)
十三郎は思った。

すると、ドアをノックされた。児玉が入室を許可すると士官が現れた。

「黒木閣下が御見えになりました」

この時、黒木為？は陸軍中将で熊本の第6師団の師団長であった。日清戦争では、第二軍に所属して威海衛の戦いに参加した。そして今、治安維持の名目で満州に派遣された。

「通してくれ」

その言葉を聞いて士官は退室し、黒木為？が入ってきた。

「中将、よく来てくれました」

と、兒玉は立ち上がり敬礼をした。この時の階級は黒木より一つ低い少将である。

「おい兒玉よせ、お前との間に階級は関係ない」

黒木が言つと、兒玉は笑いだした。

「まあなんにせよ、久しいなあ。黒木」

「しかしどえらいことをやらかしたなあ」

と、満州攻略の話題を持ち出した。

「うむ、政府や大本営は大局がみえとらんからいかんよ」

「で、これからどうするんだ。この満州で」

「どうもじゃせん。後二、三日で満州は清国に返還することになる」

「何い？」

勢力の拡大を進める北のロシアが清国を狙っている。日本が満州を獲得したとはいえ、軍事力は貧弱なため、外交的な圧力を加えれば満州を手放し、清国に返還する。その後ロシアは清国に圧力をかけ満州を支配下に置き、遼東半島の旅順を租借し、極東の一大海軍拠点を建造して日本の防衛線と定める朝鮮に圧力をかけてくる。兎

玉は黒木に、推測した今後の推移を説明した。

「ロシアの干渉で満州を手放すと分かっておきながら、何故満州を取った」

「清国に返還するとはいえ、無条件という訳にはいかん。清国からだつたり（たくさん）と銭を絞り取りロシアとの戦争に備えるためだ」

「清国は散々な目に遇うなあ」

黒木は清国に同情した。

「ははっ。黒木、今は食うか食われるかの戦国時代だ。他国にかまっている暇はない」

「それもそうだ。しかし兎玉、ロシアとの戦争に備えると言うが300万の兵力を持つ大国とどう戦うという？」

当時のロシア帝国は世界最大の陸上戦力を有しており『世界の警察』の異名を持っていた。

「300万の軍隊とは言うがヨーロッパやシベリアにも兵力を配置するの考えると約50万程を相手にする」

そのために陸軍の増強も必要だと述べた。

「今の常備兵力を4、50万まで増やす必要がある。後は兵器の刷新や戦略や戦術云々とやることは山ほどだわ」と、兎玉は息を吐き、肩をおとした。

「どうした兒玉？」

黒木は兒玉のため息振りに違和感を抱き尋ねた。

「うむ、友人のんなにはわしの腹の内を話そうか」

「おう、なんじゃ」

と、黒木は聞く耳を持った。

兒玉の心中は憂鬱であった。根本の原因は、政府の遼東半島の割譲計画にある。遼東半島の港湾都市旅順は、この時代の各国列強が認める天然の良港であり、中国進出する上での拠点ともなる。

その旅順を国力の貧弱な日本が取る事でロシアとの対立が決定的となる事を前にも述べた。

そもそも兒玉は、近い将来に日本はロシアとの存亡を賭けた戦争を繰り広げる事を見据え、一つの戦略を構想した。日本の軍事力からでは大陸奥地での戦闘は地利的にロシアに利が有るため、海軍と連携して九州にロシア陸軍主力を上陸させて殲滅させる。その次に朝鮮に進出して防衛線を構築する戦略を立てた。

だが、この兒玉の立てた戦略は、日本が他国領土への進出にこだわらず、ロシアの一方的な侵略に対しての対抗策であり、遼東半島を割譲した今、戦略は崩れてしまった。

つまり、後に起こるであろう、ロシアの領土干渉の今後の推移を簡単に説明すると、日本はロシアの売られた喧嘩を買い、大陸に乗り出してロシアに殴り込む。という形となる。

『大国に乗り出してロシアに殴り込む』とは勇ましい表現をした

が、その分の軍資金は多額なものとなる。そのため兒玉は、満州方面の攻略に乗り出してロシア干渉後に多額の資産と引き換えに満州の返還を行い、得た資金で陸軍の改革に乗り出す事にした。

しかし、満州攻略が数カ月と少数の犠牲で『あつ』と言う間になり得てしまったのだ。

兒玉としては良い意味で想定外の結果であった。満州侵攻計画や作戦を山県等に告げた時、内心では満州全域を占領出来る自信が無かった。彼も一人の日本人として、日本国土の二倍以上ある土地を計画通りに占領出来るのか。計画が覆される事態が起こり得るのではないかと、様々な不安要素が常に着きまっていた。

だが、満州を良好な結果で占領した事で不安要素の多くは無くなった。しかし、新たに『欲』が芽生えた瞬間でもあった。

満州が上手く奪えたのなら、華北と蒙古なども容易に制圧出来るのではないかと？

華北、蒙古も清国にとって重要な土地、支配地でもあり、多くの利益を得る事が出来るだろう。

しかし、兒玉は自重した。

「人は一度欲をかくともっと欲をたがりたくなる」と、人の欲深さから引き起こす災いを憂いた。

「欲かいて我が身や国家が減んだ例は世界中にある」

その要因から、これ以上の侵攻を取り止めたのだ。しかし、終戦となった今、自分の判断が最善であったのか疑問を抱いていた。

ロシアとの戦争は満州の平野が主戦場となるだろう。平地での戦いとなれば、集結した兵力の優劣で勝敗は決する。

日本陸軍がロシア陸軍に勝つためには、今の日本の陸軍力を倍以上に増強する必要があり、莫大な資金がいる。

もし、満州以外にも華北や蒙古などを取っていけば、得る軍資金は増え、ロシアとの戦争で兵士の犠牲を抑えられるかもしれない。逆には、戦争に勝つために流す兵隊の血の多くを金で換えられると言つことだ。

「…華北と蒙古分の金が有ればどれだけ多くの兵隊が死なずに済むか分からん。その事を考えるとどうも気が晴れん」

「成程。主も散々悩んどつたか」

と、黒木は机の上に腰を下ろして兒玉の話聞いていた。

「兒玉よ、わしは上手い事は言えんがな。戦争となれば、嫌でも兵隊は死んでいく。しかし、兵隊の犠牲を減らすための知恵を巡らせばええ」

「…それもそうだな。過ぎた事を気にかけてもしょうがないな」
兒玉は開き直った。

「そうだぞ。それに戦争となれば、おいも師団か軍を束ねて暴れ回るわ」

「ははっ、んなはわし程兵法に詳しくはないが陸軍一の猪突猛進の指揮官だから心強い」

「それはどういう意味だ」

二人は声高らかに出して笑いあった。

下関での日清講和条約が締結されてから6日後の8月8日、ロシアを筆頭にフランスとドイツの三国が極東アジアの勢力の均衡を名目にした、日本の領土となった満州地方の返還を通達してきた。

日本の軍事力、特に海軍力では三国干渉を退く能力はなく、外交においても、イギリスやイタリア、アメリカも中立に周り、日本政府は成す術無く、三国干渉を受け入れて、満州地方を清国に返還するに至った。しかし、満州を返還した事により日本の国家予算以上の返還金を得た。

だが、日本人は怒りに湧いた。我が子、兄弟、身内が犠牲となり得た土地を外国の干渉で一方的に返還させられたのだから。

『臥薪嘗胆』を合言葉に、国力と軍事力の増強に心血を注ぐ事となる。

第二十三話：作戦

日清戦争の後、下関条約で得た賠償金と満州返還で得た膨大な金額によつて日本の工業は著しい発展を進めていった。この工業の発展が日本の軍需産業にも多くの影響を及ぼした。陸軍においては新式の火砲や機関銃の開発、海軍では国産巡洋艦「秋津洲」に続く国産艦の建造と増設が行われた。

陸軍では軍備拡大が進められた。常備兵力も明治31年の時点で20万から30万へと増強されて行き、6個の師団が新設されて13個師団体制となった。さらには17個の師団が増設される予定である。

また、陸軍士官学校や陸軍大学校を出た士官らは列国の留学、駐在武官の名目で各国陸軍の情報収集に努めさせた。さらに、有能な一部参謀将校は自身の身分を隠してロシアや、その支配下や影響下にある国々に派遣され諜報活動が行われた。来る日露戦争への備である。

一方、海軍でも『六六艦隊』と言う艦隊建設が進められていた。これは攻撃力、防御力、機動力の三つの高い能力を合わせ持った戦艦と防護巡艦を六隻ずつ揃えるもので、この六六艦隊を主力として大小の各種艦艇を十年以内に百隻以上を整備すると言う大計画であった。

六六艦隊計画が完了した時には日本海軍力は世界屈指の能力を得ることとなる。

下関条約で獲得した満州地方はロシアの三国干渉によつて手放さ

ざるおえなかったが、台湾はそのまま日本の統治下となった。

当初、台湾は、下関条約によって日本の統治下に入る事に反発し『台湾民主国』を建国させて日本に対決姿勢を取ったが、5ヶ月間の日本軍との紛争で武力鎮圧された。

その後、台湾の中心都市台北に総督府を設置し、海軍大将の樺山資紀臨時総督となつて統治した。そして、初代総督に陸軍中将の兒玉十三郎が就任した。兒玉が行つた政策は思いきつたものであつた。軍事と外交以外の台湾の内政方針を全て台湾人の議事に委ねる。という大胆なものであつた。

この政策が台湾人の指示を得た。何時の時代においても、他の国や民族から支配をされれば誰もが反発をするだろう。反発が武力闘争へと発展すれば鎮圧するのに多くの時間と犠牲などを費やしてしまう。台湾を植民地とさせるのではなく、堂々たる権利を持たせた大日本帝国の一領土とさせるのが兒玉十三郎の台湾統治政策であつた。

日本に関連のある海外の情勢については、明治31年3月にロシアが清国より旅順や大連の港湾都市のある遼東半島の最端に位置する関東州を租借して旅順に大艦隊を駐留させ、湾周辺に沿岸砲を並べ、旅順港外の丘に百以上の防御陣地を構築を始めた。その規模は清国の時よりも遙かに巧妙で城塞技術に長けるロシアの技術の粋が集められた。

明治28年に『極東平和』を名目に日本に干渉して、日本が極東平和と言つ理想・実質は武力を背景にした干渉に屈した形である。に応じて手放した土地をロシアが居座り極東平和を脅かしてしまつたのである。

同じくドイツは山東半島の南部にある膠州湾を租借し、7月にはイギリスが山東半島の先端にある港都市の威海衛を租借した。清国の弱体化は目覚ましく、列強各国が進出を始めいていた。

清国が落ちれば次は朝鮮、最後に日本である。国力の弱い国が強い国に支配される帝国主義の時代である。日本国民は心血を注いで国力向上に努めた。

明治31年8月

太陽が照らす日本の東京。蝉が鳴き、蚊が人の生き血を吸ういまわしい時期でもある。暑さをやらげると冷や水と団扇、蚊取り線香が必需となる季節でもある。日本陸軍の全将兵も紺色の冬着から新たに採用された茶褐色の夏着へと衣替えをしていた。

東京の三宅坂に陸軍の中枢である参謀本部が置かれていた。参謀総長は、日清戦争の発端に一役買った川上操六である。彼は日々の職務をこなす一方で、対露戦略の作戦計画を練っていた。この対露戦略構想は、川村にとって心身に押し掛かる困難な大課題であった。

度の尺度から作戦を練ってもロシア軍との戦争に勝つ見込みが見つからなかった。

勝つ見込みがない。というのは、日本の陸軍力のみで戦争に勝つ事が出来ないという訳である。戦争の終結を外交を持って終わらせるにしても、どの時期に停戦に持ち込むかが問題であった。その停戦に持ち込むまでの間に起こる想定を分析しても日本陸軍にとって苦戦は免れないものだった。

日本がどれだけ軍拡を進めても、ロシア軍の物量には到底及ばない。

苦戦を強いられる戦いに陸軍をどのように勝っていくか。川上は常に頭を悩ませていた。

一つの失敗で全ての戦略が崩壊する。この重圧が川上の心身を蝕み続けた。

幾日も参謀本部の自室に川上は籠り、机の上に広げた極東の地図を数枚並べて戦略を練った。灰皿には煙草の吸殻が山になっており当番兵が常に片づけるが山はすぐに出来る有様だ。

職務を終わらせた川上はいつも通り自室に籠り極東地図を広げて椅子に座って煙草を吸った。

暫く考えていると士官が入ってきて、

「兒玉十三朗中将が参謀総長殿にお会いしたいと言って参りました」

と言った。

「兒玉が」

川上は呟き、通すように士官に命じた。そして数分で兒玉が現れた。

「やあ、兒玉さあ」

「久しいなあ、川上。対露作戦のあんばい（状況）はどうだと、兒玉は単刀直入に尋ねた。」

「書いたり消したりの繰り返しだ」

そう言って川上は一枚の紙を兒玉に手渡した。作戦計画書である。

「どれどれ……成程な」

兒玉は川上が考案した作戦計画に目を通した。

「良い作戦じゃないか」
作戦書を川上に返した。

「とこいが、そこらじゅうがボロだらけさ」

「ボロだらけ？」

「完璧な作戦なんて、こん世に存在せん。実戦では一つや二つは重大な『ボロ』がでう」

「それが悩みの種か」

「ああ。そうだ」

「そうやって頭を抱えるなや。気晴らしに、わしの考えた作戦を見てみった」

兒玉は上着の懐から何重に折り重ねた紙を取り出して川上に渡した。

紙を広げて川上は中の文章を読み始めた。

- ・開戦時期を明治37年頃とする。
- ・戦争初動期に四つの「軍」を編成する。
- ・初期攻略目標を遼陽と定める。
- 一、開戦第一作戦で第一軍を持って朝鮮半島に上陸し、ロシア軍を撃破して北上する。

二、第二軍を持って遼東半島に上陸して南山を攻略して北上する。

三、第三軍を持って旅順を攻略する。もし、旅順攻略が長期化した場合、予備の第四軍を派遣して遼陽決戦に投入する。

四、翌38年3月を目途に奉天で再度決戦を行う。

五、長春またはハルピンを最終攻略目標とする。

六、三の段階後に戦力的余裕が生じれば、新たに第五軍を編成して樺太、ウラジオストクを攻略して北上する。

その他には、一から六段階の作戦における砲弾使用量、総動員兵力も詳細に書かれていた。

「わしの考えた作戦はどんなもんだ？」

「一會戦でん使う砲弾の使用量がやけに多いな」と、川上は指摘した。

一会戦での一個軍が消費する弾薬は約5万発以上と書かれていた。これは日清戦争で消費した弾薬量を遙かに上回っている。

「清国陸軍とロシア陸軍の実力は違いすぎる」というのが兒玉の考えだった。

ロシア陸軍は300万の兵力だけでも圧倒的な威圧を感じてしまう。そして、兵卒の勇気と服従心も命令を絶対的なものとして銃弾や砲弾の降り注ぐ中を突き進む日本兵に負けないものがある。

士官の能力も、ロシア帝国の歴史中で歩んできた諸外国との戦争で培ってきた知識と栄知が備えられている。

ロシア陸軍の戦術もロシアの歴史や国柄が良く反映されていた。重火砲の運用を重視し、『拠点防御』という戦術を採り、攻め込む敵を拠点に居座りながら防戦しては次の防御陣地に下がって行き、敵を疲弊させつつ補給線を伸ばして行く。そして、伸びきった補給線をロシア騎兵が強襲をかけて突き崩して、敵主力に狭撃を加えて敵戦力を無力化させる。ロシアが最も得意とする戦略であった。

日露戦争が起きれば、ロシア陸軍は満州の平野で上記の戦略を用いて来るだろう。

日本陸軍がロシア陸軍を撃ち破るには、各会戦の初戦でロシア軍に痛烈な一撃を与える。これが兒玉の出した結論であり、砲弾使用量が結論の表れであった。

「後の課題は兵站だな」と、兒玉は指摘した。

20万発以上の砲弾を輸送するには、海上輸送を最小に行う必要がある。問題は陸揚げした後だ。陸軍の輸送部隊である輜重兵の規模だけでは限界がある。そして、最大の問題が満州の道路網である。雨期に入れば路面が凹凸の悪路となり、輸送の支障をきたすことは免れない。

「軍直轄の兵站、輜重兵の大統合部隊を作らないといけないと考えている。それと、道路を整備する旅団規模の工兵部隊も欲しいな」

「…次に旅順攻略とあるが？」

川上は尋ねた。

陸軍からみて旅順は、ロシア海軍の旅順艦隊が居座る軍港であり、戦争になれば日本海軍が旅順艦隊と対決して撃破する事となっており、陸軍の作戦を考案する川上は旅順の攻略を見当していなかった。

「わしは、旅順が千早城に見える」

「まさか」

川上は耳を疑った。

千早城とは、鎌倉時代末期の武将である楠木正成が河内（大阪）の金剛山付近に築いた城で、数万の鎌倉幕府の軍勢を僅か千人弱の兵で幕府滅亡まで守り通した難攻不落の城塞の事である。

「海軍ではロシアの旅順艦隊を叩けんと言っのか？」

「ああ、叩けんよ」

海軍の戦略とは裏腹にロシアの旅順艦隊は旅順港の堅い守りの中

に籠り、日本海軍の主力艦隊の行動を牽制させて、ウラジオストクの艦隊が日本の海上輸送路を脅かす。と言うのが兒玉の推測であった。

「そいどん、兒玉さあ。旅順が難攻不落だと言うが、陸軍で落とせうのか?」

「わからん。だすけ、わしが一軍を束めて旅順を落とす」

「兒玉さあが?」

「ほかに適任者が見当たらん」

川上は頷きながら改めて兒玉の作戦書に目を通し続けた。

「こよ参考にしてよかか?」

「ああ、こつげがん(物)でよけりゃいいよ。さてと、長居したな」

「もう行くのか」

「色々行って回る所がだつたりあるんだよ」
「そう言うて兒玉は参謀本部を後にした。」

第二十四話：陸軍

日本陸軍の主要部隊の基本単位は『師団』である。

日清戦争直前の日本陸軍の師団は、

近衛師団

第1師団（東京）

第2師団（仙台）

第3師団（名古屋）

第4師団（大阪）

第5師団（広島）

第6師団（熊本）

と、七個の師団であった。

しかし日清戦争後、日本はロシアを仮想敵国と定め、世界最大規模の陸軍であるロシア陸軍に対抗するために師団の増設を始めた。

そして新たに、明治31年から32年にかけて

第7師団（旭川）

第8師団（弘前）

第9師団（金沢）

第10師団（姫路）

第11師団（善通寺）

第12師団（小倉）

第13師団（高田）

第14師団（宇都宮）

第15師団（豊橋）
第16師団（京都）

十個の常備師団を新設させて、国内一七個師団の体制で戦力を増強させた。

さらに、

第17師団（岡山）

第18師団（久留米）

台湾師団

三個の師団の新設の準備が進められた。日露開戦直前時には二十個師団の体制となる予定だ。

師団の基幹部隊となるのが、二つの歩兵旅団である。歩兵旅団は、二つの歩兵連隊から成り、一個の師団に四つの歩兵連隊がある。

そして、歩兵部隊の戦いを助けるのが砲兵部隊である。

各師団には、野砲を装備する砲兵連隊が存在する。また、将来的には野砲の能力を上回る重砲を装備する大隊を編成させる予定ではあるが、定かではない。

歩兵や砲兵の進む道を作るのが『工兵』である。

日露戦争の地上戦の主な舞台となるのは清国東北部の満州だ。その満州で日露両軍が数十万の軍勢を率い、戦史に名を残す大会戦を繰り広げて行く事になるだろ。

日本がロシアとの戦争に、最終的な勝利を得るには全ての戦いに勝って行かねばならない。

戦いに勝つ原則の一つとして、部隊の迅速な移動は不可欠である。敵より早く機先を制する事で、戦いの主導権を奪い敵の戦略を狂わせる事に繋がる。

工兵は道無き所に道を作り、河に橋を架ける。何も無い場所に野戦築城を築くのも工兵だ。

各師団の工兵部隊は日清戦争直前まで大隊規模であった。日清戦争後の軍備拡張を得て連隊規模へと増強をされた。さらには、『工兵旅団』という、専門兵科の旅団が編成されることとなり、四つの工兵旅団が創設される。

師団の目となるのが、騎兵と気球である。

前者の日本の騎兵は歴史が短く、欧州列国のように長く華々しい戦果を挙げた例はない。

そもそも騎兵は、馬と人の一頭と一人が一組となって初めて単一の『騎兵』となる。

日本に昔から住む馬、日本馬は残念ながら世界に通用する馬では

ない。日本には広大な平原はなく国土の八割以上が山岳と森林地帯である。日本馬は日本の地形に適した体をしている。そのため小柄で短足である。長距離移動も出来ない。

補足を入れるが、源平合戦や戦国時代には馬に乗った騎馬武者などはいた。だが、日本国内の限定的な場所で合戦を繰り返していただけである。騎兵を主力として、馬の機動力を活かして西の果てから東の果てへと短期間で大移動した戦史はない。日本の戦史に登場する騎馬武者は、単に指揮官の象徴であつたにすぎないのだ。

日本陸軍の騎兵運用は、偵察と各部隊との連絡に重点を置かれており、攻撃は二の次であつた。

それでも騎兵の必要性を兒玉十三朗は主張し続け、日本騎兵の育成を秋山好古に一任させたのだった。

日清戦争を経て、騎兵の拡充が始まる。師団内騎兵は連隊へと増強され、騎兵を主力とする二個の旅団が創設される目途が立てられた。

そして、もう一つ師団の目の役割を果たすのが気球部隊である。気球を飛ばして高度から敵を搜索する。各師団にそれぞれ一個連隊が置かれ、軍直轄用の気球連隊も五つ分編成される予定だ。

最後に近代陸軍の作戦遂行に欠かせないのが兵站である。

陸軍で兵站を担う部隊となるのが輜重大隊、弾薬大隊、衛生隊、野戦病院である。だが、陸軍に影響のある高官や実戦をくぐり抜け

た指揮官達は兵站に対する認識が甘かった。むしろ、兵站部隊を見下す輩までいた。こついつた兵站意識の向上にも兒玉十三郎は力を注いだ。

第二十五話：大砲

明治32年

蝉が高らかと鳴き、晴天の太陽が照らして緑の生い茂る大阪府の信太山に陸軍の演習場があった。

雷鳴の如く砲音が一帯に鳴り響いたとたん。周囲から虫の鳴き声がピタリと止んだ。

大砲の射撃場に一門の野砲があり、十数人の軍人達がいる。軍人たちの中に兒玉十三朗もいた。

「有坂少将、立派な大砲ばこしよい（作り）ましたな」と、十三朗は満足のした顔で有馬と言う名の軍人に言った。

「駐退機とはすごいな。大砲の脚にずれが生じていない」

別の軍人が周りの同僚に声をかけた。彼らは皆、陸軍砲兵科の指揮官や参謀将校達である。

大砲は、砲弾を発射する砲身に砲撃時に砲を地面に固定する脚、砲を移動させる時に必要となる車輪を持って従来型の大砲となる。

従来型の大砲の弱点と言うのが、砲弾発射時に砲全体に来る反動で大砲の固定位置にずれが生じてしまう。位置がずれたまま砲撃をしても目標に当たる筈がないため、砲撃の反動によってずれが生じる度に砲兵は砲の位置修正をしなければならなかった。砲弾の命中率と速射性が近代戦争を左右する。

陸軍砲兵工廠の少将有坂成章は、長州藩の出身であり戊辰戦争で

長州藩の日新隊に加わり転戦する。維新後の明治7年に陸軍兵学寮に出仕し、その後はヨーロッパに渡り各国の銃砲製造の工場を見て回り、国産銃砲製造の技術を磨いた。

そして明治30年に、それまでの主力小銃であった開発者の村田^{むらた}経芳^{つねよし}に因む村田銃に換わる三十年式歩兵銃を開発する。

口径6.5mmと弾丸が軽量化された分、携帯する歩兵の負担も削減される。こうした小さな工夫が戦場で死闘を繰り広げる兵隊達の運命を大きく変えるものだ。

有坂は、歩兵銃のみでなく大砲の開発にも乗り出していた。今回、試射したのがそれである。試射した大砲には、新しい装置が組み込まれていた。駐退機と呼ばれる装置である。

大砲の砲身に設置する事によって、砲撃を行った際の反動を駐退機によって砲身のみが動じて大砲を支える脚などには影響がほぼなくなる。

「この大砲を五年以内に全砲兵連隊に配備は可能か？」
と、十三朗は一人の陸軍砲兵工廠所属の技術官に訪ねた。

標準的な砲兵連隊には、約36門の大砲が配備されている。

現在、日本陸軍には17個の師団が編成されているため、17個の砲兵連隊がある。つまり、約612門の大砲を必要とする。更には、今後新設予定の3個師団に砲兵旅団、予備役を主体とする後備師団旅団にも配備する必要があるため、約一千門程を生産する必要がある。

技術官は、首を縦に下ろして可能だと言った。

「そうか」

十三朗は期待通りの返事を聞いて気分を良くした。

「兒玉中将、続いで試作砲の試射を行います」と、有坂が言った。

うむ。と、十三朗は頷いた。そして、近くにいる兵士に自分の馬を持って来るように命じた。

先程試射した試作砲をも勝る砲音が響き渡り、暫くして地面にずしんとした振動が走った。試作砲の試射後、十三朗は馬に跨がり着弾地点に向かった。

「…ふうむ」

と、十三朗は試作砲の着弾地を眺めた。

すると後ろから、閣下。と、十三朗を呼ぶ声が聞こえて来た。振り返ると馬に跨る小太りの軍人が一人やってきた。

「伊地知大佐か」

伊地知、本名を伊地知幸介と言い、階級は陸軍大佐である。薩摩の出身で明治8年に陸軍士官学校に入り、砲兵科に進む。士官学校在学中の明治10年には西南戦争に出征した。卒業後にフランスとドイツに留学して列強の砲兵を学んで来た。

「お供します」

「ああ、良からう」

伊地知は十三朗の横に馬を並べて試作砲の着弾地を見た。

「大穴があきましたな。流石は二十八糎センチの沿岸砲だ」

「全くだな」

十三朗は頷いた。

二十八糎砲は、元々明治17年に陸軍がイタリアの28?砲を基に開発した沿岸砲である。日本の主要都市、要塞沿岸部に配備された物で、この沿岸砲を陸戦に用いる重砲として使用する事にした。しかし、問題があつた。元々、二十八糎砲は沿岸砲として設計されており、26トンの重量のある巨砲をどうやって移動させるかだ。移動できないわけではないが従来の移動法では時間と労力がかかる。そして、設置の際には、地面にコンクリートを敷かなくてはならない。重砲にすりには分が悪い代物だつた。しかし、十三朗が気にかける問題は別にあつた。

「ロシアの兵馬をなぎ倒せても凍つた地面を吹き飛ばせるがだな」

満州の冬季は日本以上に寒い。地面が氷結して砲弾を弾く程の硬さにまで固まる。逆に言えば、冬季以外の野戦に用いる事が出来れば、二十八糎砲の存在価値は十分大きい訳だ。

閣下。と、伊地知が話しかけ、二十八糎砲の弱点を指摘して何故、沿岸砲を必要とするのかを訪ねた。歩兵ならば、大きい大砲を見ればその欠点を見いださずに利点だけを挙げるだろう。しかし、砲を操り知識のある砲兵科にすれば利点よりも欠点を挙げてしまう。

「あのがん程でつかな大砲は無い」

「じゃあどん沿岸砲を野砲として使うに勝手が悪いものござんで」

と、伊地知が言つと十三朗は高らかに笑つた。

「んな（お前）はまだまだ若いな」

「は？」

「使い勝手が馬鹿悪いのは百も承知だ。しかし、この欠点を克服して利点だけを活かさなくてはロシアとの戦争なんぞには勝てん」

「言いたい事はわかいもすが」

それでも伊地知はまだ納得が出来なかつた。

「伊地知、戦に勝つ大将はなあ。出来ない事を出来るようする奴を言うものだ」

そう言つて日本史に登場する二人の大将の例を挙げた。

一人は源義経である。源平合戦の一つに当たる一ノ谷の戦いで義経は、約70騎の騎馬武者を率いて断崖絶壁の一ノ谷を駆け下りて平家の本陣に奇襲を仕掛けた。まさか後方の崖から攻撃をされるなど夢にも思わなかつた平家は総崩れとなつて四国の屋島まで退却をした。

もう一人は織田信長である。石山本願寺との戦いで織田水軍は本願寺に味方する日本最強と呼ばれた瀬戸内海の村上水軍を破るために、水軍大将の九鬼嘉隆に命じて砲を持ち鉄線を張つた大型戦闘船

を作らせた。船全体が鉄線に覆われているため村上水軍の鉄砲や火矢、砲録火矢をひじき、船内に搭載した大砲によって村上水軍を敗走させた。当時の建造技術でも鉄線張りの船を造るのは難しく、作れたとしても機動性に劣るのは明らかであった。しかし、鉄線張りの船を造らせた。そして、機動性の悪さを逆手に取り村上水軍にわざと接近包囲されて大砲の有効射程距離まで近づけたのだ。織田水軍は発想と戦術で村上水軍を破ったと言っているだろう。

源義経と織田信長に共通する点は、敵の予想を覆す戦術を持っていたと言う事だ。

「何、ロシアとの戦争はまだまだ先の話だ。その間に大砲の改良もある」

そう言って十三朗は伊地知の肩を軽く叩いて指揮所の方へと馬を走らせて行った。

第二十六話：若き獅子

明治34年

児玉十三朗は、東京平川町の自宅に帰ってきた。

「今帰った」

と、家の玄関の戸を開け、声を出して帰宅を告げる。暫くすると、着物を着た若い女性が急ぎ足で十三朗の前に現れて膝を下した。

「お父様、お帰りなさい」

そう言つて、女性は両手を床に着けて頭を下げる。笑顔であつた。

「ヤエか。お母さんはどうした？」

「今、伯母様のお見舞いに病院の方に行つてます」

「そうか。いやはや、また暫く見ん間に大きくなつたなあ」

十三朗は微笑み、久しぶりに会う娘の成長を喜んだ。そして、玄関の前に座つて履いている靴を脱ごうとした時、下に置かれている靴の数が一人分多い事に気付いた。

「誰か客人でも来ているのか？」

「はい、お兄さんが士官学校のお友達を連れてお父様の書齋で勉強をしています」

「ほう。友達か」

荷物をヤエに預けて書齋に通じる廊下を進んだ。すると、書齋の方から陸軍の下士官服を着た二人の若者が出てきた。

「帰つて来たかい。父さん」
と、若者の一人は笑顔で十三朗を出迎えた。

「ああ、帰つたぞ。白朗」
十三朗は笑つた。

白朗、本名を兒玉白朗と言い、十三朗の長男である。明治14年に産声を上げた二十歳の若者である。彼と長女のヤエの他に次男と三男の幼児がいるが、今は母親に連れ添われて家にはいない。

「君は？」

次に、息子の横に立つもう一人の若者を尋ねた。

「始めまして閣下、乃木保典のぎ やすすけと申します」
そう言つて十三朗に頭を下げた。乃木と言う名字を聞き、若者の顔を見ていると脳裏に乃木希典の顔が浮かんだ。

「もしかすると君は乃木希典中将の倅かね？」

「はいつ。乃木希典は自分の父です」
それを聞くと、十三朗は大きく頷いた。乃木保典は、乃木希典と静子夫人の次男である。巷では、父親と母親の良い所をたくさん遺伝した好青年と言われており、現に士官学校に入つてからは同期生で同い年である白朗とは無二の親友となっている。兄には軍士官学校第13期生である乃木勝典かつすけがいる。

「そうかそうか。乃木さんの倅か」

「はい。父から閣下の事を伺つておりました」

「そうか。ところで二人は書齋で何をやっていた？」

「士官学校の仲間と対露戦術の話しをしてな、乃木と一緒に具体的な戦い方を考えておったんだ」

と、白朗は言った。

「それは感心だ」

「それで、閣下が帰って来てくれたので、一つ戦術の伝授を受けたいのです」

保典が白朗に続けて言う。

「ああ、良いとも」

十三朗は二つ返事で受け入れた。

書齋は八畳ほどの部屋で、中には古今東西の軍事に関する本が山のように詰まされており、本の山が二三箇所ある。その奥の端に小さな机が二つ置かれている。二人はそこで日夜勉強や研究に励んでいたのだろう。

軍人である以上、私情を捨て国家に尽くすのが常である。だが、そのため家庭を疎かにしてしまう。知らぬ間に子ども達が成長してそれぞれの道を歩む姿を想うと父親としては頼もしく思い、何もしてやれなかった罪悪感、寂しさなど様々な感情が交差した。

「父さんならどういった戦い方を講じるんだい？」

白朗が尋ねた。どの軍学書にも集団を用いて相手の集団を倒す方法や記録は書かれている。しかし、これらは集団を束ねる将官程の階級者が必要とする知識であり、白朗や保典のような小隊規模の小

部隊を指揮して敵兵と直接撃ち合い斬り合いをする者達にとっては、どうやって確実に個人が個の敵兵や小部隊に勝っていくかの知識が欲しかった。しかし、軍学書にはそう言った個人の必勝法などを書いた本は皆無だった。

「わしなら、機関銃の火力で敵を制圧する」

と、十三朗は言った。現在日本軍は日露戦争に備えて機関銃の大量生産と配備を進めていた。将来的には、各歩兵小隊に機関銃を数挺装備をした『機関銃分隊』の編成が予定されている。

「『動かざること山の如し』だ。敵が攻めてきても、白兵戦に持ち込ませず陣地内で火力を持って敵を撃退する。そうすれば味方の被害は最小限に出来て敵は手痛い被害だけが出る」

日本陸軍は、土族の反乱の頃からガトリング砲を運用してきた。

日清戦争でも同様である。が、あくまで歩兵の突撃支援のための射撃を目的としてきた。しかし、日露戦争に備えて戦術構想が一新され、新しく製造が開始された機関銃を歩兵戦の主要火器としてロシア陸軍と戦う戦術が立てられた。

白朗は頭に手を当て苦笑した。

「なんともはや、お父さんらしい考えと言うかなんと言うかな
あ」

自分達の考えた方法とは見当が違っていても、確実に的を射っている考えを聞き納得と父に負けた小さな敗北感が込み上がった。

「何ね、勝てば官軍だ」

「確かに閣下の戦術は一理ありますね」

白朗と保典には返す言葉がなかった。十三朗が若き日の頃から戊

辰戦争、西南戦争、日清戦争などの大戦争を戦って勝利して来た実力をわきまえていた。

「お茶菓子を持って来ましたよ」
ヤエが茶とようかんを持って来た。

丁度良いな。と、言いながら十三朗と白朗は茶を飲み、ようかんを食べた。

「はい、乃木さんもどうぞ」
と、ヤエは茶を保典に差し出す。

「ありがとう」
そう言っ保典がヤエから茶を受け取るうとした時だった。

保典の手がヤエの手に少しだけ触れた。

「あつ」
触れられた途端、ヤエが小さく間の抜けた声を零してしまった。
まだ16歳の少女であるヤエにとって男性と手が触れ合う事に対する慣れない戸惑いと恥ずかしさが声になって出たのだ。

その小さな声を聞いた保典は、ごまかすようにヤエから目を逸らして受け取った茶をすすった。まず聞く事の無い女性のか弱い声を聞いた保典の胸の鼓動が高まっていた。また、ヤエも保典から視線を横に逸らした。笑顔を崩さなかったが、両頬が赤く染まっている。

十三朗と白朗は気づいていなかったらしいが、気づいていたら二

人はどうなっていた事か。

第二十七話：病床の人

明治34年9月

東京豊多摩郡・現在の新宿区・に陸軍軍医学校があつた。陸軍の軍医を育成する場であり、陸軍の病院としても機能していた。

患者が入院している病室に繋がる廊下を兒玉十三朗と兒玉源太郎、陸軍大佐の田村怡与造たむらいよぞう、そして陸軍大將の大山巖が歩いていていた。

「あつたぞ。ここだここだ」

と、大山が病室の札を見て目的の人物がいる部屋を見つけた。札には『川上操六』と書いてある。

川上操六は、参謀総長としての職務と並行して日夜対露戦略を思案していた事が祟り、過労のため体調を崩してしまい入院する事となった。

四人が病室に入るとベッドで寝ていた川上が体を起こして訪問者を迎えた。体調を崩して軍医学校に運ばれた時に比べれば顔色は良くなり、順調に回復していた。

「川上さん、調子はどうだ？」

と、兒玉源太郎が体調を尋ねた。

「大分良くなった」

「今の陸軍におはんが頼りです。ゆっくりと休養してから戻って来やったもんせ」

川上の上官であり、同郷の大山巖が満面の笑みを浮かべて言った。

その笑顔には野心も無い純粹なもので、誰もが引き寄せられるような人徳が備わっていた。

「ありがとうございます。とこいで」

と、川上が切り出した。最近のロシアの動向を尋ねて来た。

昨年の明治33年6月から今月までの間、清国で動乱が起きた北清事変、またの名を義和団事件とも言う。

19世紀後期、列強は清国に進出して權益を搾取して行った。義和団とは、海外勢力を追い払う排外運動を山東半島を中心に行っていた秘密結社である。

『扶清滅洋』を唱える義和団は、1900年5月に北京に入り、排外運動は勢いを増した。清国政府は、外国との関係を考えれば義和団の鎮圧が当然であったが、義和団はあくまで外国勢力を排除して清国を擁護する立場をとっていた。鎮圧すれば国内の批判を浴びるため有効的な対処がとれなかった。むしろ、西太后などの有力な権力者は義和団に同調する立場を取ってしまった。

6月20日に清国政府は、義和団の実力を利用して日本を含む欧米八カ国に宣戦布告をする。

日本政府は、直ちに広島第5師団を北京に派遣する。また、清国から宣戦布告を受けた七カ国軍とも合流して日本軍を主力とした連合軍が北京に入り義和団を鎮圧した。その後、八カ国は清国に多額の賠償を要求する。当然の成り行きである。しかし、問題は義和団の鎮圧後に起きた。

八カ国連合軍に加わったロシアは、北京に軍を派遣する一方で満

州にも軍を派遣して瞬く間に各主要都市に兵を配置した。名目は権益の保護である。

朝鮮や日本の軍事的脅威が高まった事は言うまでもない。

「特に目立った動きはありません」と、田村は言った。

「そうか。では、対露戦略の方は？」

川上が入院して以来気にかけていたのが対露戦略である。後任に、『今信玄』の異名を持つ秀才の田村が引き受けた。そして、田村を補佐したのが十三朗である。

「十三朗さんのおかげで順調にはかどっています」

田村は言うが、

「何、わしは田村に教えるだけで、決断をするのは田村だよ」
そう言って十三朗は、自分には手柄が無いように振る舞った。

川上は、十三朗らしい。と思いつつニヤリと笑みを浮かべた。

「話は変わるが、暫くしたら、わしは天津に行つて駐屯軍の様子を見て来る。ついでに現地のロシア軍司令官にも合つて来るよ」

十三朗が言った。

北清事変の後、各列国は自国民保護を名目に清国に軍を駐屯させた。日本も、清国駐屯軍を編成して天津に駐屯させていた。

「今の清国で一番力を持っているのは、袁世凱だ。上手く行けば今後の清国での日本の立場が変わるかもしれん」
そう言つて、兒玉源太郎が話に入った。

袁世凱は清国の軍人であり、李鴻章の下で手腕を発揮する政治家でもあつた。

日清戦争以降、軍の近代化と制度改革に力を注ぎ、義和団の乱の際には、西太后の圧力で清国政府が義和団を支持する中で、袁世凱は政府の方針を無視して自分の直轄する軍を動かさなかつた。そして、八カ国連合軍に義和団が鎮圧され、清国政府の求心力が低下すると、袁世凱は自然と政府に対する影響力を強めてた。

「確かに、袁世凱は今後の清国を引っ張つて行くだろうな。それが、清王朝に代わる新しい支那の国の皇帝になるかもしれん」
十三朗は呟いた。

日本とロシアが戦争を繰り広げる舞台となるのは主に朝鮮半島と満州である事は一目瞭然である。もしも、ロシアが清国を丸め込み、日露開戦と同時に清国軍が日本軍を攻撃する事態が起きれば、実現身のない事であるが、戦争どころではなくなる。

また、戦地での軍の駐屯地と交通路の確保、地元民の協力は欠かせない。そのため朝鮮と清国の両国を日本の味方に組み込まなければならぬ。朝鮮はまだしも、清国は事前の準備が必要である。

「では、清国から十三朗さあが朗報を届ければ川上さあの体はもっと良かなりもすな」
と、大山がゆっくりとした口調で言った。

「確かに、医者飲ませる薬よりは特效薬になりもす」

戦略家の川上にとって最高の薬は、『体の病』を治す薬より『気の病』を治す薬が良いのかもしれない。

「わかったわかった。わしが朗報を届けてやるすけ、大船に乗った気でいてくれや」

そう言って、十三朗は自身の胸を力強く叩いた。

第二十七話：病床の人（後書き）

史実の川上操六は、明治32年に対露戦略の思案の半ば過労のため死去していますが、この話の中では兒玉十三朗の助力により史実よりも心身にのしかかるプレッシャーが軽減したため病状も軽く済み、これからも生きて活躍していきます。

第二十八話：天津へ

十三郎は、天津に向かう準備をするため、自宅に戻り旅支度をしてきた。国内外での出張や出征を何度も繰り返しているため、今回の天津出張の支度も造作なく行っていた。と言っても、彼の持ち物は必要最低限の小道具と愛読書だけである。必要な品は現地で揃えればいいのだから。

「お父様」

と、暫く荷物の整理をしていると戸の向こうの廊下から長女ヤエの呼ぶ声がした。十三郎が返事を返すとヤエが戸を開けて部屋に入ってきた。両手には高価な日本酒の入った一升瓶を持っている。

「ああ、買って来たか。ありがとう」

そう言って十三郎はヤエから一升瓶を受け取った。

「それも天津まで持って行くんですか？」
ヤエが尋ねた。

「天津の駐屯軍司令官は大の酒好きでな。こうして日本の土産をたがいで行くんだ」

十三郎は酒瓶を丁寧に風呂敷にくるみ、荷物の横に置いた。

「あの、お父様」

「なんだ？」

言葉を返すとヤエは珍しく、少し浮かぬ顔をしていた。

「お父様とお母様は、どんな風に知り合ったのですか？」

「わしと母さんの出会いか？」

「はい」

いきなりの娘の問いは、決して意外な事ではなかった。年頃の子であれば自身の将来を考える時期であろう。父親からすれば複雑な気持ちである。十三朗も例外ではない。だからといって、娘の質問に答えない訳にはいかなかった。

「母さんとは、山県元帥の紹介で見合いをした」

西南戦争が終結した翌明治11年の事である。熊本から帰京した後、陸軍の改革案を山県有朋に提案しに行った際、突然見合いの話が持ち出されたのだ。

「では、お父様とお母様はお見合いで初めて出会ったのですか？」

「ああ、見合いの話が来るまでずっと陸軍の事だけが頭一杯で嫁を貰おうとは考えた事がなかった。あの時、31歳だったわしは、20歳のお母さんに一目惚れした」

昔の記憶が蘇ってきて十三朗は、かつての日々を思い起こして笑みをこぼした。

「お父様」

「ん？」

「私も嫁に行く時はお見合いなのですか？」

今度は意外な質問であった。

「……………」

十三朗は目を見開き口をへの字にした。

「お父様？」

「…いや別に」

正直過ぎる子だと思った。自分も今まで色々な言動で周囲の度肝を抜かして来たと考えると、自分の子は自分に似た所があるものだ。

まず喋る前に、軽く咳き込んで調子を整えた。

「母さんは武士の家で育ったが、お前は違う。お前が一生を捧げると決めた男がいればそれでいい」

思い付いた言葉を口に出したが問題は無いだろう。娘が一生を捧げる男は何処その馬の骨ではないだろうから。

「ありがとうございます。お父様」

そう言っつて、ヤエは満面の笑みを浮かべて部屋を出た。

西暦が1900年代に入り、列強各国が清国に進出して半世紀が経った。最終的には中国を植民地とする野望を列強各国は秘めており、前段階の行動として清国領土の租借と都市の租界が挙げられる。

租借とは、他国領土の一部を一定期間実効支配する事で、租界とは、一都市に置ける行政権と司法権、軍事などの権利を担う事である。

義和団の乱の後、清国の天津に日本租界を設置した。

天津を拠点とする清国駐屯軍の司令官に、秋山好古大佐が明治34年10月に就任した。秋山は、軍人である一方で大きな器の持った人物であった。

日本租界を通る大動脈は、整備が行き届いておらず雨が降れば悪路となり人々の不満の一つとなっていた。

日本の居留民が多く滞在する場所を列国の租借地に劣らないよう『見栄』を張るため秋山は、工兵一個小隊を内地から引つ張り出して市街地の道路工事を行わせた。

後日、日本租界に整備された道路が出来上がり租界地の活性化に少なくない貢献をする。

また、秋山は清国に駐留する列強各国の軍の将校とも上手く付き合いをかさねた。清国における秋山好古の評判は高いものであった。

兒玉十三郎が天津の駐屯軍司令部に訪れ秋山と面会したのは10月の末の事である。

駐屯軍司令部の司令官室のソファに腰を下ろして向かい合った

秋山好古と兒玉十三朗は、フランス滞在時代の昔話と騎兵について話しに花を咲かせた。

「ほれ、日本の土産だ」

そう言っつて十三朗は日本酒の入った一升瓶を秋山に渡した。

「ありがとうございます」

秋山は酒瓶を受け取り、支那酒を十三朗にすすめた。

「支那の酒はひどく（すごく）辛いな」

「そこが支那酒の美味いところです」

と、秋山は支那酒を自分の器に注ぎ一息に飲みこんだ。

「しかし、ここに来るまでに市内を見渡したが天津の治安は良いものだ」

「日本人、清国人と差別しないようにすれば大きなもめごとは起こりません」

「なら今夜は枕を高くして眠れる」

十三朗は秋山と酒を飲み交わして天津に来て一日目を楽しんだ。

第二十九話：袁世凱

兒玉十三郎は数人のどう同行を連れて山東省に訪れていた。

山東省の省都は内陸側の都市済南で、清国の存亡を左右する人物となりつつある袁世凱が住まう総督邸があった。

義和団の乱の後、清国の大政治家である李鴻章が没すると、袁世凱は山東省の直隸総督と兼任して北洋通商大臣の地位に就き清国の有力な政治家となった。山東省の直隸総督とは、管轄地域の行政と軍事の権限を持つ地方長官の事を指す。

独自の軍事権を持った事で『北洋軍』と呼ばれる正規軍の指揮系統から独立した袁世凱を司令官とした軍隊を保有した。日本から軍事顧問を呼び、装備と編成を列強や日本を模して強力な軍隊へと強化させて清国正規軍を上回る軍事組織とさせた。

器のある人物である。十三郎は今後の日中外交を考えて是非とも会って見極めてみたかった。

自分は、先の戦争で満州侵攻と高額な賠償金を取るように働きかけた張本人であり、清国側からすれば憎悪の対象である筈だ。

総督邸は立派な中華風の建物である。屋敷に使える使用人たちも中華風のスタイルで身のこなしをしていた。

同行の士官たちには別室に待機してもらい、十三郎は通訳を従えて客間に案内された。

使用人が扉を開けると、一際品質の良い服装に身のこなした人物がいた。袁世凱である。

兒玉は敬礼をすると同時に、袁世凱は手を合わせて拱手をした。

「大日本帝国陸軍中将兒玉十三朗です」

「大清帝国北洋大臣の袁世凱です」

十三朗は袁世凱の顔を眺めた。なるほど。清国は続く戦乱で国内秩序が秩序が乱れ政治家や軍人には精力が見えないが袁世凱の顔は明るく晴々していた。野望を果たさんとする男の顔であった。これで清王朝の命運は尽きたと悟った。

「兒玉將軍、將軍の噂はかねがね伺っております」

二人はソファ―に腰をおろして話し始めた。

「どんな風ですか？」

「類い希な戦上手であり、先見の明に優れていると。実際に先の戦争でも…」

「誇張が過ぎますな。本当は何かと苦勞人です」

後頭部を撫でながら十三朗が苦笑すると袁世凱も笑い出した。

（袁世凱は何かと下手に出ている。何か要求をしてくるだろうな）

「將軍、今の清は欧州列強の侵略によって存亡の危機に瀕してお

ります。清が落ちれば、その次は朝鮮、最後のは日本が標的となるでしょう」

日清戦争以来、清国の国際的地位は急落して列強の各勢力が我先にと権益搾取の勢いを強めて来た。果ては前年の義和団の乱以降からはその勢いはさらに強まっていた。

「つまり清国が倒れる前に我が国と組して互いに助け合い欧州列強をアジアから追い出したいと仰るのですか？」

十三郎は単刀直入に尋ねると袁世凱は首を縦に振って頷いた。因縁ある人物に要求してきたのだ。過去の恨みを水に流して将来を見通しての協力の要請である。

「今、ロシアは東北地方（満州）の支配を着々と進めています。そして朝鮮にも」

「閣下、私も閣下の御意見には賛成です。清国や朝鮮の惨状は我が国にとって決して対岸の火事ではありませんからな」

「ありがとうございます。そこで一つ將軍に協力していただきたい事があります」

袁世凱は言った。義和団の乱以降に連合国が得た天津の行政権の返還への協力であった。連合国の中には日本も含まれており、日本が持つ天津の行政権を率先して清国に返還すれば連合国も日本に習う筈である。

「確かに、清国人にしてみれば自分たちの生活を支配するのが外国人であれば不安は募りますわなあ」

日清戦争の後、日本は清国から台湾を割譲したが台湾島民は日本支配に反発し武力闘争を行った。十三朗は初代台湾総督として反発する台湾人の感情を抑えるのに苦勞をした経験がある。

「駐屯軍司令官の秋山將軍も協力を約束してくれました」

なるほど。袁世凱は連合国からの天津の行政権の返還は、さらに清国政府に対する影響力を強めるための一手だろう。

「天津の行政権の返還には連合国との協議が必要となります。今の日本の立場では各国の同意を得るのは難しいでしょうが、返還に向けて協力しましょう」

「ありがとうございます」

「ではこちらも幾つか閣下に承諾してほしい条件があります」

そう言つと笑顔であつた袁世凱の顔が少しだけ引いた。

「条件の内容とは？」

「まず、第一に朝鮮の今後の近代化を日本に一任すること。第二に日本が他国と戦争状態になつた際に貴国は中立を保ちつつ日本に協力すること。第三に貴国は国際社会での日本の立場に協力すること。この条件に協力してくだされば、私は清国と閣下の立場を保証することを誓います」

十三朗の出した条件の一つ目は、日清戦争で清国が日本に敗れているために朝鮮に対する影響力を失っているため容認するしかない。

二つ目においても出来ない事ではない。三つ目の条件は問題があった。確かに日本は近代化を始めて僅か三十数年で力を高めて来た。列強と肩を並べるのも遠くない事だろう。しかし、それでは清国が日本の属国となってしまう可能性は否定できない事であった。

「將軍の述べた条件にさうよう努めます」

と、袁世凱は言った。今すぐ承諾できる事ではなかった。しかし、現在の国内の現状と将来を考え味方を得る事を必要とした。

(一つ、袁世凱を教育してやろうか)

十三郎は考えた。

「いやしかし、支那の国とは実に羨ましい」

そう言つて十三郎は窓を見上げた。

「羨ましいとは？」

袁世凱が尋ねた。

「私は小さなころから『項羽と劉邦』や『三国志』、『水滸伝』などの話を聞いて育つてきました。昔から支那の国は実力のある者が実権を握つてきています。我が国では出来ない事です天皇陛下がおりますので」

日本には大昔から天皇が唯一国家君主として成り立ってきた。日

本史に登場する多くの実力者は天皇の権威を借りて日本を統治してきた。天皇の歴史は長く日本の歴史は天皇家の歴史とも言える。そう言う訳もあり、天皇家を滅ぼそうと考えた実力者は多くない。

「私も日本の天皇陛下が羨ましく思います。我が国の歴代王朝は力なくば他勢力に滅ぼされ一族が殺されて行ってきました。しかし、日本の天皇家は常に日本民族より慕われ一系のみで今日まで続く王朝となっているではないですか」

「ですが支那の国は、権威にとらわれない実力者たちが支那全土の覇権を巡る壮大な興亡によって多くの教本が生まれています」

多少の事実無根や誇示が含まれていたが、孔子の教えや孫子の兵法など今日にも影響を与える教本の多くは中国の興亡の中で誕生している。

「私は小さい頃には実力だけで一国を支配したい。そして、民に慕われる善政をもって国を統治してみたいと夢としてきました」

敵を退ける『力』と民衆を思う『仁』の二つがあつて初めて国家百年の計は成り立つ。どちらか一方を持つだけや片方にだけ傾けただけでは国は成り立たない。

「私利私欲や保身に溺れ、国家と民族の仁政と繁栄を後回しにする王や指導者などは下人以下の人間の屑だとも悟られました」

袁世凱は、黙つたまま十三朗の持論を延々と聞いていた。

「ちと、喋りが過ぎましたかな。私はしゃべちよこぎ（お喋り）な者で」

「いえ、將軍のお話になった事は私にとって他人事ではございません。將軍、今後ともより良いお付き合いをお願いします」

そう言って、袁世凱と十三郎は最後に握手を交わした。

第三十話：シベリアの狼

明治34年12月中旬 天津

「秋山、腹あ空かんか？」

と、兒玉十三朗が言った。日本総領事館での用事を済ませ、乗馬して駐屯軍司令部に戻る途中であった。秋山好古も同行していた。

「腹が空きましたな」

好古が言った。時刻は昼の12時となっていた。

「米はよっぱら（飽きる程）食った。たまには、よそのまま（飯）を食いに行くか」

そう言つと、先頭を進む十三朗は馬の進路を駐屯軍司令部から変えた。後ろの好古たちも十三朗にならない馬の進路を変えた。

天津には、日本の他にイギリスやフランスなど列強各国の租界がある。

租界の行政権は清国には無く管轄する外国にあるため、列強の租界は西洋風の建築物が目立つ。十三朗たちは今、外国の天津租界にいた。

「さあさ、着いたぞ」

「閣下、ここで飯を食うのですか？」

好古が尋ねると十三朗は、そうだ。と、言つて頷いた。

二人はとても落ち着いていたが、ついて来た士官らは驚いた。着いた先が天津のロシア駐屯軍司令部であつたからだ。

正門を警備するロシア兵も驚いた。何の前触れもなく敵対する外国の將校たちがいるのだ。追り返す訳にはいかず、当直のロシア將校が十三朗たちの方に歩いて来た。

「日本の將校殿ですね？」

そのロシア將校は英語で話してきた。日本人にはロシア語を話せる人間が少ない事を知っていたので英語で話した。

「大日本帝国陸軍中將の兒玉十三朗だ。ロシア兵のままを食いに来た」

と、十三朗はロシア將校に日本語で喋りながら馬から降りた。

ロシア將校は困惑した。日本語を話せるロシア人も少ないのである。

「兒玉閣下は、ロシア駐屯軍司令官のリネウィツチ將軍と面会したいために訪れた。取り計らってもらいたい」

そう英語で言ったのは、十三朗に同行していた英語を話せる士官であつた。

『ロシアの料理が食べたい』と、十三朗の言った事をそのまま英

訳する訳にはいかないため『ロシア軍司令官との面会』として最もな口実を述べた。

「そうですか。それではご案内いたします」

十三朗らは馬をロシアの番兵に預け、ロシア軍司令部宿舎に入っていた。

「秋山はこの司令のリネウイチ將軍と面識があるようだな？」

と、十三朗が好古に尋ねた。

天津に駐留するロシア軍の指揮官が中將のニコライ・リネウイチと言つ63歳の老将である。ロシア帝国の支配下にあつた東ヨーロッパのウクライナの出身で、17歳にしてロシア皇帝ニコライ1世の近習となる。1877年から1878年まで続いたロシアとオスマン・トルコとの戦争に出征して出世していき1895年に極東の南ウスリーの司令官となる。

義和団の乱では、ロシア軍の司令官として八カ国連合軍に加わり自らも全ての作戦で前線に立つて陣頭指揮を行う猛将ぶりを見せた。そして一方で、占領地にて部下に対し略奪を厳しく取り締まるどころか自身も部下と共に略奪行為を行う蛮行を働いて列国から厳しい非難を受けた。本来なら、本国に送還されて更迭をされるのが適切な処罰であるが、ロシア政府と軍からは何の咎めを受けること無くそのまま天津駐留ロシア軍の司令官となって今に至っている。

「あしが駐屯軍司令官となつてからは何かと世話になっていました」

「なら好都合だ」

十三朗たちは大広間に案内された。彼らを案内したロシア士官は軍司令官の許可を得て来ると言って部屋を出た。室内には日本の将校以外にロシアの番兵が数人いるのみだった。

「暇をもてあそぶなあ」

と、十三朗は窓の外を眺めた。雪が降っていて正門に立つロシア兵が見えた。

「流石は北国のロシアだな。兵卒まで立派な防寒着に身を包めている。羨ましい限りだわ」

世界最強の陸軍国であるロシアであった。火器や兵士の衣服も高水準である。一方の日本陸軍は創設から日も浅く海外との戦闘経験も少ない。日清戦争後の近代化で戦力を拡大しているが兵卒の衣服までは充実していなかった。忠義を誓う旗は違えど、陸軍軍人として十三朗は他国を震え上がらせる程の強大な陸軍を作り上げたロシアに尊敬する念を持っていた。

暫くすると、今度は佐官の階級章を付けた将校がやってきた。

「リネウィッチ中将が兒玉將軍との面会を希望しております」

その佐官は英語で話し、十三朗の部下が通訳をした。

「よし、行くか」

十三朗は腰を上げた。彼の後に好古と通訳が続いた。待遇は格別だった。数人のロシア軍士官も同行しており、通路や曲がり角、階段など何処を次に進むかを丁寧に教えてくれた。

（こっけ（こんな）待遇は今まで受けた事がなかったすけ、ケツがむず痒くてはいかんわ）

十三朗は思った。恐らく日本に対するロシアの見栄だろう。ロシア人の態度と礼節を見ると日本など眼中にあらずという風である。

あれこれ考えている内に司令官室についた。

「日本陸軍の兒玉將軍をお連れ致しました」

そう言ってロシア士官はドアにノックした。

「おう、入ってくれ」

と、ドアの向こうからロシア語がした。ロシア語を知らない十三朗でも、中に入室を促す返事だとは想像はついた。

ロシア士官がドアを開けると、十三朗はロシア士官の返事を待たずに中に入って行った。

「大日本帝国陸軍中将兒玉十三朗です」

「ロシア帝国陸軍歩兵中将ニコライ・リネウツチです」

と、十三朗の目の前に立派な髭を生やしている老将ことニコライ・

リネウツチがいた。

「本日は突然の訪問でありますがお会いできと嬉しく思います」
十三朗は型どおりの挨拶をして深々と頭を下げた。

「いや、私も閣下に一目お会いしたいと思っていた。暫くしたら私が閣下の方へ伺おうと考えていた」

悪名の名高き人物とは思わせないほど清々しい顔をしたリネウツチは手を指しのばした。

十三朗はリネウツチの手を握った途端、腹の虫が騒ぎ出して音を立てた。

「ところで、將軍は日本人の背丈が西洋人より低いかご存知ですか」

と、十三朗は腹の虫を気にせず笑いながらリネウツチに尋ねた。

当時の日本人の成人男性の平均身長は約150?であった。義和團鎮圧に集まった八カ国連合軍の代表兵士が横一列に並んだ写真が撮られた際、日本兵と外国軍兵士との身長差を比べると大人と少年とも言つべき程であったのだ。

「失礼を承知の上で言うが、日本が乏しいからではないか？」

リネウツチが遠慮がちで言うと、十三朗は笑みを絶やさず彼の答えを否定して言った。

「リネウイツチ將軍、我が国は農作物の豊かな国です。我々日本人は腹が減つても有無を言わず働き続け、誰かのため、国家に尽くす事を美徳としているのです」

と、言いながら十三朗の腹の虫が再び唸りを挙げた。

「將軍、よろしければ一緒に昼食はいかがですか？」

見かねたりネウイツチが言った。

「その言葉を待っていました」

昼食を取りながら、十三朗とリネウイツチは談笑に花を咲かせていた。話しの内容は勿論、それぞれの戦話である。

お互いが共に若き日から戦いを経験し、多くの修羅場を乗り越えてきた事もあり意気投合していた。十三朗はリネウイツチが体験したトルコや列強との死闘の話に興味を抱き、リネウイツチは十三朗の戊辰や西南戦争での無勢が多勢を相手に戦い抜いて勝利を収めてきた武勇伝に胸を踊らせた。

(リネウイツチ將軍の人柄といい、武勇伝といい、話を聞けば聞くほど黒木と同じ性格をしている。二人が対決したらきつといい勝負になるぞこりゃあ)

と、十三朗はリネウイツチが親友の黒木為トモと重なって見えた。

だが、後にリネウイツチと黒木が日露戦争で互いに軍を従えて満

州で幾度となく対決を繰り広げる事になるとは今の十三郎には知る由もなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9920g/>

if 明治興亡記

2011年11月16日23時09分発行